

上塩治横穴群第20・21支群

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書II

1995年3月

教育委員会

出雲工事事務所

上塩治横穴群第20・21支群

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書II

1995年3月

島根県教育委員会
建設省出雲工事事務所

上塘冶铸穴群第21支群第10号冶穴出土金条



序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成3年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の調査を行っています。本書は、平成4年度に発掘調査を実施した遺跡の内、上塙治横穴群第20・21支群について、その調査成果をまとめたものです。

出雲平野は、斐伊川・神戸川の2大河川によって形成された肥沃な土地で、島根県下でも有数の遺跡密集地域であります。今回の調査は、その両河川を結ぶ放水路開削部の内、神戸川との合流部に近い出雲市上塙治町地内の上塙治横穴群第20・21支群について行い、全国でも数少ない古墳時代の金糸を発見するなど、この地域の歴史を解明していく上で重要な成果を得ました。

本書が、多少なりとも地域の埋蔵文化財に関する理解に役立てば幸いに思います。

なお、発掘調査にあたり、建設省出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げる次第です。

平成7年3月

島根県教育委員会教育長

今岡義治

例　　言

1. 本書は、1992（平成4）年度に島根県教育委員会が建設省中国地方建設局の委託を受けて実施した、斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

上塙治横穴群第20支群	島根県出雲市上塙治町半分3096-1番地外
上塙治横穴群第21支群	島根県出雲市上塙治町半分3150番地外
2. 図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系X軸方向を指す。したがって、磁北より $6^{\circ} 50'$ 、真北より $-0^{\circ} 20'$ 東の方向を指している。
3. 調査にあたっては、池田満雄（島根県文化財保護審議委員）、三浦清（島根大学名誉教授）、村上隆（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官）、山本清（島根大学名誉教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）の各先生の指導を得た。
4. 出土遺物及び実測図・写真は、島根県教育委員会で保管している。
5. 掲載図面は、主に林健亮、定方克之、永井宏昌、黒崎康明、金津まり子、永島いづみ、金坂恵美子、釘宮和子、内海紀子、石川真由美、安達裕子、守屋かおる、金森千恵子が作成した。また、写真は、林健亮、定方克之が撮影した。
6. 本書に使用した遺構略号は、SKが土坑、SXが性格不明遺構を表している。
7. 本書は、文化課職員の協力を得て、林が編集した。また、第Ⅴ章を除き、定方の協力を得て林が執筆した。

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の経過	
1・調査に至る経緯	1
2・調査の経過	2
3・調査の組織	3
II 上塩治横穴群第20・21支群の位置と歴史的環境	5
III 上塩治横穴群第20支群の調査	
1・トレンチ調査と調査区の設定	13
2・横穴墓の調査	16
3・その他の遺構について	24
4・上塩治横穴群第20支群出土遺物について	26
IV 上塩治横穴群第21支群の調査	
1・トレンチ調査と調査区の設定	33
2・横穴墓の調査	37
3・その他の遺構について	51
4・上塩治横穴群第21支群出土遺物について	52
V 第21支群第10号横穴墓出土金糸について	77
VI まとめ	
1・遺構について	79
2・遺物について	80
VII 島根県出雲市上塩治10号横穴墓出土金糸の材質と製作技法について 村上 隆	83

挿図・表目次

第1図 調査対象地位置図	1
第2図 斐伊川・神戸川及び調査地位置図	2
第3図 斐伊川放水路事業計画図	6
第4図 出雲市周辺遺跡分布図	7
第5図 斐伊川放水路周辺遺跡分布図	9
第6図 上塩治横穴群第20支群の調査範囲及びトレンチ配置図	13
第7図 斐伊川放水路第14・15トレンチ土層断面図	15
第8図 上塩治横穴群第20支群遺構配置図	16
第9図 第20支群第1号横穴墓閉塞状況	17
第10図 第20支群第1号横穴墓実測図	18

第11図	第20支群第2号横穴墓実測図	19
第12図	第20支群第3号横穴墓閉塞状況	20
第13図	第20支群第3号横穴墓実測図	21
第14図	第20支群第4号横穴墓閉塞状況	22
第15図	第20支群第4号横穴墓実測図	23
第16図	第20支群第5号横穴墓実測図	24
第17図	第20支群第1～5号横穴墓出土土器実測図	25
第18図	第20支群第5号横穴墓出土土器実測図	26
第19図	第20支群出土土器実測図	27
第20図	第20支群出土織文土器実測図	28
第21図	第20支群第1号横穴墓出土鉄劍実測図	29
第22図	第20支群第2号横穴墓出土金属器実測図	29
第23図	第20支群出土石器実測図	30
第24図	上塙治横穴群第21支群の調査範囲及びトレンチ配置図	33
第25図	斐伊川放水路第11・12トレンチ土層断面図	34
第26図	斐伊川放水路第13トレンチ土層断面図	35
第27図	上塙治横穴群第21支群造構配置図	36
第28図	第21支群第1号横穴墓実測図	37
第29図	第21支群第2号横穴墓閉塞状況	38
第30図	第21支群第2号横穴墓実測図	39
第31図	第21支群第3号横穴墓実測図	40
第32図	第21支群第4号横穴墓実測図	41
第33図	第21支群第5号横穴墓遺物出土状況	42
第34図	第21支群第5号横穴墓実測図	43
第35図	第21支群第6号横穴墓実測図	44
第36図	第21支群第6号横穴墓土層堆積状況	45
第37図	第21支群第7号横穴墓実測図	46
第38図	第21支群第8号横穴墓実測図	48
第39図	第21支群第9号横穴墓実測図	49
第40図	第21支群第10号横穴墓実測図	50
第41図	S X 1 実測図	52
第42図	S K 1 実測図	52
第43図	第21支群第1号横穴墓出土土器実測図	53
第44図	第21支群第1・2号横穴墓出土土器実測図	54
第45図	第21支群第3・4号横穴墓出土土器実測図	55
第46図	第21支群第5号横穴墓出土土器実測図	56

第47図	第21支群第6～10号横穴墓出土土器・陶磁器実測図	57
第48図	第21支群出土土器実測図	58
第49図	第21支群出土土器・陶磁器実測図	59
第50図	第21支群第1号横穴墓出土金属器実測図	61
第51図	第21支群第2号横穴墓出土金属器実測図	62
第52図	第21支群第3号横穴墓出土金属器実測図	63
第53図	第21支群第4・5号横穴墓出土金属器実測図	64
第54図	第21支群出土金属器実測図	65
第55図	第21支群出土石器実測図	66
第56図	斐伊川放水路第11トレンチ出土遺物実測図	67
第57図	第21支群第1号横穴墓出土石製品実測図1	68
第58図	第21支群第1号横穴墓出土石製品実測図2	69
第59図	上塩治横穴群第20・21支群測量図	75

表 目 次

第1表	出雲市周辺の遺跡一覧	8
第2表	斐伊川放水路開削部周辺の遺跡一覧	11

写 真 図 版

上塩治横穴群第20・21支群調査前全景	図版 1
斐伊川放水路第14・15トレンチ	図版 2
上塩治横穴群第20支群	図版 3～16
斐伊川放水路第11トレンチ	図版17
斐伊川放水路第12・13トレンチ	図版18
上塩治横穴群第21支群	図版19～38
上塩治横穴群第20・21支群出土遺物	図版39～52
第21支群第10号横穴墓出土金糸	図版53・54
上塩治横穴群第20・21支群付近遠景	図版55・56

I 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を本川中流左岸の来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩治町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより下流は、神戸川の自己流量と斐伊川本川からの分流量を合わせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ（第3図）。この計画は、斐伊川の流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、これに添い、建設省が同51年に確定したものである。ルートの最終決定は同54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は、昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年3月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめ提出した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて上塩治を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら、一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年3月に『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課及び島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成3年1月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成3年4月より発掘調査事業がスタートした。



第1図 調査対象地位置図（●印）

た。

平成4年度には2班体制で調査に着手し、当初、1班が前年度に調査未了となった三田谷Ⅱ遺跡1区（約300m²）の調査を行い、他の1班が開削部半分地区よりトレンチ調査を手掛けることとなった。その後、工事用仮設道の建設を急ぐという事情から、トレンチ調査の結果をふまえ、同年7月より上塩治横穴群第20・21支群の全面調査にかかり、同年12月までに約7,000m²を発掘調査した。

2. 調査の経過

平成3年度、県教委と建設省中国地方建設局とは4月11日付けで委託契約を締結し、同年5月7日より現地調査に着手した。出雲市馬木地区区画整理事業との関連から採上予定地とされた三田谷Ⅱ遺跡のトレンチ調査を行い、続いて本調査2,600m²を予定していた。ところが、仮設道路設置工事のための誤掘削の事後処理や、台風19号による被害のため約300m²を残し、12月25日に終了した。なお、12月9日には、池田満雄・渡辺貞幸両先生を招いて調査指導会を催した。

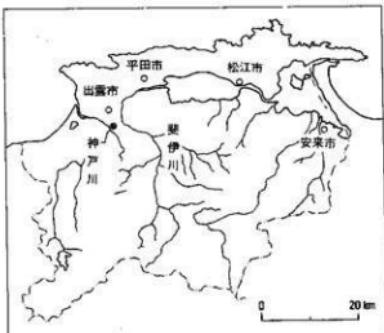
平成4年度は、4月9日付けで委託契約書を交わし、2班体制で5月7日から調査に着手した。調査は、はじめ1班が前年度調査未了となった三田谷Ⅱ遺跡1区の約300m²の調査を行い、他の1班が開削部のトレンチ調査を手掛けることとなった。三田谷Ⅱ遺跡1区の調査では、途中新たに横穴式石室墳が確認され、さらに500m²調査区を広げ、7月31日に調査を終了した。この間、7月21日に三浦清・渡辺貞幸両先生を現地に招いて、調査指導を仰いだ。その後、三田谷より大井谷に抜ける工事用仮設道の建設が急がれるとの事情により、大井谷進入口部分のトレンチ調査にかかった。その結果、広範囲にわたって、遺構・遺物を確認（上塙治横穴群14・15支群、大井谷右切り場跡）したため、直ちに全面発掘に切り替え、約7,000m²にわたって調査を行った。

トレンチ調査を行っていた1班も、工事用仮設道の関係から、7月1日より上塙治横穴群第20・21支群の約7,000m²を対象に全面調査を行った。7月31日には21支群10号横穴墓より金糸が出土し、これについて、11月9日には村上隆先生の調査指導を受けた。12月20日には、両調査現場で現地説明会を開催し、約30名の見学者を集めめた。両調査現場とも12月25日に調査を終了した。

平成5年度は、4月1日付けで委託契約を結び、4月20日から2班体制で調査に取りかかった。この内1班は、上塙治横穴群第16支群・三田谷Ⅱ遺跡2区の発掘調査を10月20日まで行った後、報告書^(註2)の作成にかかった。一方、他の1班は、開削部の約7割の地域を対象にトレンチ調査を行い、12月17日に調査を終了した。また、この年に島根大学^(註3)水域研究センターの協力を得て、神戸川下流の拡幅部（占志・長浜地区）の遺跡確認調査を実施している。

平成6年度も、4月1日付けで委託契約を結び、4月20日から2班体制で調査に取りかかった。本調査は、開削部を中心に1班が沈砂池の必要から三田谷Ⅰ遺跡の谷部を、他の1班が工事用道路の関係から大井谷城跡・上塙治横穴群第7支群の一部・上沢Ⅱ遺跡の調査を実施した。

三田谷Ⅰ遺跡は、調査範囲をA～E区に分け、B区より作業を開始した。三田谷Ⅰ遺跡では、旧河道・井戸跡6・土壤4を確認したほか、巻書土器・木製等を含む、縄文時代から近世までの多量の遺物を採集した。調査期間中の11月29日には木製品について松木哲先生の指導を受けた。他の1班は大井谷城跡から調査を開始したが、第Ⅲ調査区より思いもかけず横穴墓が確認された。このため、上塙



第2図 斐伊川・神戸川及び調査位置図 (●印)

治横穴群第35支群の1穴、第36支群の3穴を合わせ、同時に調査を行った。この間、花田勝広先生の指導を仰いだ。上塙治横穴群第7支群は、大井谷城跡の調査と一部平行しながら6月16日から8月26日にかけて調査を行い大井谷城跡の調査が終了した9月26からは上沢Ⅱ遺跡の調査を開始し、11月15日に終了した。その後、残土処理場（B谷）のアクセス道路建設工事と、古志橋の付替工事に伴う古志本郷遺跡のトレンチ調査を行った。12月6日には三田谷Ⅰ遺跡と上塙治横穴墓群について、池田満雄・渡辺貞幸両先生を招き、調査指導会を開催した。両班とも、12月22日に現地調査を終了した。

本報告書は、平成4・5年度の冬期間に、遺物の実測等を中心とした作業をすすめ、平成6年度に作成した。

3. 調査の組織

上塙治横穴群第20・21支群の現地調査は平成4年度に行い、平成5・6年度に整理・報告書作成を行った。これに関わった各年度の関係者は下記のとおりである。

○平成4年度（1992）

調査指導者 池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、村上 隆（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、三浦 清（島根大学教育学部教授）、山本 清（島根県文化財保護審議会委員）

事務局 目次理堆（文化課長）、勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長）、山根成二（課長補佐）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、有田 寧（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 林 健亮（埋蔵文化財調査センター調査第1係主事）、定方克之（同教諭兼主事）

遺物整理 石川とみ子、太田和子、小村睦子、永田節子、金津まり子、釘宮和子、米海順子、永島いずみ

発掘調査作業員

吉田甫、原博信、伊藤猪造、森脇力、板倉博、安食武雄、北脇光雄、岡文三、飯島鑑、樋野国男、棟石庫七、三原登、石橋真、足立省吉、今岡実、吉田茂、飯国協二、石川恒夫、田中重吉、高橋辰夫、須山林吉、*原幸成、福代寛逸、秋田忠三、和田虎雄、内田勝之、高橋加代子、漆谷澄子、吉田京子、石田好子、矢田絹子、飯国美代子、永田利恵、中島和恵、奥井久子、錦織恵美子、斎藤さち子、村上智子、佐藤益子、佐藤宣美、福代真寿子、東原敬子、柳楽孝子

○平成5年度（1993）

事務局 広沢卓嗣（文化課長）、勝部 昭（埋蔵文化財調査センター長）、山根成二（課長補佐）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、有田 寧（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 林 健亮（埋蔵文化財調査センター調査第1係主事）、定方克之（同教諭兼文化財保護主事）、黒崎康明（同臨時職員）

遺物整理 金坂恵美子、釘宮和子、永島いずみ

○平成6年度(1994)

事務局 広沢卓嗣(文化課長)、勝部 昭(埋蔵文化財調査センター長)、野村純一(課長補佐)、
佐伯善治(課長補佐)、工藤直樹(企画調整係主事)、山本悦子(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 林 健亮(埋蔵文化財調査センター調査第5係主事)、定方克之(同調査第3係教諭兼
文化財保護主事)

遺物整理 内海紀子、石川真由美

なお、調査・整理にあたっては、以下の方々から助言・指導・協力を得た。

菅野章宏(木更津市教育委員会金鈴塚遺物保存館)、種田淳介(兵庫県教育委員会)、望月幹夫(東京国立博物館考古課原史室室長)、山中 理(財団法人白鶴美術館研究員)、千葉県立房総風土記の丘

註1 島根県教育委員会 『出雲・上塙冶地城を中心とする埋蔵文化財調査報告書』 1980年

註2 島根県教育委員会 『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』 1994年

Ⅱ 上塩治横穴群第20・21支群の位置と歴史的環境

島根県出雲市を中心とする現在の出雲平野は、東西を宍道湖と大社湾に、南北を緩やかな山塊に挟まれた沖積平野として形成されているが、現在の地形に定着したのはおよそ江戸時代頃と言われており、それまで西進していた斐伊川が東に流路を変え、宍道湖に注ぐようになってからのことである。

縄文時代の出雲平野は、そのほとんどの部分が海面下であったと考えられ、大社町の菱根遺跡、斐伊川放水路開削部にも掛かる三田谷Ⅰ遺跡など平野の縁辺にわずかに知られるのみである。

弥生時代になると、大社町周辺で、大社境内遺跡や、原山遺跡が知られている。これらの遺跡は、平野の低湿地部分にまで広がりを持つことから、出雲平野西部が、日本海の一部ではなく、湾入した入り海の様相を呈してきた事がうかがわれる。また、矢野遺跡・多聞院遺跡・天神遺跡など大規模な集落遺跡が出現するのもこの時期で、居住地域が出雲平野中央の微高地まで拡大してきた事が解る。近年、線刻により絞を描いた土器が出土した白枝荒神遺跡も天神遺跡から続く微高地上に位置したものである。弥生時代後期になると、斐伊川沿いの西谷丘陵には、突如、西谷墳墓群が出現する。一辻40mを超える四隅突出型墳丘墓を始めとする大墳墓群では、島根大学による西谷墳墓群第3号墓の調査で、吉備型の壺・特殊器台の他、北陸系統とも考えられる土器が出土しており、吉備地城等との関連性も興味深い。他に、弥生時代の墳墓を知る資料としては、天神遺跡での壺棺、矢野遺跡での土坑墓群等が知られるのみで、きわめて少ない。

弥生時代から古代までの約1000年間は、沖積地が拡大しなかったと考えられ、古墳時代になっても、居住地域に大きな変化は見られない。古墳そのものの分布を見ても、古墳時代前期までさかのぼると考えられるものはほとんど見られない。わずかに平野の北偏に位置する大寺古墳と、西偏に位置する山地古墳が知られている。出雲地方での古墳は、一般的に方墳形が多いと思われがちだが、出雲市域に関しては、その初現と思われるものから前方後円墳・円墳であったことが注目される。古墳時代後期に入ると、古墳の数は、激増することになり、出雲市域での生活圏の広がりがうかがわれる。県下最大級の規模を誇る、大念寺古墳を始め、市街地北東部の丘陵縁辺部には多数の古墳が造られるようになる。現在知られている後期古墳の内部主体は、横穴式石室が圧倒的大多数を占め、わずかに箱式石棺が見られる。大念寺古墳は、自然石割石による壮大な横穴式石室を有し、巨大な家形石棺を置いている。また、上塩治築山古墳では、切り石による精美な横穴式石室に巨大な家形石棺を2基も備えている。いずれも豊富な副葬品を持ち、出雲平野全域を支配していた首長であったと思われる。

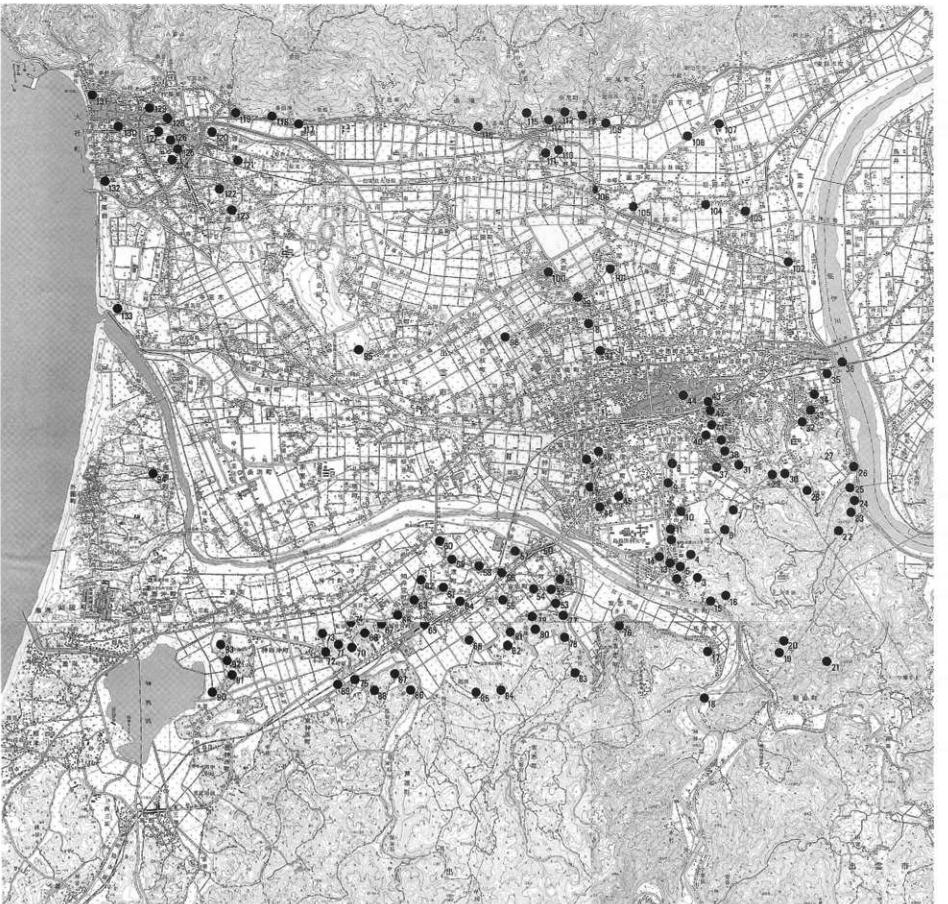
6世紀後半から7世紀に入ると、横穴式石室を主体部とする古墳の消滅にとって代わるように横穴墓が増加する。平野の南側に続く丘陵地帯は、随所で凝灰岩が露出しており、多数の横穴墓が掘られている。多くの場合複数の横穴墓が集まり、横穴墓群を形成しており、単独で存在することは珍しい。横穴墓そのものの構造は6世紀後半より、7世紀前半が中心だが、追葬と言う形で8世紀代まで使用されることも珍しくなく、また、その多くが盗掘され開口している。

古代における資料はけっして多くはないが、仏教の受容にともない仏教寺院や火葬骨を納めた古墓等も出現する。平野の南側丘陵地帯には、県内では数少ない石製藏骨器を備える菅沢古墓・朝山古墓

第3図 美伊川放水路事業計画図 (1:5,000)

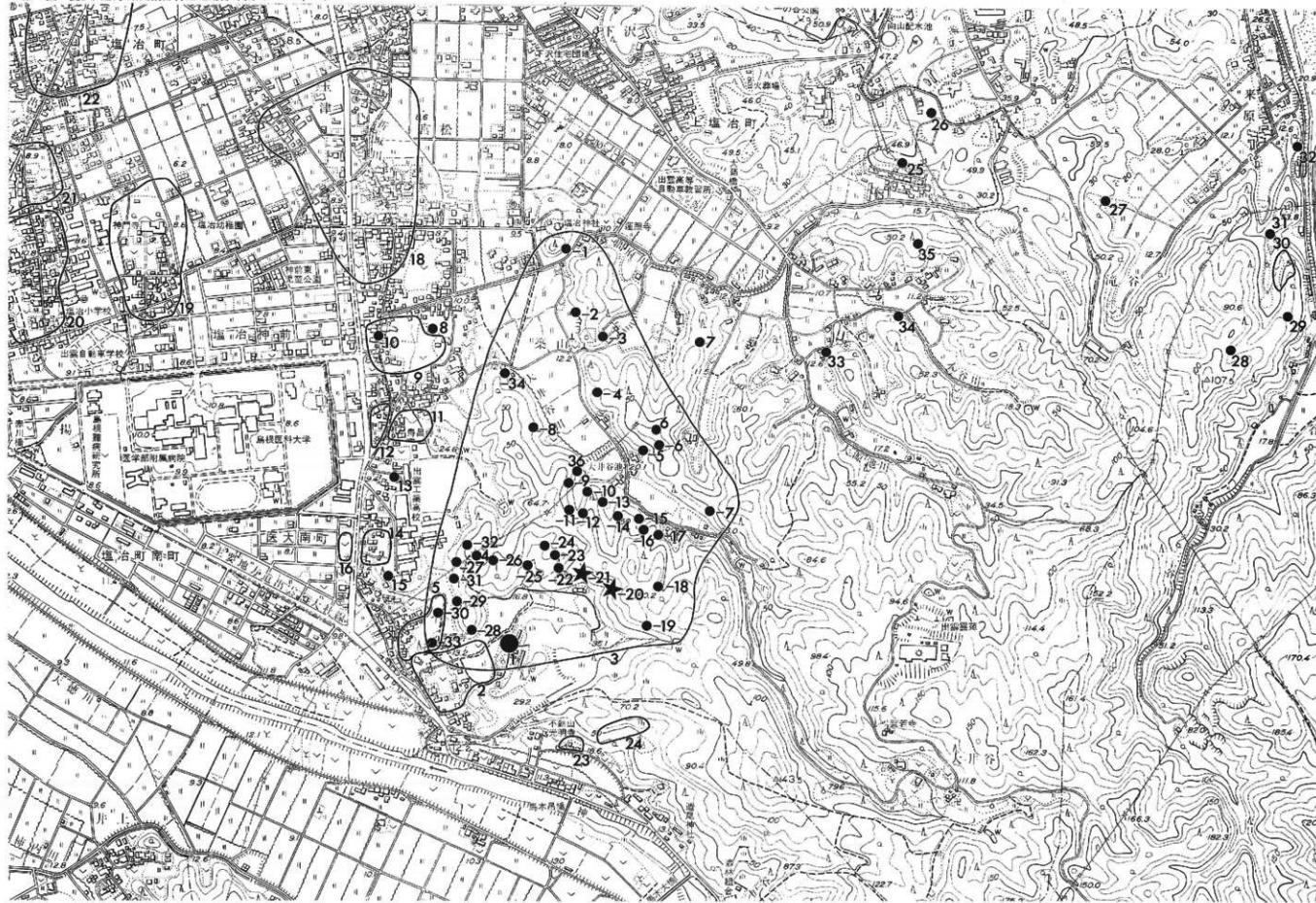


第4図 出雲市周辺遺跡分布図



No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	上塙治横六墓群	横穴墓	49	高西遺跡	散布地	88	閑谷東古墳	古墳
2	三田谷 I 遺跡	散布地	50	佐志本郷遺跡	船跡	89	古居内遺跡	土坑墓
3	三田谷 II 遺跡	古墳地	51	人樺古墳	集落遺跡	90	湖東園山横穴墓群	横穴墓
4	半分城跡	山城	52	恩素御道跡	古墳	91	山地古墳	古墳
5	半分瓦窯跡	瓦窯	53	古志遺跡	散布地	92	山地道路	散布地
6	大井谷城跡	山城	54	田畠遺跡	散落遺跡	93	佐伯神社古墳	古墳
7	舞沢古墳	古墳	55	上組遺跡	散布地	94	上長兵貝塚	貝塚
8	角田遺跡	散布地	56	正連寺北遺跡	散布地	95	馬見峰跡	烽跡
9	宮松遺跡	集落跡	57	引法寺參道付近遺跡	散布地	96	白枝木道跡	散布地
10	上塙治築山古墳	古墳	58	下古志天崎古墳	散布地	97	渡瀬遺跡	散布地
	笠山遺跡	古墳	59	付近遺跡	散布地	98	小山遺跡	集落遺跡
	塙治官館跡	船跡	60	阿陀赤寺古墳遺跡	散布地	99	小山遺跡	集落遺跡
11	有吉寺遺跡	散布地	61	極楽寺守丘近道跡	散布地	100	久野遺跡	船跡
秀吉守西遺跡	散布地	62	東原遺跡	散布地	101	大冢遺跡	散布地	
12	施設古墳	古墳	63	多聞院北遺跡	集落跡	102	狩谷 I 遺跡	古墓
	酒造遺跡	散布地	64	知印多門院遺跡	古墓	103	狩谷 II 遺跡	古墓
	遺跡	散布地	65	芦渡遺跡	散布地	104	狩谷古墓	散布地
	光明寺古墳群	古墳群	66	嘉儀遺跡	散布地	105	高岡遺跡	散布地
17	小坂古墳	古墳	67	比布智船跡	船跡	106	森丘 I 遺跡	散布地
	刈山古墳群	古墳群	68	鶴伊船跡	船跡	107	持川山岸遺跡	散布地
18	那木岩船跡	水路跡	69	親知寺守丘近道跡	散布地	108	里方別所遺跡	散布地
	大井谷遺跡	水路跡	70	親知寺横六墓群	古墓	109	前口遺跡	散布地
19	大坊古墓	古墓	71	浦知寺裏土坑墓	土坑墓	110	里方八石原道跡	散布地
	大坊經冢	經冢	72	山崩一削土裏	横穴墓	111	高岡 II 遺跡	散布地
21	舞澤城跡	城跡	73	横穴墓群	横穴墓	112	石臼古墳	古墳
	横現山横六墓群	横穴墓	74	三成庵宅毛山	横穴墓	113	熊谷見谷跡	散布地
22	横現山古墳	古墳	75	横穴墓群	横穴墓	114	人前山古墳	古墳
	長迫遺跡	散布地	76	東北谷横六墓群	横穴墓	115	蛇山背跡	城跡
24	長迫遺跡	横穴墓	77	真幸ヶ丘西	横穴墓	116	龜谷遺跡	散布地
25	長迫横穴墓	横穴墓	78	横穴墓群	横穴墓	117	西祖古墳群	古墳
26	来安原石窯跡	水路跡	79	マキチノ坂	横穴墓	118	茅根間原跡	開闢跡
	来安原石窯跡	水路跡	80	横穴墓群	横穴墓	119	葵被遺跡	散布地
27	谷谷燒灰群	燒灰群	81	横穴墓	横穴墓	120	乙見燒黑跡	燒跡
	谷谷燒灰群	燒灰群	82	小糸山横六墓群	横穴墓	121	原山遺跡	散布地
28	同前岩遺跡	水路跡	83	中分山遺跡	散布地	122	南原遺跡	散布地
	同前岩遺跡	水路跡	84	東谷 I 遺跡	散布地	123	中分貝塚	貝塚
29	齋木古墳	古墳	85	東谷 II 遺跡	散布地	124	鹿島山遺跡	貝塚
	長迫院跡	寺院跡	86	上井古墳	古墳	125	鹿島山遺跡	貝塚
30	長迫御廟廢寺	寺院跡	87	上井横六墓群	横穴墓	126	鹿島山西山遺跡	城跡
	横現山古墳	古墳	88	放れ山古墳	古墳	127	鹿島山西斜	經冢
31	下坂古墳	古墳	89	放れ山横穴墓群	横穴墓	128	飛光寺跡	寺院跡
	西谷横穴墓	横穴墓	90	放れ山遺跡	散布地	129	越峰城塚跡	里跡
32	山谷橫穴墓	横穴墓	91	宇賀池堤跡	池堤跡	130	御嶺寺古墓	古墓
	山丘丘陵遺跡	散布地	92	妙連寺山遺跡	古墳	131	倪ノ宮台跡	古場跡
33	山丘丘陵遺跡	散布地	93	妙連寺山遺跡	古墳	132	赤堀台跡	古場跡
	神之遺跡	散布地	94	淨土寺山遺跡	古墳	133	鳴原台跡	古場跡
34	神之遺跡	散布地	95	地藏堂北	横穴墓			
	石手遺跡	散布地	96	地藏堂横六墓群	横穴墓			
35	石手遺跡	散布地	97	禦船山横穴墓	横穴墓			
	舞澤川鉄橋遺跡	散布地	98	深瀬山古墳	古墳			
36	舞澤川鉄橋遺跡	散布地	99	浅瀬山古墳	古墳			
	下河合鉄開開切遺跡	散布地	100	横谷古墳	古墳			
37	下河合鉄開開切遺跡	散布地						
38	向山城跡	城跡						
39	下穴遺跡	散布地						
40	久瀬横穴墓	横穴墓						
41	平家丸城跡	城跡						
42	横野祐平窯跡	窯跡						
43	大寺古墳	古墳						
44	驚山古墳	古墳						
45	神門寺境内廐寺	寺院跡						
46	神門寺付近遺跡	寺院跡						
47	丹原遺跡	散布地						
48	天神遺跡	集落遺跡						
49	閑谷東古墳	古墳						
50	古居内遺跡	土坑墓						
51	湖東園山横穴墓群	横穴墓						
52	豪群	豪群						
53	古志遺跡	古墳						
54	田畠遺跡	散布地						
55	上組遺跡	散布地						
56	正連寺參道付近遺跡	散布地						
57	引法寺參道付近遺跡	散布地						
58	下古志天崎古墳	古墳						
59	付近遺跡	散布地						
60	阿陀赤寺古墳遺跡	散布地						
61	極楽寺守丘近道跡	散布地						
62	東原遺跡	散布地						
63	多聞院北遺跡	集落跡						
64	知印多門院遺跡	古墓						
65	芦渡遺跡	散布地						
66	嘉儀遺跡	散布地						
67	比布智船跡	船跡						
68	鶴伊船跡	船跡						
69	親知寺守丘近道跡	散布地						
70	親知寺横六墓群	古墓						
71	山崩一削土裏	土坑墓						
72	横穴墓群	横穴墓						
73	小糸山横六墓群	横穴墓						
74	中分山遺跡	散布地						
75	東谷 I 遺跡	散布地						
76	東谷 II 遺跡	散布地						
77	上井古墳	古墳						
78	上井横六墓群	横穴墓						
79	放れ山古墳	古墳						
80	放れ山横穴墓群	横穴墓						
81	放れ山遺跡	散布地						
82	地藏堂横六墓群	横穴墓						
83	禦船山横穴墓	横穴墓						
84	御田谷遺跡	散布地						
85	御田谷横六墓群	横穴墓						
86	淺柄古墳	古墳						
87	淺柄南古墳	古墳						
88	閑谷古墳	古墳						

第5図 斐伊川放水路開削部付近遺跡分布図（1:10,000）



No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	三田谷Ⅱ遺跡	古墳地	-18	第18支群	横穴墓	7	曾沢古墳	古 墳	27	間府岩植跡	水路跡
2	三田谷Ⅰ遺跡	散布地	-19	第19支群	横穴墓	8	上塙治築山古墳	古 墳	28	権現山横穴墓群	横穴墓
3	上塙治横穴墓群	横穴墓	☆20	第20支群	横穴墓	9	築山遺跡	集落遺跡	29	権現山古墳	古 墳
-1	第1支群	横穴墓	☆21	第21支群	横穴墓	10	塙治判官館跡	範 跡	30	長廻遺跡	散布地
-2	第2支群	横穴墓	-22	第22支群	横穴墓	11	寿昌寺遺跡	散布地	31	長廻横穴墓	横穴墓
-3	第3支群	横穴墓	-23	第23支群	横穴墓	12	寿昌寺西遺跡	散布地	32	来原岩植跡	水路跡
-4	第4支群	横穴墓	-24	第24支群	横穴墓	13	地藏山古墳	古 墳	33	上沢Ⅱ遺跡	石切場跡
-5	第5支群	横穴墓	-25	第25支群	横穴墓	14	半分遺跡	散布地	34	上沢Ⅲ遺跡	散布地
-6	第6支群	横穴墓	-26	第26支群	横穴墓	15	半分古墳	古 墳	35	上沢Ⅳ遺跡	土 墓
-7	第7支群	横穴墓	-27	第27支群	横穴墓	16	出雲工業西遺跡	散布地	36	白石谷遺跡	石切場跡
-8	第8支群	横穴墓	-28	第28支群	横穴墓	17	池田遺跡	散布地			
-9	第9支群	横穴墓	-29	第29支群	横穴墓	18	宮松遺跡	集落遺跡			
-10	第10支群	横穴墓	-30	第30支群	横穴墓	19	神門寺付近遺跡	散布地			
-11	第11支群	横穴墓	-31	第31支群	横穴墓	20	塙治小学校付近遺跡	散布地			
-12	第12支群	横穴墓	-32	第32支群	横穴墓	21	弓原遺跡	散布地			
-13	第13支群	横穴墓	-33	第33支群	横穴墓	22	高西遺跡	散布地			
-14	第14支群	横穴墓	-34	第34支群	横穴墓	23	光明寺南遺跡	散布地			
-15	第15支群	横穴墓	4	半分城跡	城 路	24	光明寺古墳群	古 墓			
-16	第16支群	横穴墓	5	半分瓦窯跡	窯 路	25	曾沢古墓	古 墓			
-17	第17支群	横穴墓	6	大井谷城跡	城 路	26	長者原魔寺	寺院跡			

が存在する。7世紀前半に横穴式石室を主体部に築造されたと考えられる小坂古墳では、追葬時に石櫃が埋設されている。この石櫃には緑青の付着が認められ、銅製骨蔵器が納められていたと推定される。また、普沢古墓にほど近い西谷丘陵では、須恵器製骨蔵器の採集があり、火葬の広まりを示している。

その創建が県内最古級にさかのぼると考えられる神門寺境内廃寺では、軒丸瓦下端に突起を備える、いわゆる水切り瓦が多く出土する。この瓦は、広島県三次市の寺町廃寺を中心に吉備地域に広く分布することが知られており、吉備地域との交流がうかがわれる。平野の北辺に位置する大寺廃寺では、単弁四弁蓮華文軒丸瓦が採集されているが、この瓦は、瓦当面の傷から松江市の四王寺跡の瓦と同範であることが確認されている。斐伊川放水路予定地のすぐ近くに位置した長者原廃寺では、単複弁蓮華文を持つ特徴的な軒丸瓦が採集されている。

中世に入るとこの地域に於いては、塩治氏の存在が著名となる。このためか、平野の南北を走る丘陵地帯には、多くの山城が存在し、平野内にも居館跡推定地が多く存在している。このうち、半分城跡・大井谷城跡の一部が発掘調査を行われている。

中世の集落跡の調査は少ないが、矢野遺跡では、中世の遺物が数多く出土しているほか、長浜貝塚では、しじみ貝を中心とした中世の貝塚が発見された。中世の墳墓としては、龍泉窯系青磁が出土した荻原古墓が知られている。

上塩治横穴群は、現在140基余りが知られる県内最大級の横穴墓群である。この横穴墓群の存在は、1956年に門脇俊彦氏、池田満雄氏により8支群21基が紹介されたことに始まる。この横穴墓群の位置は出雲市上塩治町大井谷であったことから、当時「大井谷横穴群」と呼称された。その後、島根県教育委員会等による数度の分布調査・試掘調査により、さらに多数の支群が発見されるに至った。それら横穴墓の分布は、大井谷のみにとどまらず、神戸川を眼下に望む県立出雲工業高校付近にまで拡大し、もはや「大井谷横穴群」と呼べるものではなくなってしまった。建設省・島根県により斐伊川・神戸川治水計画が進められるのに伴い、1980年に島根県教育委員会が刊行した「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」ではこの事実をふまえ、「上塩治横穴群」の名称を使用し、この時点で32支群107基が確認されるに至った。⁽²²⁾

本格的にスタートした斐伊川放水路開削事業では、この大横穴墓群の中央を横切ることになり、現在に至るまで調査が繰り返されているが、1994年末現在では、36支群145基を数えるまでに至っている。

註1 出雲市教育委員会 「西谷墳墓群」 1992年

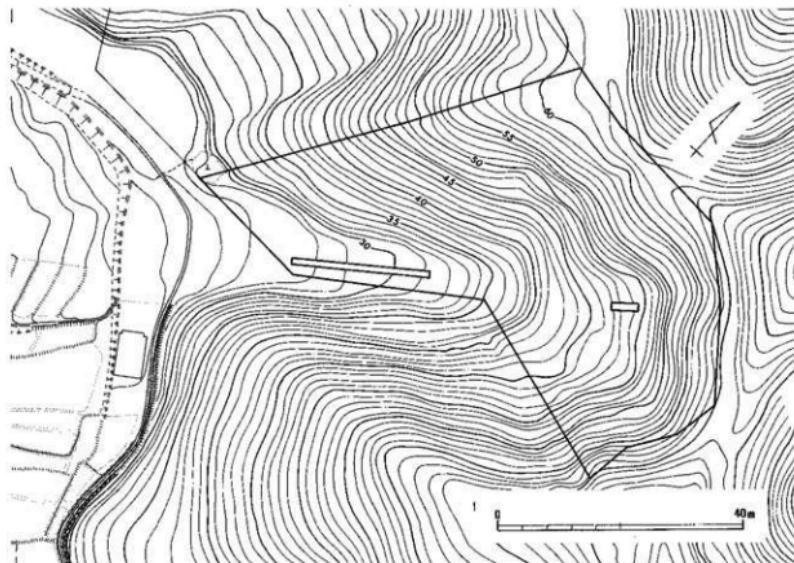
註2 門脇俊彦「上塩治横穴群」『山陰・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』
島根県教育委員会 1980年

III 上塩治横穴群第20支群の調査

1. トレンチ調査と調査区の設定

上塩治横穴群は、上塩治町半分から大井谷にかけて、36支群145基が知られているが、その数は、調査の度に増えており、総数150基以上はあるものと思われる。この内、上塩治横穴群第20支群は、出雲市南郊、上塩治町半分に所在し、上塩治横穴群の中では、南よりに位置している。昭和54年に一部発掘調査の行われた第22支群⁽¹⁾ 同様 西側の三田谷に面した狭い谷の最も奥にあたる。当初2基の存在が知られていたが、1975年に島根県教育委員会が行った試掘調査の結果、さらに3基の存在が確認され、5基以上の支群として理解されていた。調査前の状況は、雑木林となっていたが、横穴墓群前面は、やや傾斜の緩やかな部分があり、畠地として利用されていた可能性がある。周辺の伐採を行った時点で、3穴の開口が認められ、工事対象区域南端近くまで横穴墓群の広がりが推定された。横穴墓そのものの数は、全面調査時に明らかになるので、この時点では確認していない。開口した横穴墓より上方は、すぐに尾根にあたることから、トレンチ調査は遺構の下方方向への広がりを確認することに努めた。このことより、20支群下方の谷中には第14トレンチを、横穴墓前面に第15トレンチを設定し、掘削を開始した。

第14トレンチは標高39mから33mの位置で、重機を使用しながら幅2m長さ12mにわたって掘削し



第6図 上塩治横穴群第20支群の調査範囲及びトレンチ配置図 (1 : 800)

た。この位置は、第20支群のある谷の最も深い部分にあたり、崩落土中の多量の遺物の存在が予想された。約1mある埋土の大半は、斜面上方からの崩落土と考えられる。東側は、斜面上方より岩盤が続いていたが、西側では、青色のしまった粘質土が見られ、これらを地山面と判断した。中程では地山面直上で黒色土が見られたが遺構は検出できなかった。黒色土中から小量の須恵器片が出土している。

第15トレンチは横穴墓直前の標高50mから45mの位置に、幅2m長さ5mについて人力で掘削した。埋土は約40cmと薄く、埋土中より大型蛤刃石斧の破片が出土した。東側にあたる斜面上方では、横穴墓から続く岩盤が見られ、地山面より下方に向けて大きく下っている。砂岩質と見られる地山面直上からは須恵器・土師器の小片が出土した。第15トレンチ付近は、比較的傾斜が緩く、横穴墓以外の遺構が存在する可能性も考えられたが、出土遺物は石斧を除き、いずれも横穴墓の時期に近いものであった。第15トレンチの西側は斜面が急激に落ち、第14トレンチ付近の凝灰岩岩盤に続いているが、北側では、一部で砂岩質の地山が露出しており、地山面の複雑な堆積が予想された。

トレンチを設定していない北側尾根部は、横穴墓が横に向かって連続しているため当初より、調査区に含めることを考えていたが、北隣の第21支群側でのトレンチ調査により砂岩質であり、横穴墓は存在しないことが予想されていた。しかし、前年度の分布調査時に尾根上で須恵器小片が採集されており、尾根上の祭司が行われた可能性が指摘されたため、調査区に含めることにした。

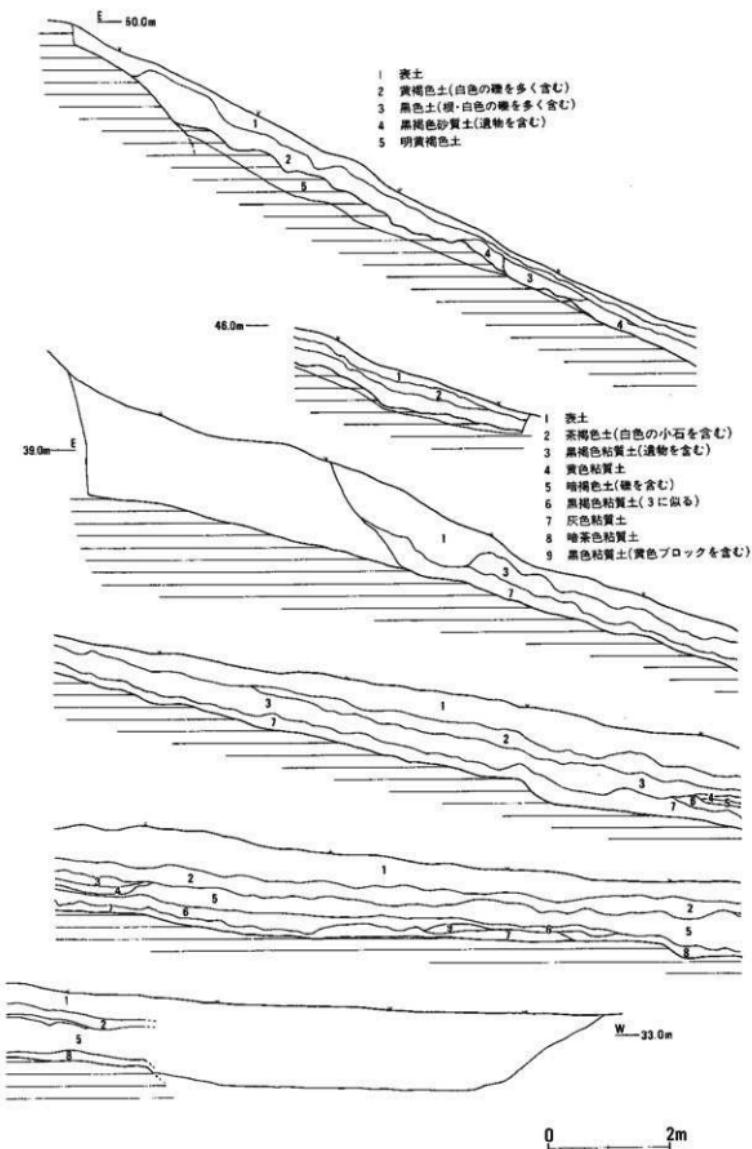
同様の理由により、横穴墓直上の、東側尾根上にも、調査終了後にトレンチを設定し、掘削したが、尾根上では赤褐色を呈す砂質土が非常に厚く見られ、この土が地山と考えられる。表土も非常に薄く、遺構・遺物はまったく見られなかった。

第14・15トレンチの状況より、横穴墓下方部分には、遺構の広がりは見られないものの、遺物は、横穴墓下方の広い範囲に散在していることが確認できた。このため、丘陵西斜面のほぼ前面に渡り調査区を設定することとなった。

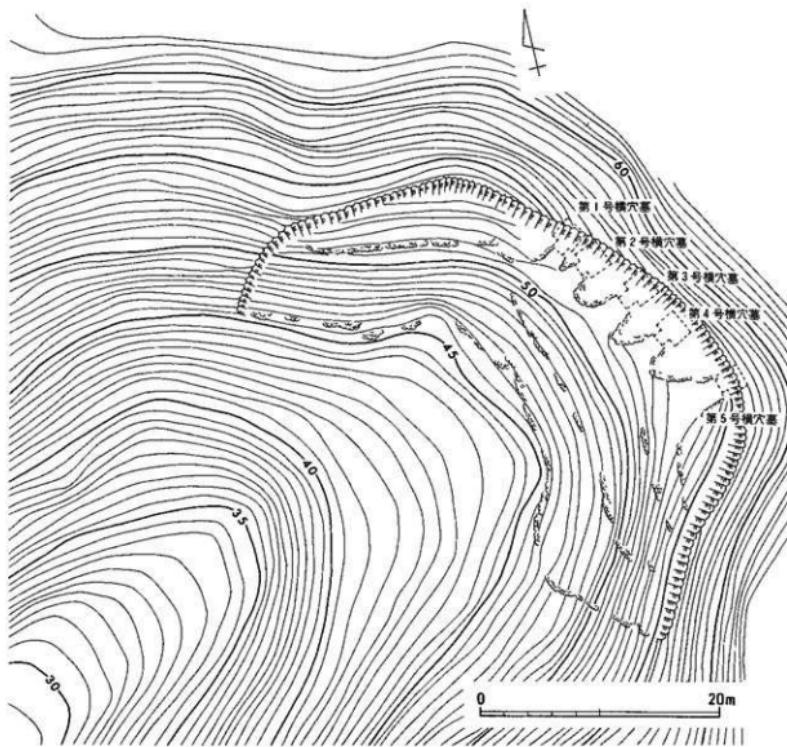
トレンチ調査の結果を受け、表土中にはほとんど遺物を含まないことから、全面調査にあたっては、重機により表土掘削を行った。横穴墓付近は、急斜面で、わずかな表土が凝灰岩の岩盤上に薄く被った状態になっており、重機で木の根等を撤去すると、完全に地山が露出してしまった。この時点で、完全に開口してしまった横穴墓もあり、明確な落ち込みとして確認された部分を含め、横穴墓5基を確認した。

この5基の横穴墓は、1980年までに紹介されていた5基に一致するものである。凝灰岩岩盤が露出する部分のほぼ中央に横並びに、5基が並んで見られ、2段になった部分は見られない。第8図に示すように凝灰岩の岩盤が露出する範囲はきわめて広いが、横穴墓そのものは、その中心の狭い範囲にある。同年度に現地調査を行った大井谷側の第14・15支群では、あたかも岩質の良いところを探して掘削したかのようにまばらに分布していたが、三田谷側の20~23支群では、ほぼ一列に並んで分布しており対象的である。

第14トレンチ付近の凝灰岩は南側の斐伊川放水路開削部外側に向かって続いている。東側は、凝灰岩の岩盤が露出していたが、急斜面で、亀裂が多く、横穴墓の分布は認められない。また北側には、凝灰岩は続いておらず、砂岩質の脆い地山が露出していて、横穴墓は見られなかった。尾根の先端に



第7図 斐伊川放水路第14・15トレンチ土層断面図 (1 : 80)



第8図 上塩治横穴群第20支群造構配図（1：800）

は、近代の墓地があり、既に移転されている。

2. 横穴墓の調査

トレーンチ調査等の結果により、この支群の横穴墓は5基存在すると断定し、5基の横穴墓について北側より、第1号横穴墓・第2号～第5号横穴墓と呼び掘削を開始した。表土をはがすと広い範囲で凝灰岩の岩盤が露出し、5基とも開口した。閉塞石は見えず、炭門が開いたことから全て盗掘を受けたものと推定された。横穴墓は標高50～55mの間に一列に分布し、他の場所には見られない。また、この付近は傾斜がきつく、各横穴墓とも前庭部を広く探ることはできない。横穴墓の掘られている部分は、凝灰岩のほぼ一枚岩であるが、横穴墓前面より下方は脈が多く入っている。また、凝灰岩そのものも小石のような不純物を非常に多く含んでおり、北隣に位置する第21支群の岩質に比べても非常に悪い。

第1号横穴墓

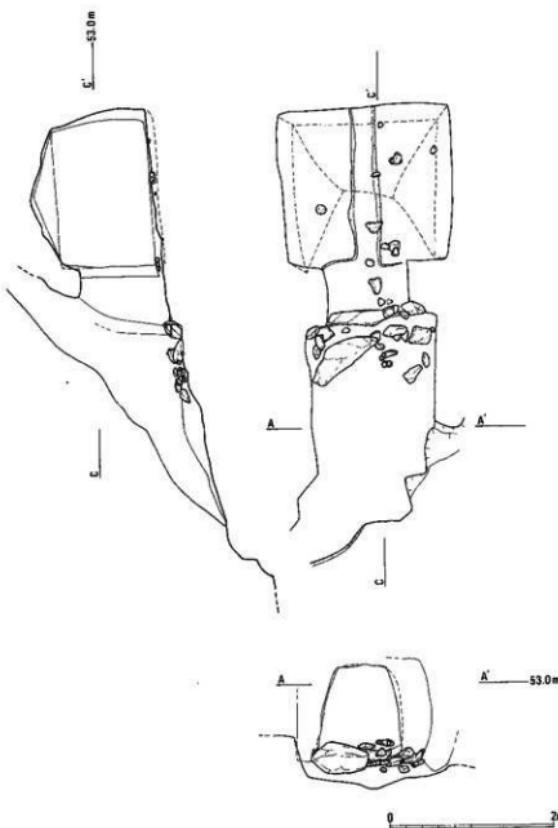
第1号横穴墓は、第20支群中のもっとも北側に位置する横穴墓で、玄室床面の標高は、約52.5mを測る。

第1号横穴墓は、すでに埋土の大半が失われており、羨門の上部約 $\frac{1}{3}$ が開口していた。前庭部床面上から完形を呈する太刀（M-1）が出土しており、かなり徹底した盗掘が行われていることが予想された。土層断面では、表土が途切れる事なく玄室奥まで続いている、残存する閉塞石を覆った土は、玄室内の埋土を切っている事から、開口した後の堆積と考えられる。

閉塞石は、一部が残存していたが、それによると、一抱えもある大きな自然石を積み上げたようで、玄門付近に加工痕のある石材は存在しない。閉塞石の一部と見られる石は、玄室内にも見られたが、盗掘時に破碎し、混入したものであろう。前庭部の幅は約1.5m、長さ約2.8mの比較的狭長な形状で、排水溝は見られない。前庭部奥には、前述した閉塞石の一部が見られる。

羨道部は、全長約0.5m、幅約1m、高さ約1mで、羨門部の掘り込みが僅かに残る。

玄室の立面形は、四注式平入り形状である。天井までの高さは約1.6mで、大人が立つと頭が支える。玄室平面は、奥行き約2.2m、羨道近くで幅2.0m、奥壁付近で約2.2mを測る台形を呈している。棟との鉛直方向に2面のベッドが作り出されており、それぞれ、幅約1m、高さ約15cmを測る。棺の痕跡は見られない。玄門より向かって左側のベ

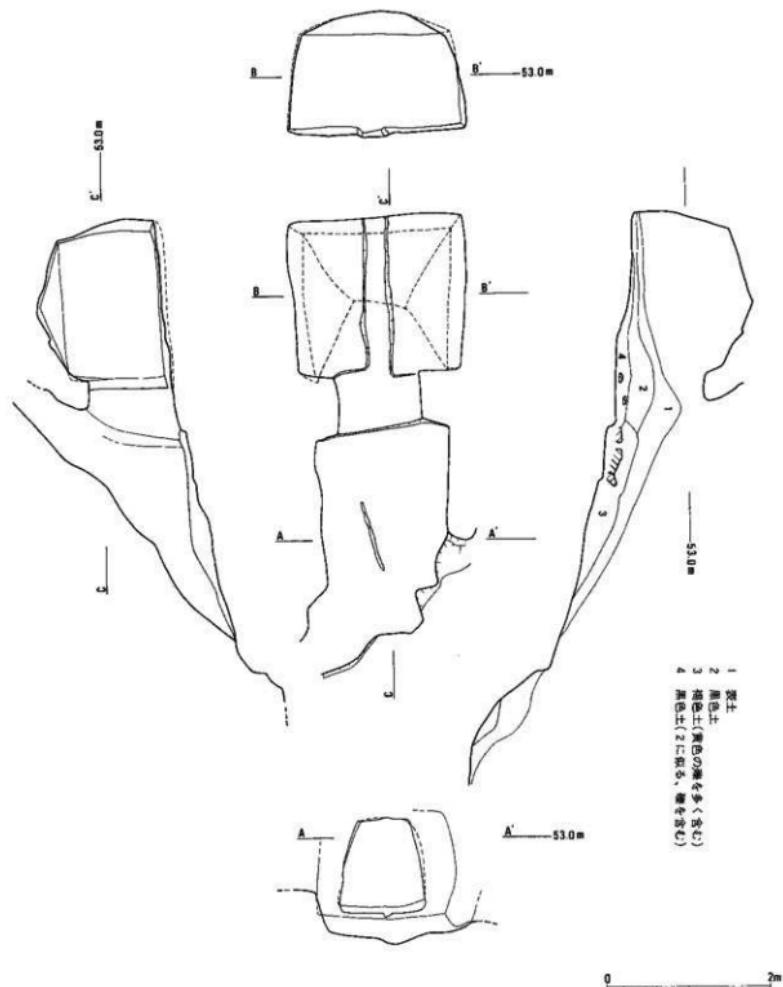


第9図 第20支群第1号横穴墓閉塞状況（1:60）

ツド上で須恵器蓋（SU-1）が出土している。

第2号横穴墓

第2号横穴墓は、第1号横穴墓の南側に隣接した僅かに下方、標高約51.5m付近に位置している。この辺りは、非常に斜面のきつい位置で、このために前庭部はほとんど長さをもっていない。確実に前庭部と判断される平坦面は、僅か1.5mしかなく、その先は、ごつごつした岩の亀裂が続いている。



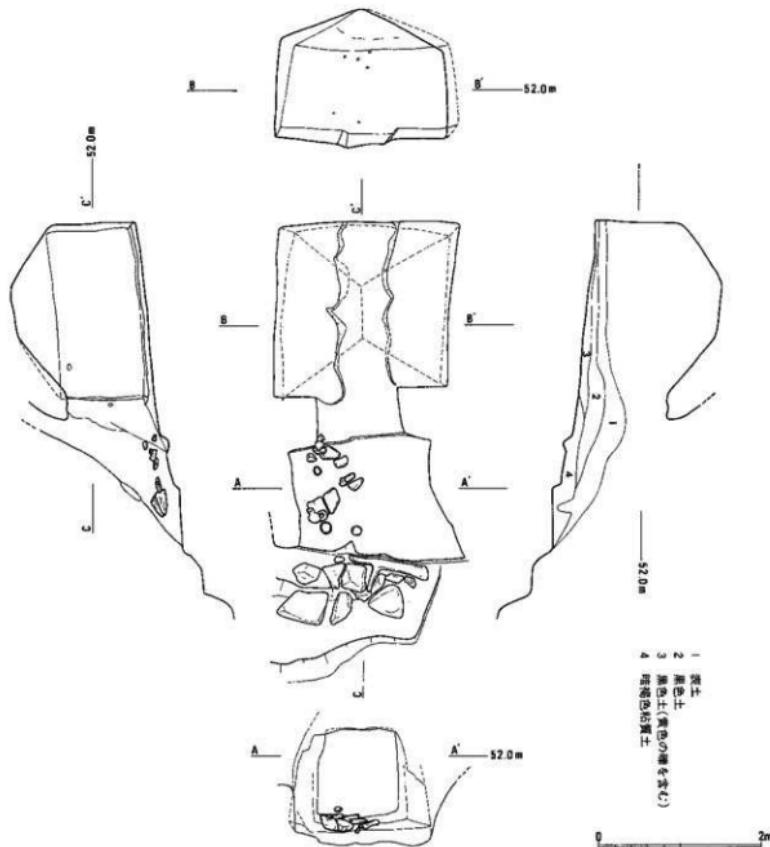
第10図 第20支群第1号横穴墓実測図（1：60）

埋土は、ほとんど流失しており、伐採を行った時点ではほぼ完全に開口した。

前部は、幅約1.7mを測り、前述の通り、全長に対して幅の方が広い。玄門近くに拳大から人頭大の石が見られ、閉塞石の一部と推定される。羨道部は幅約1m、長さ約0.5m、高さ約1m、を測るが、玄室主軸に対し、僅かに南に振っており、いびつな印象を受ける。玄室は、一辺約2.2mを測る、ほぼ正方形だが、床面・壁面とも造作が雑で、荒れた印象である。第1号横穴墓と同様に2面のベッドが作り出されている。玄室内は、高さ約1.8mあり大人が立つ事ができる。立面形は四注式で、妻入り構造である。

第3号横穴墓

第3号横穴墓は、1・2号横穴墓から僅かに離れた、標高約51.5m付近に位置している。伐採時点



第11図 第20支群第2号横穴墓実測図 (1 : 60)

では、窄みとして確認されていたもので、この支群では、唯一埋没していた横穴である。閉塞石も、玄門の約1/2を塞いであり、第20支群中もっとも残りが良いと判断されるものであった。

前庭部は、幅約2m、長さ約3mでやや狭長な印象を受ける。前庭部玄門側に高さ10cm程の段があり、幅約50cmから1mのテラスを造り出している。このテラスの手前、玄門から約70cm離れた位置から排水溝が延びている。排水溝は、幅約10cm程の断面箱形を呈す構造で、わずかに西に蛇行している。閉塞石と思われる砾は、テラス上に集中しており、この排水溝はあたかも、閉塞後に掘削したかのような印象を与える。

後道部は幅約1mだが、玄門直前の前庭部幅が約1.8mしかないため、広く感じる。長さ約1m、高さも約1mを測る。

玄室は長さ約2.1m、幅約2mを測るほぼ正方形を呈する。四注式妻入り形状を呈し、高さは約1.6mである。天井と壁面の

境には、浅い溝を備え、

天井部と側壁が面違いに

なっている。第1・2号

横穴と同様に幅約80cmの

ベッドを主軸と併行に2面備える。

第4号横穴墓

第4号横穴墓は、標高約52.5mに位置する。前庭部・玄門は比較的小規模であった。全長約1.7

m、幅約1.5mを測る。前庭部には、幅約20cmの溝がT字形に延びている。

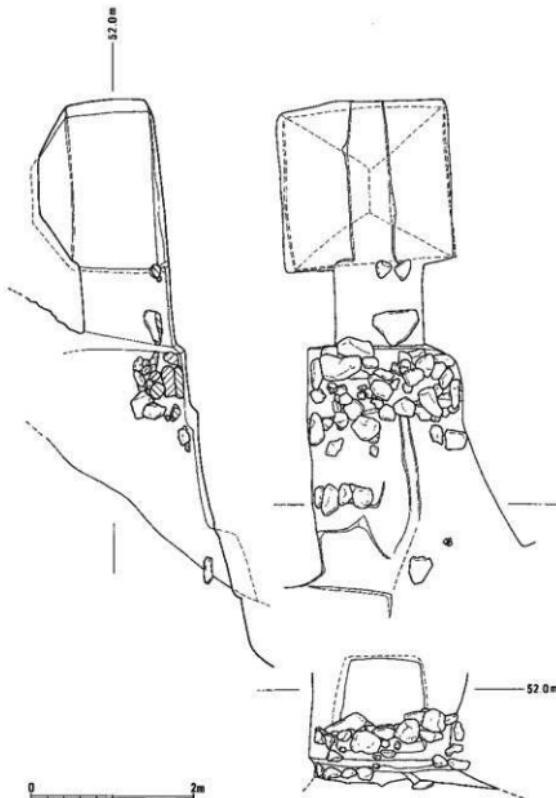
玄門直前では、あたかも閉塞石を据えたかのように彫り込まれているが、閉塞石には自然石が使わ

れたようである。閉塞石は、盜掘時に破壊された

ようで、玄室内にも多くが散乱していた。羨道は、

全長約70cm、高さ約1mで、幅は、約1mを測る

が、玄室に向けてやや広がる。

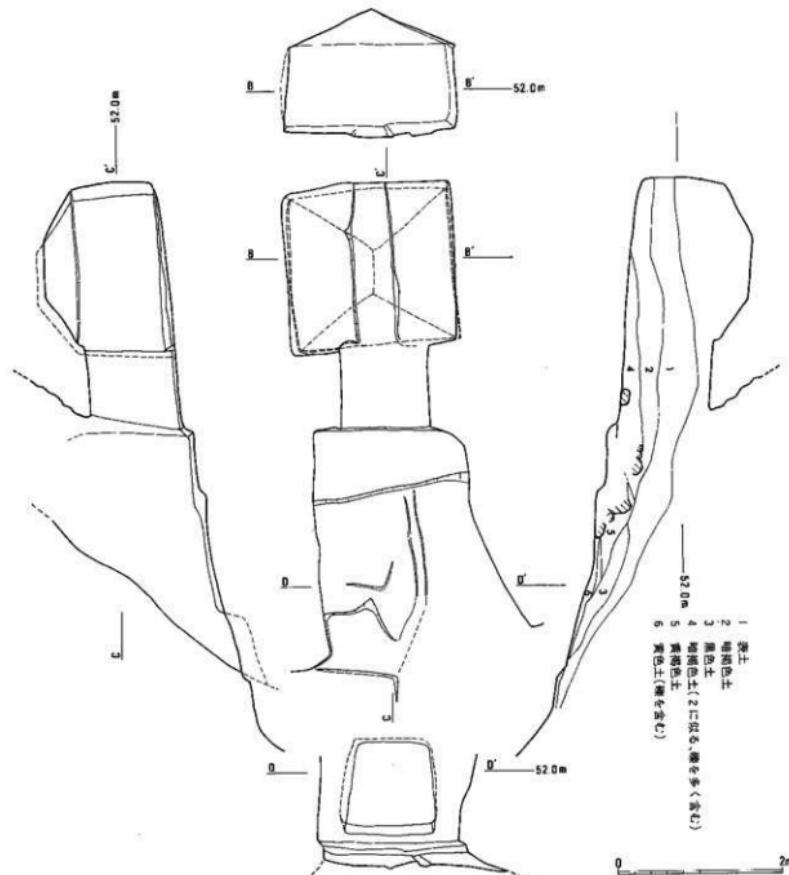


第12図 第20支群第3号横穴墓閉塞状況 (1:60)

がっている。玄室の平面形は、扁形とも言えるような形状で、羨道側で幅約1.7m、奥壁側で約2.5mを測り、奥壁右側から側壁の間は、明確なコーナーを持たない。各界線は、一応彫られてはいるものの、途切れがちで、いびつである。四注式を意識した形状を呈し、平入りである。天井までの高さは、約1.5mを測る。ベッドは持たない。

第5号横穴墓

第20支群中最も南に位置する横穴墓で、玄室の標高は、約53mを測る。幅約1.6m、長さ3mを測る前庭部には、中央と両脇に3本の排水溝が設けられている。中央のものは、幅約30cmの断面V字形を呈すしっかりしたものだが、左右の排水溝は、断面V字形を呈している。前庭部先端では、須恵器甕



第13図 第20支群第3号横穴墓実測図 (1 : 60)

(SU-17.18) が破片となって集中的に出土した。これには、多少の土が咬んでおり、墓前祭祀によるものと言うよりは、盗掘時のものであろう。渓門から玄室にかけては、拳大から人頭大の自然石が散乱しており、これが閉塞石と思われる。羨道は、幅約1m、長さ約60cm、高さ約1mである。玄室の平面形は、ほぼ正方形だが、南壁が約1.9mを測るのに対し、北壁が約2.2mあり、北側が広い。四注式妻入り形状だが、天井と壁の界線は一部で互い違いになるなど複雑である。各界線は、溝状に産んでいる。前庭部中央の排水溝は、そのまま玄室内まで延びており、ベッドを作り出している。

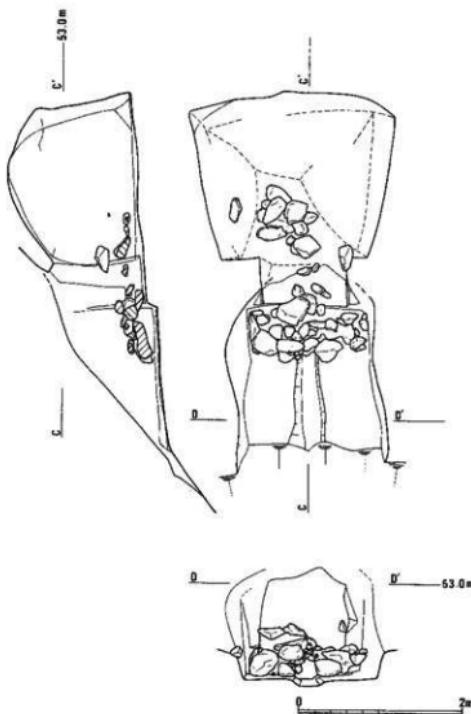
第5号横穴墓の前庭部北側には、岩盤斜面を「コ」の字形の溝で区画した場所が見られる。溝中にはのみ痕が見られ、横穴墓と同様の工具で掘られているが、現状のまでは機能的には意味をなさない。掘られた形から、方形の板石を切りだそうと

しているか、立面方形に横穴を掘ろうとしているように見える。これは、新たな横穴墓の掘削途上で放棄されたものか、切り石による閉塞石を切り出そうとしたことが考えられる。

安来市の臼コクリ遺跡では、掘削途上で放棄された横穴墓が検出されている。臼コクリ遺跡は、花崗岩台地に掘られた16基からなる横穴墓群で、石棺を内包する横穴墓があるなど優れた遺物を出土している。このうち、N-10号横穴墓が掘削途上の横穴塞で、花崗岩中に前庭部を造り、玄室を掘ろうとした段階で、硬い流紋岩の岩盤にあたったため、放棄したものと考えられている。

また、出雲東部から鳥取県西部にかけての横穴墓群には、小横穴と呼ばれる施設が付属することがある。鳥取県西伯郡西伯町のマケン掘横穴墓群⁽¹³⁾では、4基の小横穴が検出されている。それらは、主たる横穴墓の前庭部左側側面に掘られており、奥行き1m未満の小さなものである。マケン堀横穴墓群では、横穴墓を小型化した施設と考え、小児埋葬施設として考えている。

上塩治横穴群では、第21支群で、第1号横穴墓の隣に、断面楔形の小横穴(SX-1)が掘られている。この施設が、マケン堀横穴墓群で小横穴と呼ばれている施設なのか、掘削途上で放棄されたも



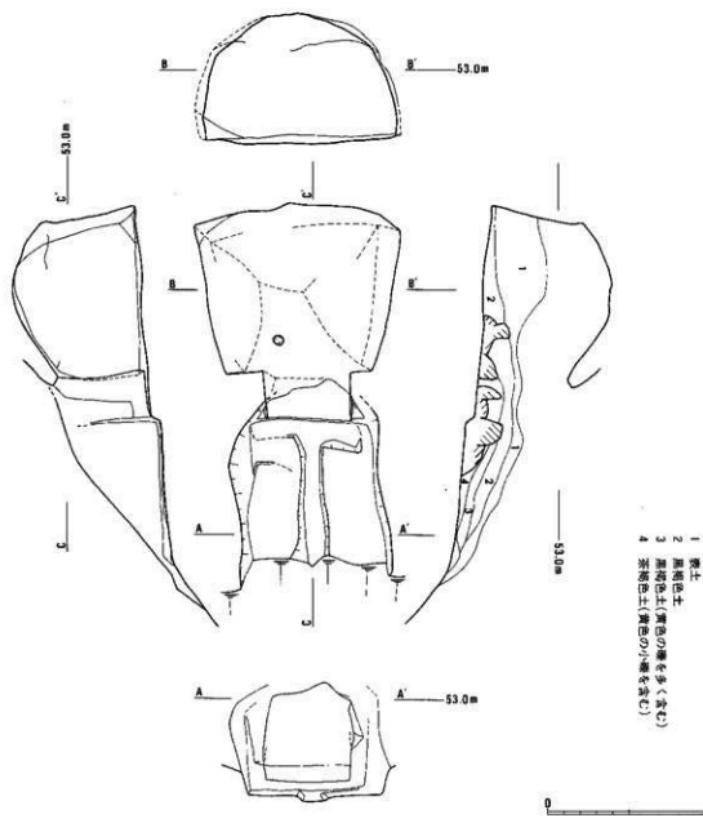
第14図 第20支群第4号横穴墓閉塞状況(1:60)

のかは分からぬ。

後述する第21支群では、第8号横穴墓と第9号横穴墓の前庭部に切り合い関係が見られた。しかしながら、これはかなり特殊な状況であり、他の横穴墓に切り合い関係の見られる箇所はない。第20支群では、全ての横穴墓が盗掘を受けており、封土が非常に薄く、堆積状況によっても先後関係をうかがうことはできない。須恵器をはじめとする出土遺物もきわめて少なく、時期差に付いて言及することは不可能である。

横穴墓間で、何らかの差を示すものが存在するとしたら、玄室形態しかない。上塩治横穴群での玄室形態は、従来四注式妻入りが多く、一部にドーム形が見られると説明してきた。しかし、第20支群では、四注式平入りの横穴墓（第1・4号横穴墓）が2基確認された。

第1号横穴墓は、玄室平面形が、ほぼ正方形を呈しており、他の横穴墓と大きな変化は見られない。

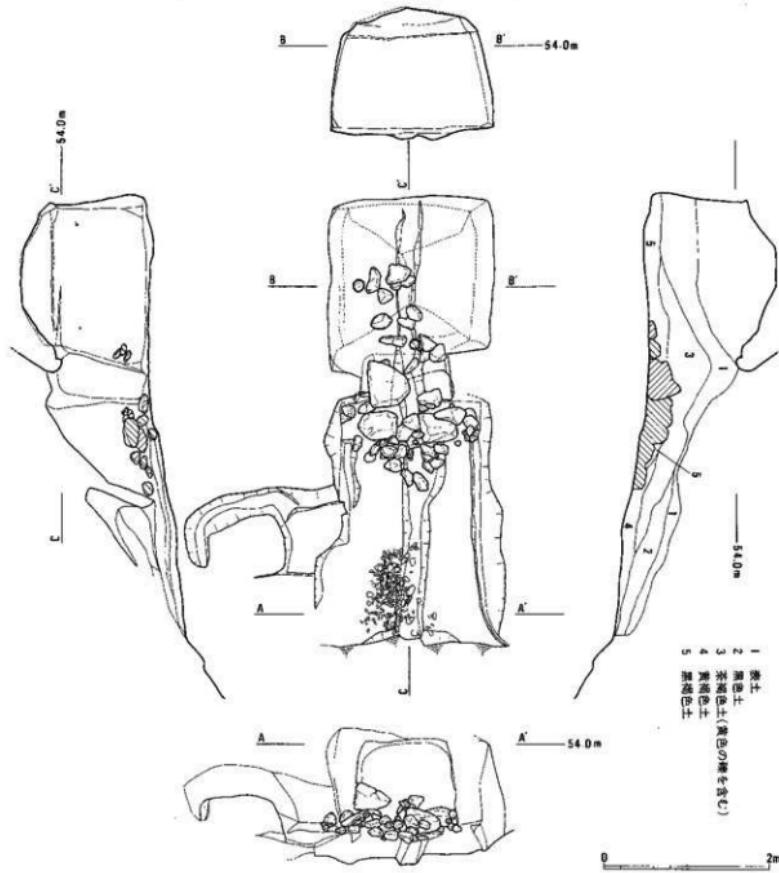


第15図 第20支群第4号横穴墓実測図 (1 : 60)

前庭部から、玄室の平面形まで全て同一の規格で造られているのに、軒線方向だけが異なっている。また、第4号横穴墓は、あたかも途中で設計変更したかのように、平面形・天井形態ともいびつである。後述する墓道と思われる施設が、この第4号横穴墓付近までしか続いていないことも合わせ、この支群の中で、特異な存在となっている。こうした変化が、時期差を示すものとは、即断できないが、一連の同一支群中にあっても、こうした差が存在することは注目に値する。

3. その他の遺構について

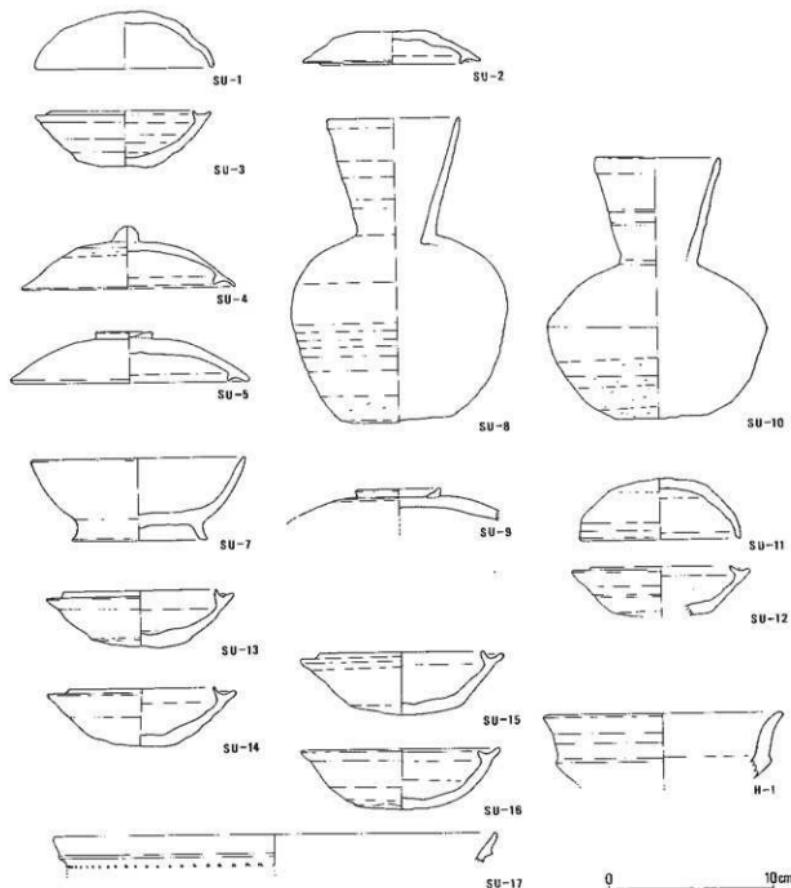
第5号横穴墓の南側の岩盤には、円形の彫刻が施されている。直径約10cmの円内を彫りくぼめたものと、直径約12cmの輪の形に彫ったものの2例がある。輪の部分の幅は約2cmである。この彫刻が施



第16図 第20支群第5号横穴墓実測図 (1 : 60)

されている部分の下方には、岩盤の斜面にわずかに平らな部分が見られ、墓道が存在した可能性がある。この彫刻付近には、遺物は見られず、この彫刻が施された時期はもちろん、人工のものであるかどうかも不明である。

この部分のすぐ近く、第5号横穴墓から南側の標高55m付近は、他の部分に比べ、等高線の間隔が広くなっている。南側の岩盤上では、人が歩けるほどの平坦面が確かに存在し、墓道が存在した可能性が考えられる。調査区南端では急斜面となって、平坦面は消滅しているが、岩盤が露出している部分には一応続いており、それによると、調査区南端付近から始まり、第5号横穴墓前庭部の下を通り、

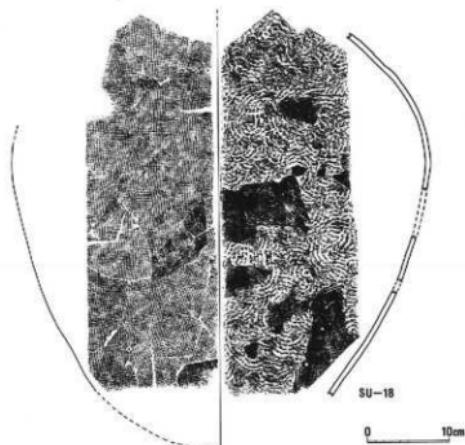


第17図 第20支群第1～5号横穴墓出土土器実測図（1：3）

第3・4号横穴墓の前庭部直前まで続いている。現状では凝灰岩の風化が著しく、道とは言いがたいが、偶然とは考えにくい。

横穴墓群下方の掘削

横穴墓下方の斜面は、比較的埋土が厚く、須恵器を中心に大量の遺物が出土した。前述の通り、横穴墓群前面の標高40~45m付近は、他の部分に比べると極端に傾斜が緩くなってしまっており、何らかの遺構の存在が予想されたが、確認できなかった。この部分から出土した遺物は、大半が古墳時代の遺物であったが、石斧（ST-1~3）、等の古墳時代以前の遺物の他、縄文土器片（J-1）1点を採集している。



第18図 第20支群第5号横穴墓出土土器実測図（1：6）

4. 第20支群出土遺物について

土器類

第1号横穴墓からは、須恵器2点が出土している。SU-1は口径107mm、器高35mmを測る蓋で、内面に×印のヘラ記号を持つ。

SU-2は、口径85mm、器高20mmの返りを持つ蓋である。頂部には強い回転ヘラケズリが施されるが、つまみの痕跡はない。当初壊身の可能性も考えていたが、器高がなく、組み合う蓋が想像できることから蓋とした。

第2号横穴墓からは、5点の須恵器が出土している。SU-3は、壊で、組み合う蓋は見あたらなかった。全面ナデ調整されている。

SU-4・5は、返りを持つ蓋である。SU-4は擬宝珠状の、SU-5は、輪状のつまみを持つ。SU-7は、高台のつく壊で、SU-4・5に組み合うものと思われる。体部は、緩やかに内湾し、しっかりした高さ9mmの高台を持つ。

SU-8は高台の無い長頸壺で、体部下端からケズリ痕を強く残している。底部は回転ヘラ切りである。

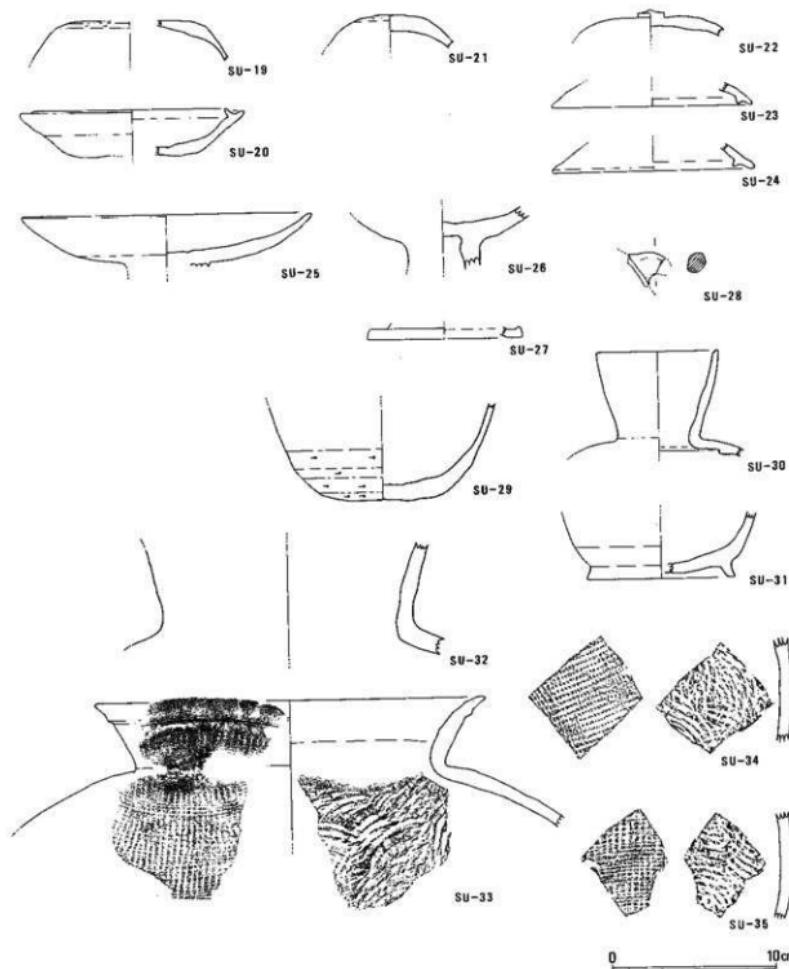
SU-9は、蓋の小片で、輪状つまみがつく。端部の形態は、おそらく消滅直前の小さな返りを持つものであろう。

第3号横穴墓は、出土遺物が少なく、図示できるものは、SU-10しか無かった。SU-10は、長頸壺で、SU-8に比べ、体部が低く張った形態を呈す。体部下半から強いヘラ削りを残し、底部は、回転ヘラ切りである。

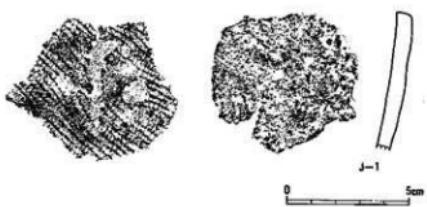
SU-11～14は、第4号横穴墓から出土した。SU-11は蓋で、天井部にわずかにケズリ痕を残す。口縁部内面にわずかにアクセントを持つ。SU-12～14は、返りを持つ壺で、底部には、わずかにケズリの痕跡を残す。SU-14の底部内面には、ヘラ記号(×)を持つ。

第5号横穴墓は、第20支群中では、遺物量が比較的豊富であった。SU-15・16は、返りを持つ壺で、SU-16は、底部にわずかにケズリを残している。

SU-17・18は、前庭部先端で集中して出土した甕で、同一個体と思われる。口縁部外面に櫛描き



第19図 第20支群出土土器実測図 (1 : 3)



第20図 第20支群出土縄文土器実測図（1：2）

波状文を施し、体部外面は、平行タタキ、内面は同心円文の押さえ具の痕跡が残る。器高60cm以上あるものと思われる。

H-1は、第5号横穴墓の前庭部から出土したものではあるが、明らかに横穴墓に伴うものではない。口径142mmに復元できる二重口縁を持つ甕で、小片となって3点が出土した。体部の形状は不明だが、突出部はわずかに上を向く。直下で大きく外反する口縁部は、端部に小さな面を持つ。器壁が非常に厚く、淡褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。

遺構に伴わない須恵器類は、第19図に示した。SU-19・21は、蓋である。いずれも頂部にケズリ痕を残している。いずれも完形ではないが、SU-21は、小型化したものであろう。

SU-20は环で、全面をナデ調整する。SU-22は、擬宝珠状つまみを持つ蓋で、口縁部の形態は不明である。全面をナデ調整する。

SU-23・24は、蓋の口縁端部で、退化した小さな返りを持つ。いずれも復元口径100mm前後になる。

SU-25・26は、高杯で、いずれも緩やかに内湾する体部を持つ。「すかし」等は分からぬ。SU-27は、小型の高杯の脚部である。

SU-28は、提瓶の把手である。提瓶と考えられる確実な個体はこれ以外に出土していないが、SU-30は、体部と頸部の繋ぎ方に特徴があり、提瓶と考えられ、同一個体の可能性がある。

SU-29は長頸壺の底部であろう。体部下半に強いケズリ痕を残している。

SU-31は、高台を持つ底部の小片である。体部が厚く、壺であろうか。

SU-32は、壺の頸部の小片である。破片の最上部には沈線の一部が残っており、頸部の長い、沈線・波状文を施した大型の甕であろう。体部外面は、頸部に近い位置のため、ナデが入り、タタキの痕跡は見えない。体部内面には、同心円文の押さえ具の痕跡を残している。

SU-33は、甕の口縁部付近の破片である。口縁部外面には、櫛の跡が残る。体部外面には、平行タタキを交互に施した後、横方向にカキメが加えられる。内面は、同心円文の押さえ具の痕跡を残す。

SU-34・35は、第14トレンチから出土した甕の体部である。いずれも外面には平行タタキを交互に行い、カキメを施す。内面は、同心円文である。以上の遺物はいずれも横穴墓から落ちてきたものと考えられる。

J-1は、第20支群表土中から出土した。外面には縄文を、内面は荒いナデで仕上げている。体部中央の小片であるため、時期は分からぬ。第20・21支群では、縄文時代の遺物は他に見られない。また、下方の第11トレンチでも条痕地の深鉢は、見られるものの、縄文を持つものは見られない。第11トレンチの遺物は疊層中からの出土であったため、石器の検出そのものが困難であったこともあるが、古い様相を示す石器は出土していない。

その他の遺物

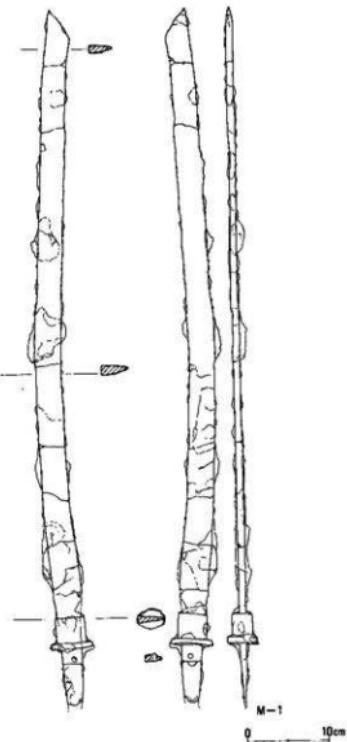
第20支群では金属器の出土はきわめて少なく、わずかに2点が見られるだけである。横穴墓の調査にあたっては、玄室内の土は全て洗浄もしくはふるいに掛けるなどして微少遺物の採集に努めたが、玉類なども確認できなかった。

M-1は、第1号横穴墓で出土した太刀である。柄は、残存していない。茎端が欠損しており、全長はうかがい知ることができない。刀身部も随所で膨らんで板状に剥げかかった場所が見られる。残存長841mm、推定刀身幅33mm、推定厚12mm前後と思われる。刀身は、刃部側に向かって大きく反っている。関は、背側に確認できる。茎は残存長105mmを測り、断面長方形を呈する。関から51mmの位置に目釘が残っており、目釘穴は1箇所であった。鈔は、鏃と共に正常な位置からわずかにずれている。鏃は、長さ31.5mm、長径34.5mmを測り、断面梢円形を呈する。鈔は梢円形を呈し、装飾は見られない。厚さ6mm、長径45mm、短径35mmを測る。

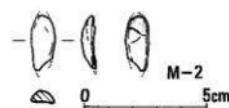
M-2は、第2号横穴墓玄室内から出土した。木葉形をした小さなもので、基部と思われる部分が欠損している。残存している部分には、緑青が浮いており、材質に銅の成分が含まれていることが分かる。残存長22mm、幅9mmあり、4mmの高さに湾曲している。厚さは約1mmである。欠損した基部の部分に吊るすような造作が在ったものと想像されるが、現状では、用途は不明である。

ST-1~3は、第15トレンチ及び、第20支群黒色土中から出土した、大型蛤刃石斧である。破片となつて3個体が出土したが、それぞれは接合しない。

ST-1は、残存長86mm、幅45mm、厚さ29mmで、刃部長39mmを測る。刃部は、下端ではなく片側側縁に延びている。黒灰色を呈す石材を使用している。ST-2は、大型蛤刃石斧の刃部付近の小片である。残存長39mm、残存幅35mmを測る。緑色の石材を使用している。ST-3は、大型蛤刃石斧基部で、刃部は残っていない。残存長144mm、幅50mm、厚さ42mmを測る。側面を中心多くの敲打痕が見られ、敲石に転用されているようである。ST-2と同様の緑色の石材を使用しているが、接合しない。付近では、弥生土器は出土していない。



第21図 第20支群第1号横穴墓出土鉄剣実測図(1:6)
M-1 10cm



第22図 第20支群第2号横穴墓
出土金属器実測図(1:2)
M-2 5cm

第20支群で出土した遺物は、上記の通りである。前述の通り、遺物の絶対量が非常に少ない。第3・4号横穴墓では、須恵器すら少量しか出土していないのである。

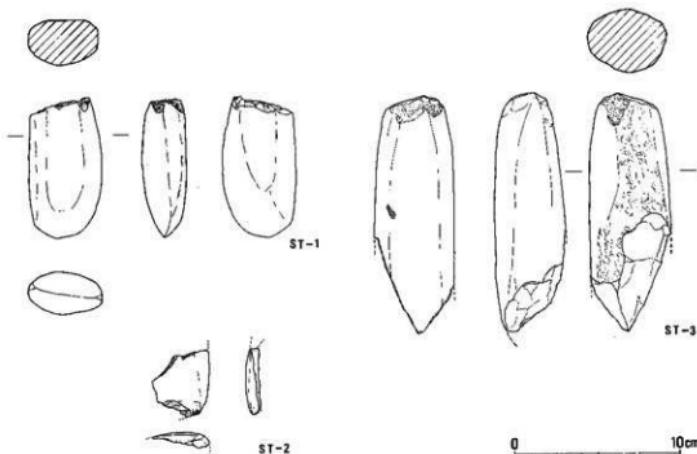
第1号横穴墓では、前庭部ながら大刀（M-1）が出土している。当然、盗掘によって、この位置に移動したのであろうが、第1号横穴墓の被葬者は、少なくとも大刀を所持していたことになり、他の副葬品を所持しなかったとは考えにくい。また、出土した2点の須恵器には、形式差が見られるところから、追葬が行われていたことも予想される。これらのことから、第20支群ではかなり徹底した盗掘が行われたと想像される。

後述する第21支群にも同様のことが言えるが、出土遺物に装飾品が見あたらない。全ての横穴墓について、玄室を中心に掘削土をふるいに掛け、微小遺物の採集に努めたが、耳環・玉類は1点も出土しなかった。

註1 門脇俊彦 「上塩冶横穴群」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会 1980年

註2 島根県教育委員会 『白コクリ遺跡・大原遺跡』 1994年

註3 西伯町教育委員会 『マケン堀古墳群 北福王寺遺跡』 1990年



第23図 第20支群出土石器実測図 (1 : 3)

標図番号 図版番号	出土位置	器種	法 量	色 調・胎 土・焼 成	備 考
SU - 1	第30支群 1号横穴 (前庭部)	壺蓋	口径107mm 器高34.5mm	灰白色1mm程度の砂粒を含む良好	内面天井部ナデ その他は回転ナデ 天井部(内側)にヘラ記号×あり(完形)
SU - 2	1号横穴 (前庭部)	壺蓋	口径85mm 器高20mm	暗灰色 1mm程度の白色の砂粒を含む 良好	天井部外側にケズリ痕を残す 天井部内面ナデ その他は回転ナデ 平底な天井部(ほぼ完形)
SU - 3	20支群 2号横穴 (前庭部)	壺	口径87mm 器高35mm	良好 暗灰色 白い1~5mm程度の石を含む	立ちあがりは内傾し低い 回転ナデ
SU - 4	2号横穴 (前庭部)	壺蓋	口径106mm 器高38mm	明灰色 1mm以上の砂粒含む 良好	ツマミはナデ 内面回転ナデ 外側面ヘラ削りの後回転ナデ(完形)
SU - 5	2号横穴 (前庭部)	壺蓋	口径121mm 器高31.5mm	灰褐色~淡青灰色 2mm以下の白色の砂粒を多く含む 良好	天井部に輪状つまみ 口縁端部内面にかえりをもつ 回転ナデ(ケズリの痕をよく残す)
SU - 7	2号横穴 玄室内	壺	口径129mm 器高50.5mm 底径52mm	灰褐色1~2mm程度の白い砂粒含む 良好	深腹形 底部に比較的高い高台 内面回転ナデ 外面ナデ
SU - 8	2号横穴 (前庭部)	長颈 壺	口径80mm 器高187mm	灰褐色~青灰色 良好 白色の微細粒をわずかに含む	底辺に火打さきあり 体底部外側 頸部は直線的に外傾する ハサナフによるヨコジマ(その他は回転ナデ)
SU - 9	2号横穴	壺蓋	口径	明灰色(内面重ね擦痕)外側は暗灰色 白色の砂粒をごくわずかに含む 良好	内面を重ね焼の跡が残る 天井部に輪状つまみ 天井部外側 回転ヘラ切り 外側ケズリの後回転ナデ
SU - 10	3号横穴	長颈 壺	口径74mm 器高160.5mm	暗灰色 白い粒を含む 良好	底部回転ヘラ切り 体底部下方にケズリ その他は回転ナデ 頸部と肩部の境がわずかにとび出している (接合痕?) 底部にわずかに窪着あり 頸部は直線的に外傾する 沈縫2条(完形)
SU - 11	4号横穴	壺蓋	口径97mm 器高38mm	灰褐色~淡茶色 白い粒黒い粒を少し 含む 良好	天井部外側にケズリの痕をわざかに残す 内面はナデ その他は回転ナデ 外間にロクロ目(遺存5%以上)
SU - 12	4号横穴 (前庭部)	壺	口径85mm	淡褐色 1mm弱の白い粒を含む 良好	立ちあがりは内傾して伸び比較的低い 回転ナデ(遺存5%以下)
SU - 13	4号横穴 玄室内	壺	口径91mm 器高34mm	暗灰色4mmまでの白い砂粒を含む 良好	底部外面にヘラを残す 底部内面はナデ その他は回転ナデ(完形) 立ちあがりは内傾しやや低い
SU - 14	4号横穴	壺	口径89mm 器高35.2mm	青灰色 1mm程度の白い砂粒を含む 良好	立ちあがりは内傾してのアト 内面はナデ 底部内面にヘラ記号×(完形) 立ちあがりは内傾しやや低い
SU - 15	20支群 5号横穴	壺	口径98mm 器高39mm	灰色 白い粒黒い粒を多く含む 良好	立ちあがりは内傾しやや低い 底面内面ナデ その他回転ナデ(完形、接合)
SU - 16	20支群 5号横穴 玄室内	壺	口径95mm 器高37mm	灰白色 白色の砂粒を含む 良好	底部外側にケズリ痕を残す 底部内面ナデ その他は回転ナデ 立ちあがりは内傾し受到よりも低い(5%以上)
SU - 17	5号横穴 №144 (前庭部)	壺	口径271mm	外黒褐色 内面灰白色 細かな白い粒を含む 良好	複合口縁 口縁部にくし書き波状文 回転ナデ(5%以下)
H - 1	5号横穴 (前庭部)	壺	口径142mm	明灰褐色3mmまでのガラス質を含む 良好	複合口縁部に外反気味で突出部の縁は純い 突出部の縁下に落痕ナデ? その他はヨコナデ 前期(小谷以前)(5%以下)
SU - 18	5号横穴 (前庭部)	壺		淡青灰色 密2mm以下の砂粒を少量含む 良好	(遺存5%以上)
SU - 19	20支群 黑色上中	壺蓋	残高25mm	暗灰色 1mm前後の砂粒含む 良好	上部外側 ヘラ削り 外部側面 回転ナデ 内部ナデ
SU - 20	20支群 麦土中	壺	口径114mm	灰褐色 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	底部内面ナデ その他回転ナデ 立ちあがりは内傾し低い
SU - 21	20支群 黑色土中	壺蓋		青灰色白色 0.5mm程度の砂粒を含む 良好	天井部外側にケズリ その他の回転ナデ 天井部内面にヘラ記号×
SU - 22	20支群 黑色土色	壺蓋	残高17mm	外白灰色 内白灰色 1mm以下の砂粒を含む 良好	低めの底突状つまみをもつ つまみナデ 外面回転ナデ 内側ナデ
SU - 23	20支群	壺蓋	口径105mm	淡褐色 細かな砂粒を含む 良好	回転ナデ
SU - 24	20支群	壺蓋	口径97mm	灰褐色(表面は灰かぶり) 細かな細粒を含む 良好	回転ナデ
SU - 25	20支群	高壺	口径176mm	灰白色 1mm程度の白い粒を含む 良好	底部内面ナデ その他回転ナデ 底部はゆるやかに内傾し低い
SU - 26	20支群 黑色上色	高壺		内面灰褐色 外面黒褐色 細かな砂粒を含む 良好	

擲出番号 図版番号	出土位置	器種	法 量	色 調・胎 土・焼 成	備 考
S U - 27	20支群	高环	底径94mm	灰褐色 微砂粒含む 良好	
S U - 28	20支群 黒色土中	提瓶		暗褐色 白色の微砂粒をわずかに含む 良好でよく焼きしめられている	
S U - 29	20支群 黒色土中	壺	残高58.5mm	明灰色 1mm以上の砂粒を含む 良好	外面へラ削り 内面底部ナデ その他の凹凸ナデ
S U - 30	20支群 黒色土中	提瓶	口径72mm	灰褐色 1mm程度の砂粒を含む 良好	回転ナデ
S U - 31	20支群 黒色土中	壺?	底径90mm	灰褐色 細かな砂粒を含む 良好	底部回転へラ切り 高台をつける
S U - 32	20支群 黒色土中	壺	残高69mm	外(頸は黒色、胴体灰色)内暗灰色 1mm程度の砂粒含む 良好	頸部分がナデ 内面に同心円押当具痕 %以下
S U - 33	20支群 黒色土中	壺	口径240mm	外灰白色 内淡青灰色 密 良好	口縁部は外反 口縁部内外面 回転ナデ 外面平行多き 内面円弧押当具痕
S U - 34	14トレンチ	壺		暗灰色 白色砂粒含む 良好	要胸部の小破片 外面平行多き 内面円弧押当具痕
S U - 35	14トレンチ	壺		暗灰色 白色砂粒含む 良好	要胸部の小破片 外面平行多き 内面同心円押当具痕
J - 1	20支群 表土中			赤褐色 1mm前後の白色の砂粒を含む 良好	ヨリ被土器
M - 1	1号横穴 前庭部	直刀	残存長841mm 幅33mm 厚さ12mm		鈎・目釘等が残存 鋸は位置がずれている
M - 2	2号横穴 玄室内	不明	残存長22mm 幅9mm 厚さ4mm		施り金具か 緑青が浮く
S T - 1	20支群 表土中	石斧	長さ62mm 幅46mm 厚さ27mm	黒色ガラス状質含む	
S T - 2	15トレンチ	石斧		緑色ガラス状質含む 固い	
S T - 3	20支群 表土中	石斧	長さ147mm 幅49mm 厚さ42mm		

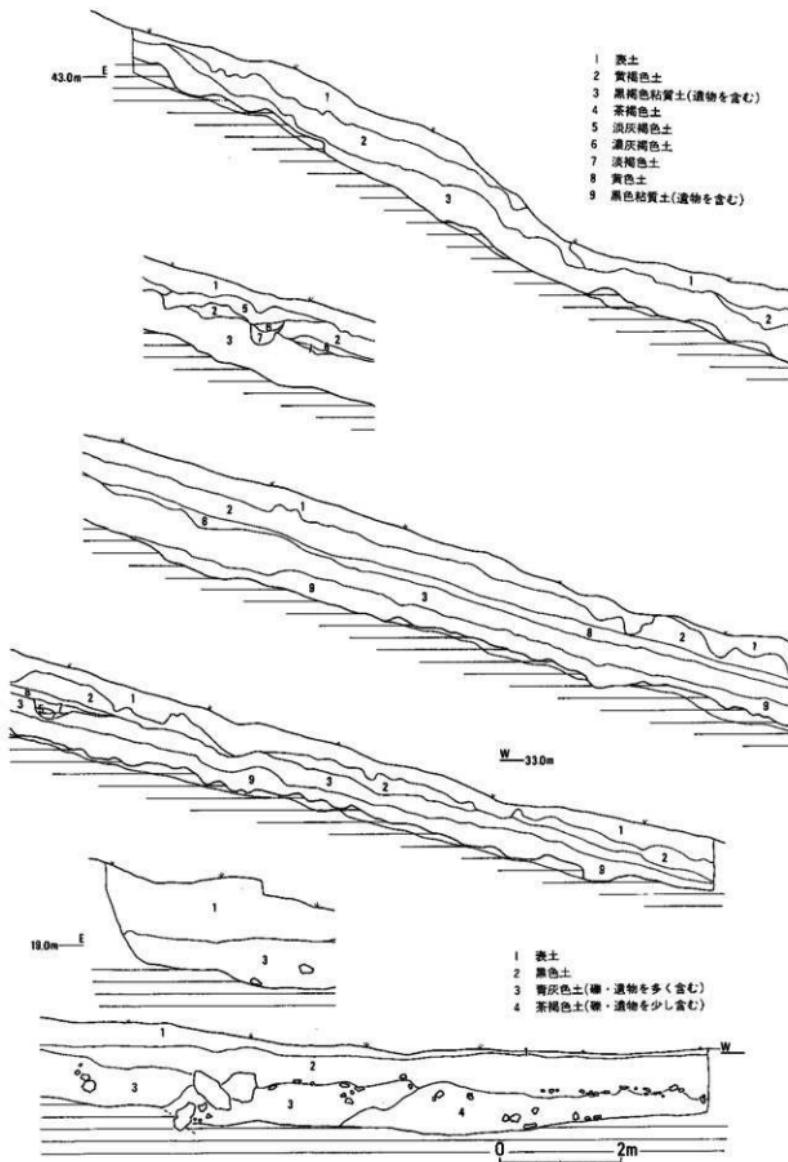
IV 上塩治横穴群第21支群の調査

1. トレンチ調査と調査区の設定

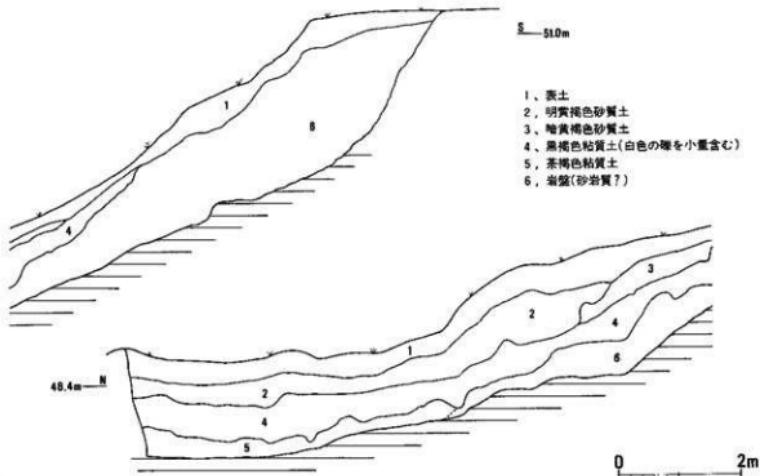
上塩治横穴群第21支群は、神戸川・三田谷を西に望む小丘陵谷部斜面に位置している。南西に開く谷の中程に開口した横穴墓が見え、谷部中央にはなだらかな斜面が続いている。谷部中央の斜面は畠地として利用されていた時期があるらしく、中央部と両側の斜面の間には明瞭な段が付いていて、造成が行われていたことをうかがわせる。谷部下端には、造成面が露出しており、宅地の跡が残されていた。宅地跡は、付近の斜面の状況から削平されていることが分かる。また、宅地跡のすぐ下方には、工事用の現道が造成されている。



第24図 上塩治横穴群第21支群の調査範囲及びトレンチ配置図（1：800）



第25図 斐伊川放水路第11・12トレンチ土層断面図 (1 : 80)



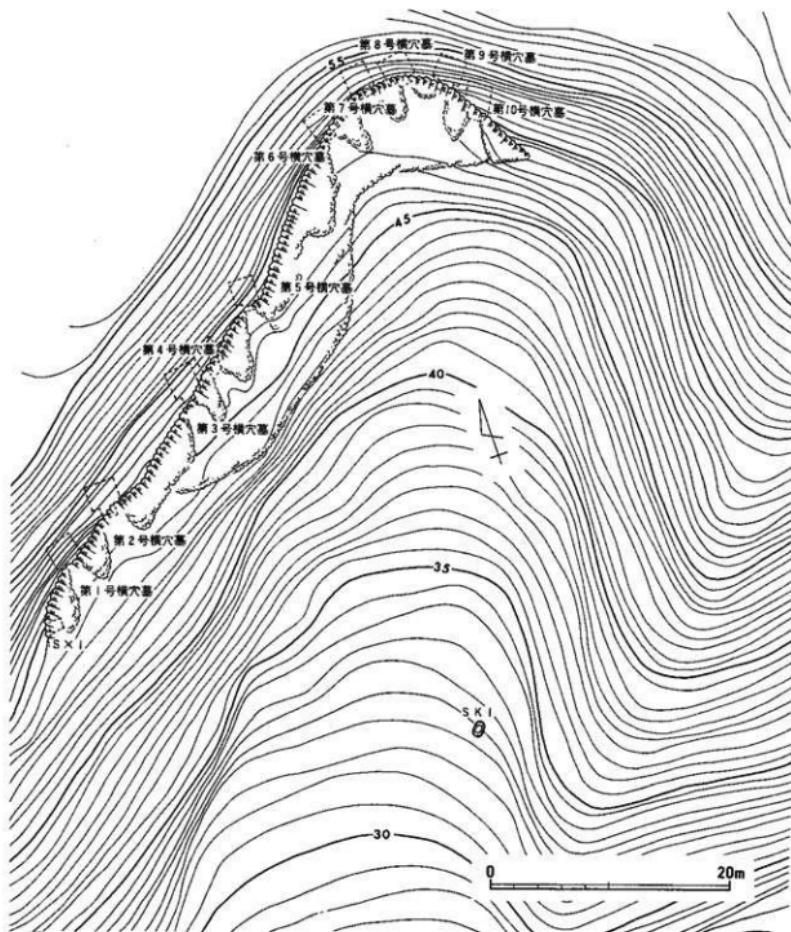
第26図 斐伊川放水路第13トレンチ土層断面図 (1 : 80)

第21支群は、谷奥の5基が、調査前にすでに開口していた他、西側斜面にも数か所で落ち込みが見られた。このため西側斜面については、当初より調査区に含めることを想定し、この部分にはトレンチを設定しなかった。竹林となっていて状況を確認できない東側斜面に第13トレンチを、開口している横穴墓の直下にあたる谷部中央に第12トレンチを、それぞれ設定し掘削を行った。また、第12トレンチ付近は、調査前より遺物が表採されており、さらに下方まで遺物包含層が広がることが予想されたため、横穴墓群西側の水田部にも第11トレンチを設定した。

第11トレンチでは、疊層中より、縄文から古墳時代の多量の遺物を検出した。その中で最もめだつた遺物は土師器類であるが、二重口縁の甕が多くみられ、横穴墓の時期よりはるかに古い。須恵器類も比較的少なく、その様相は、横穴墓群からの流れ込みと言うよりは、西方の三田谷Ⅰ遺跡との関連が強いように感じられた。このため、水田部については、今回の調査区から外し、東側の斜面を中心現道から東側までを調査区とした。

また、調査区東側について、尾根上となる。尾根上からさらに東側の大井谷方面の支谷に当たる白石谷にかけては、何カ所かでトレンチ調査を行っているが、第21支群直上の尾根では遺構・遺物は確認できなかった。

第12トレンチは開口している横穴墓の正面、谷部中央の33~44mの間に設定した。表層は開墾によると考えられる腐食土が堆積しているが、疊を含んだ埋土の下層には旧表土と思われる黒色土が見られ、黒色土中より、須恵器類を中心に多量の遺物が出土した。土層断面では小さな落ち込みが点々と見られるが、いずれも表土直下からの掘り込みで、近代以降の開墾時の掘削と考えられる。地山面はけっして平坦ではなかったが、遺構と呼べるものは検出できなかった。



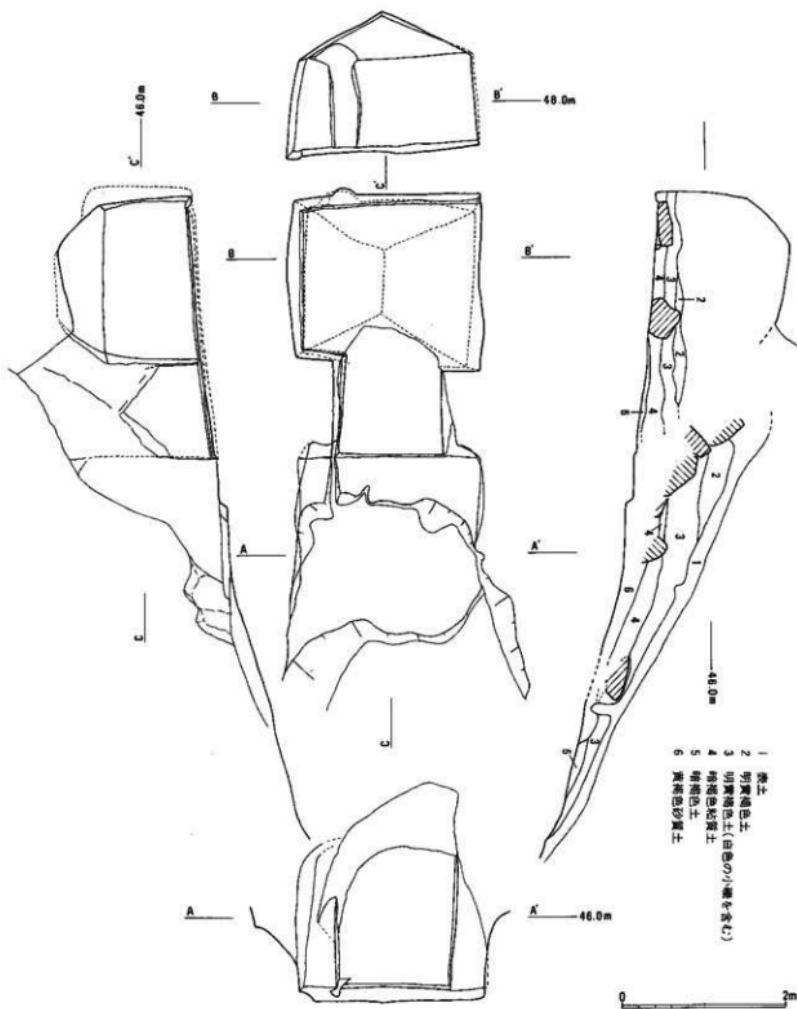
第27図 上塙治横穴墓第21支群遺構配置図 (1 : 800)

第13トレンチは、横穴墓の横方向の広がりを確認するために、第20支群との境にあたる東側の尾根上、標高47~51mの位置に設定した。尾根上にしては堆積土が厚く感じられたが、遺物は見られず、横穴墓の広がりは認められない。この部分での地山は砂岩と思われる脆い岩盤で、横穴墓を掘削できるような土質とは思えない。第13トレンチでは遺構・遺物を検出することはできなかったが、横穴墓が掘られる凝灰岩と、掘られていない砂岩がサンドイッチ状に交互に見られることが解った。東側斜面は砂岩質で、横穴墓は存在しないと思われるが、どこに凝灰岩の脈が見られるか解らないため、東

側斜面の全てを調査区に含めることにした。

2. 横穴墓の調査

1980年に刊行された報告書によると、第21支群は、5基の横穴墓が確認されているが、調査区内には既に5基の横穴墓が開口しており、この5基に一致する。更に、設定した調査区の伐採を行うと、



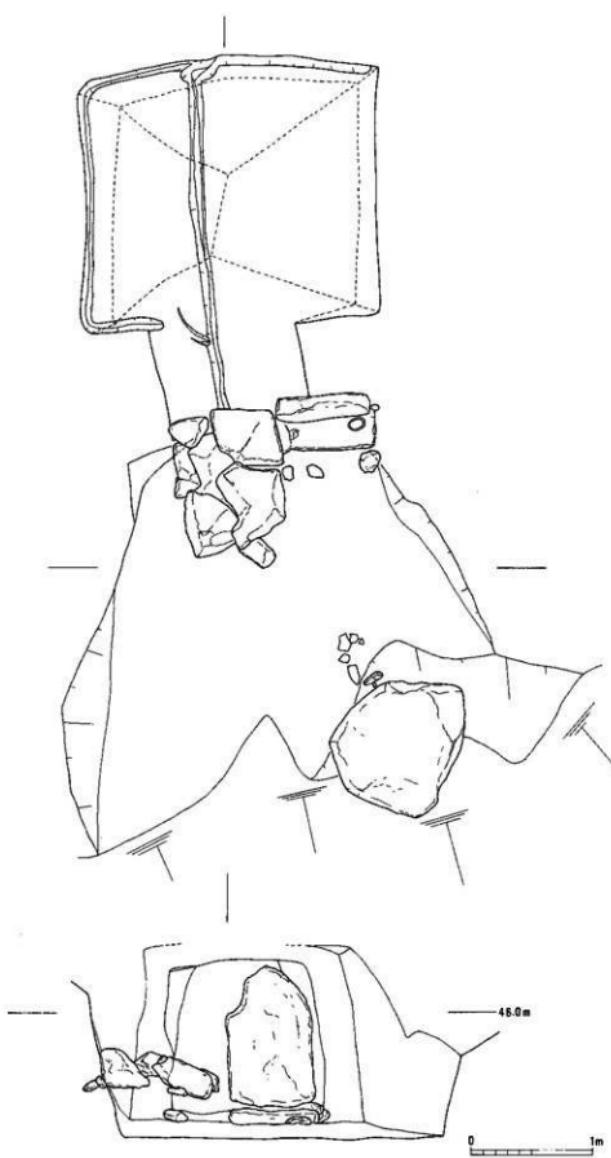
第28図 第21支群第1号横穴墓実測図 (1 : 60)

5箇所で落ち込みが見られた。付近の状況から、これらの落ち込みを全て横穴墓と判断し、横穴墓の

名称は、西側より
第1号横穴墓、第
2号…第10号横穴
墓と呼び、掘削を
開始した。このた
めに、以前の報告
で図面を紹介され
ている第21支群3
号穴は、第21支群
第8号横穴墓に該
当する。

10基の横穴墓は、
第1・2号横穴墓、
第3～5号横穴墓、
第6～10号横穴墓
の3箇所のまとま
りがあり小支群を
形成している。

第20支群の項で
説明したようにこ
の付近での凝灰岩
は、不純物が少な
い、非常に均質な
岩質で、金鎚で釘
が打てるほど柔ら
かい。横穴墓の分
布は、凝灰岩の露
出する範囲のはば
いっぱいまで広が
っており、堂々と
した印象を与える。
各横穴墓とも加工
痕を残しており、
それによると、鶴
嘴状の工具で荒形



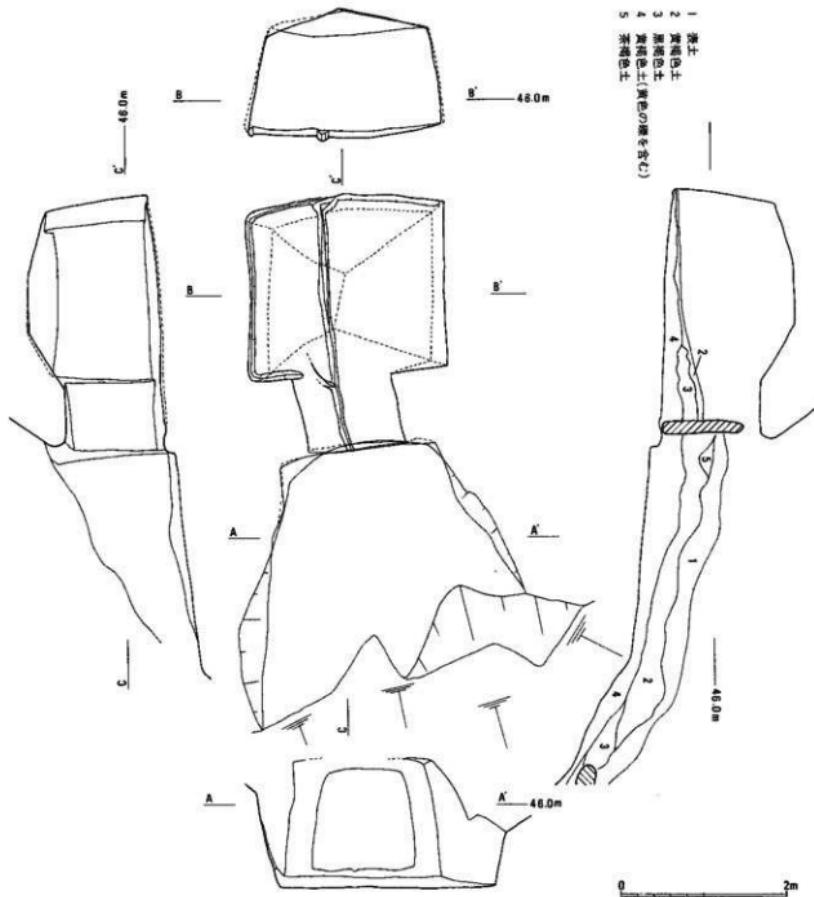
第29図 第21支群第2号横穴墓開塞状況 (1 : 40)

りを行った後、平のみ状の工具で整形しているようである。

この付近は、三田谷に面した第20～23支群の内、最も傾斜が緩やかな斜面に立地しており、その上一つ一つの横穴墓の前庭部が第20支群に比べ格段に広い。このために、前庭部先端で出土する遺物は、どの横穴墓に伴うか判断しにくくことが多かった。

第1号横穴墓

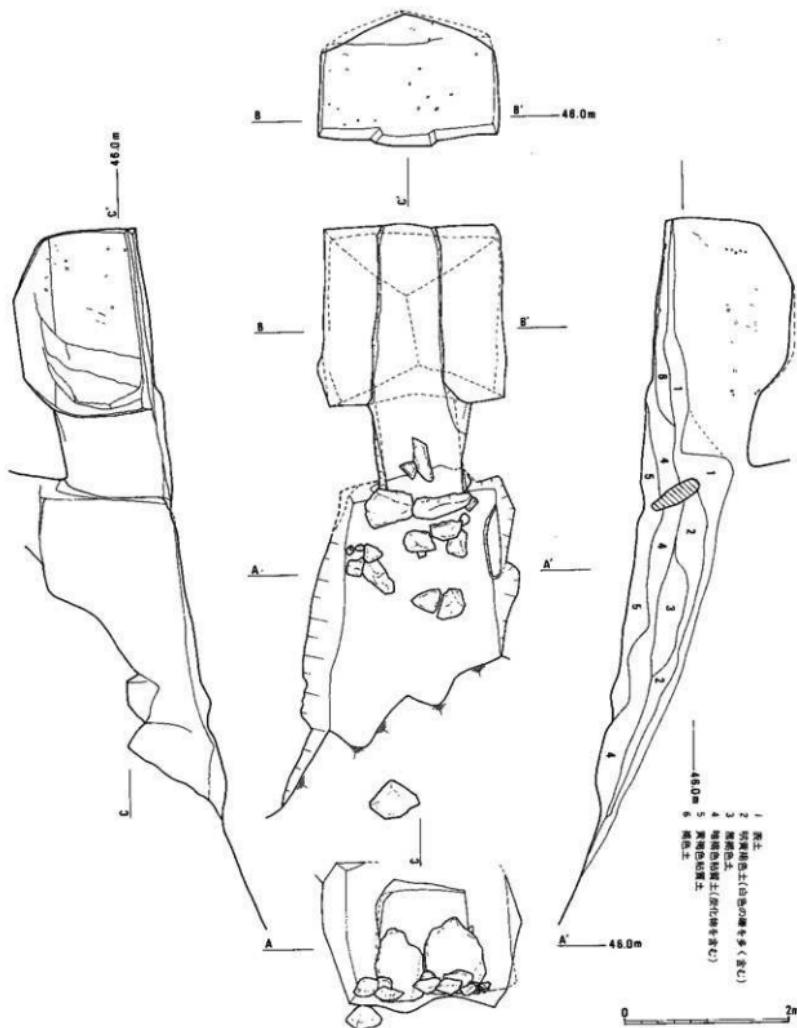
第21支群中最も西側に位置する横穴墓で、玄室床面の標高は、約45.5mを測る。東側には第2号横穴墓が隣接しているため、前庭部先端の遺物については、どちらに伴うか解らない。前庭部は、羨門



第30図 第21支群第2号横穴墓実測図 (1 : 60)

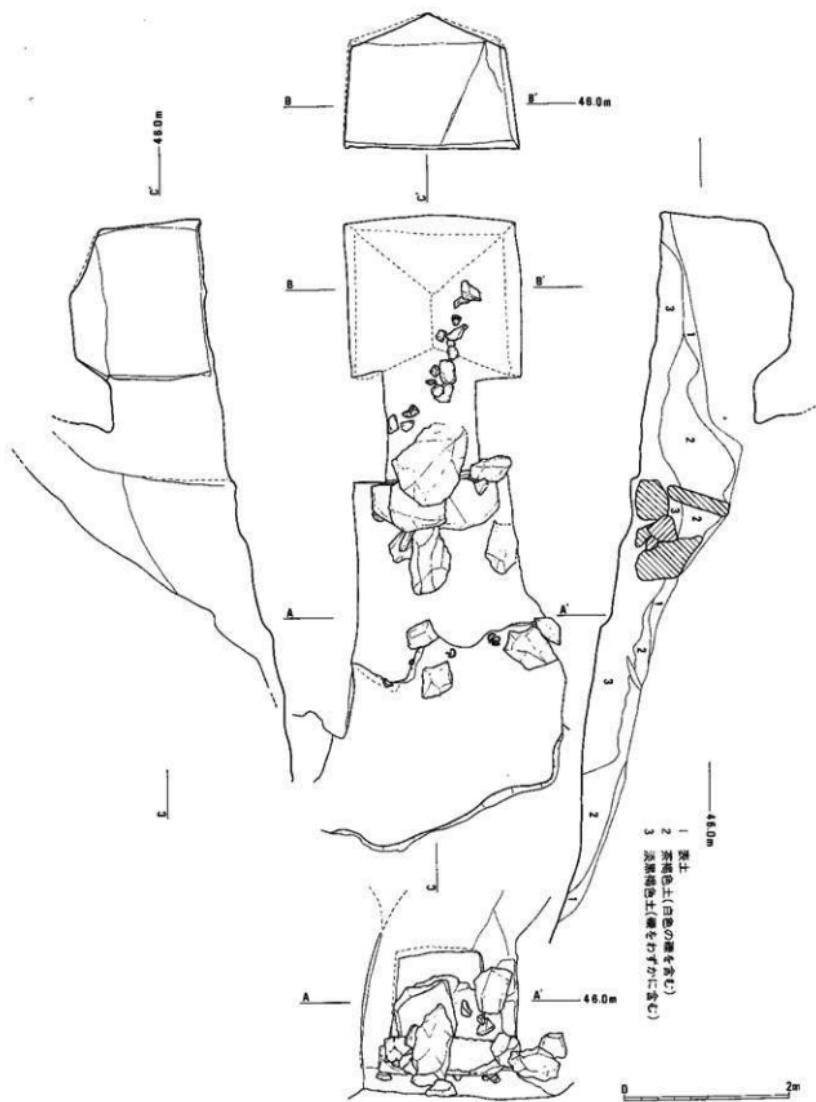
近くで幅約2.2m、前庭部先端では約3mの幅があり、大きく広がる形になっている。前庭部の全長は、3m以上で、更に先まで緩やかな斜面が続いており、広々とした空間が与えられている。

羨道付近の天井部は、完全に崩落しており、閉塞石も含めた大小の石が羨門を塞いでいたが、前庭部奥の左隅には長頸壺（S U-57）が置かれていた。羨道は幅約1.3m、長さ約1mで、高さは分らな

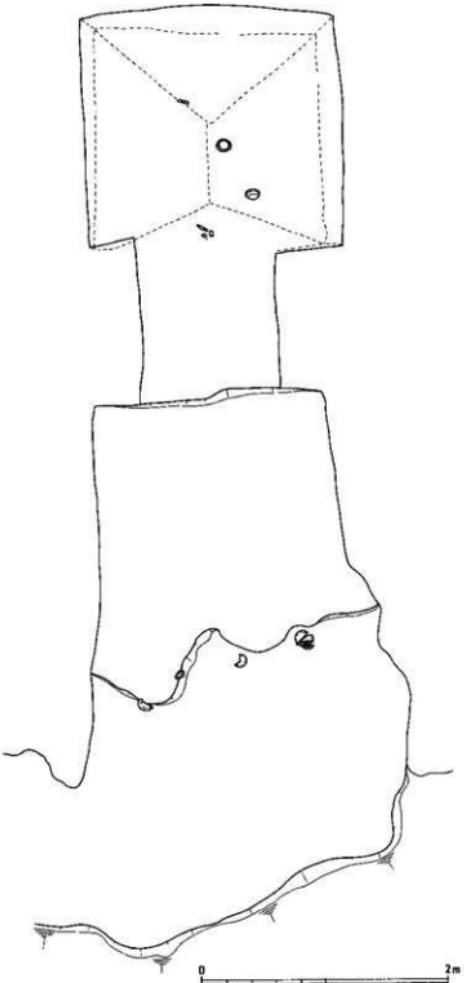


第31図 第21支群第3号横穴墓実測図（1:60）

い。天井部が更に崩落する可能性があったため、閉塞石をくわしく見ることはできなかったが、切り



第32図 第21支群第4号横穴基部測図 (1 : 60)



第33図 第21支群第5号横穴墓遺物出土状況（1：40）

石を2枚以上使用していたようである。

玄室は、ほぼ正方形で、1辺約2.1mを測る。玄室奥壁から西壁に添って幅15cm程の排水溝が設けられている。

天井までの高さは、残存している部分で約1.6mを測る。四注式妻入り構造となっており、各壁面の造作も非常に丁寧に仕上げられている。玄室奥壁には、不思議なことに、縦方向に溝が掘られている。天井部との界線付近から始まり、床面の排水溝まで、幅35cm、奥行き15cmで続いている。壁面と天井との界線上を流れる水を集めている構造になっている。この部分のみ痕は、非常に荒いものではあるが、他の部分と大差があるとは思えない。

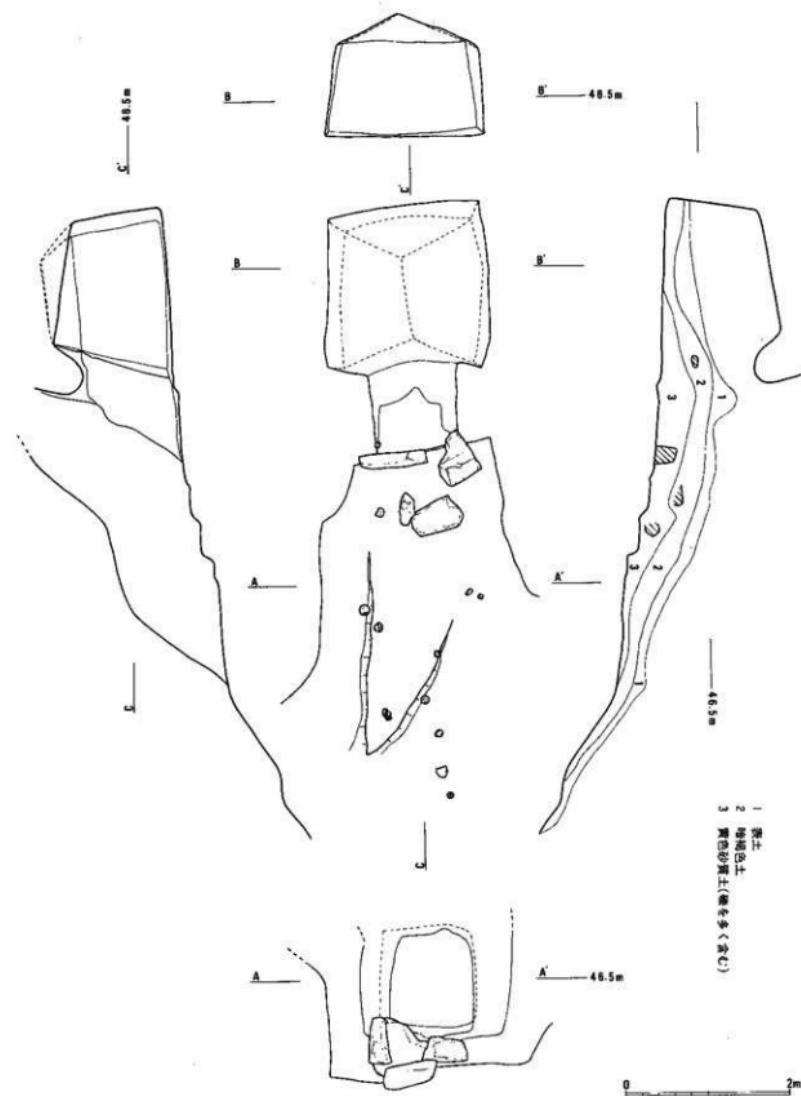
玄室のほぼ中央付近床面直上より、用途不明の石製品2点（第57・58図）が出土している。この石製品は、閉塞石に使用できるような大きさではなく、各面とも損傷していないことから、石棺でもない。床面との間にはほとんど土砂の流入が見られないことから、古くからこの位置に置かれていたもののようにある。床面直上の埋土は、玄室奥で暗褐色粘質土であるが、この土は、前庭部まで続いている。

また、前庭部での最下層である、黄褐色砂質土は、横穴墓上方からの崩落土であることは、ほぼ間違いないと思われることから、玄室中の堆積土は全て、開口後のものと考えられる。

第2号横穴墓

第2号横穴墓は玄室床面で標高約45.8mを測る。第1号横穴墓に隣接して築かれており、前庭部直

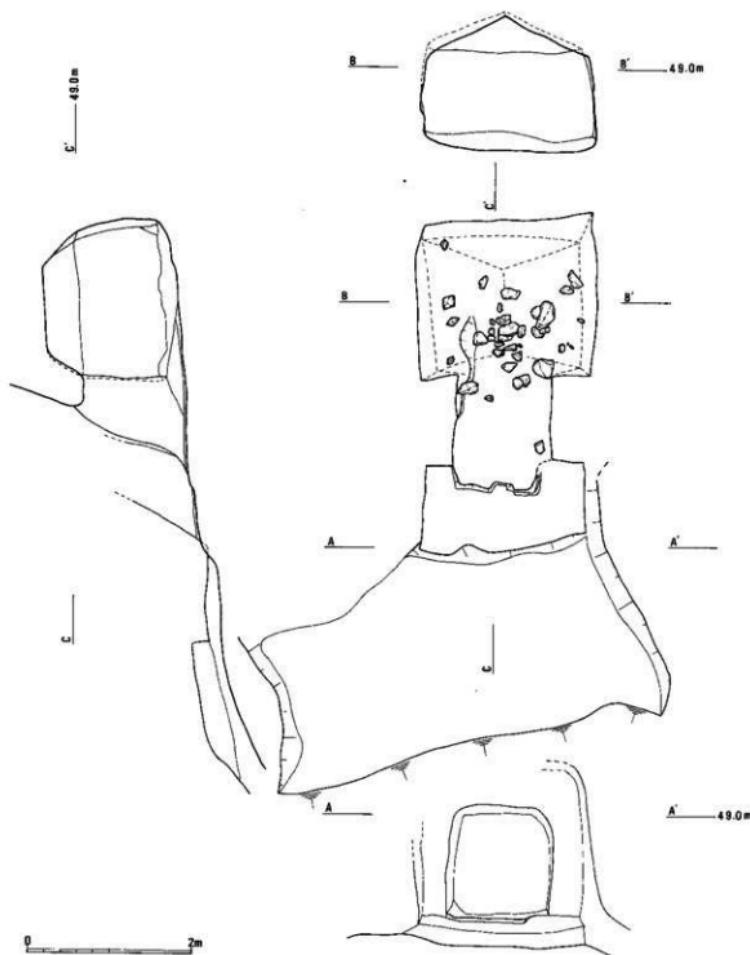
前の斜面を共有する。残存していた閉塞石によると、幅約0.8m、長さ約1.1m、厚さ約15cmの切り石を2枚並べて閉塞していたようである。羨道直前の幅は、約1.9m前庭部先端では、約3.2mを測り、



第34図 第21支群第5号横穴墓実測図（1：60）

長さは、約2.7mである。長さ約0.8m、幅約1.1m、高さ約1.2mを測る羨道部は、東に大きく振っている。

玄室は、奥行き約2.2m、幅約2.3mのはば正方形を呈し、奥壁から西壁を廻り玄門までと、玄室から羨道の間の中央を断面V字形の2本の溝が巡っている。西壁の溝と中央の溝は、玄門付近では、現状では離れているが、摩滅した溝の痕跡もあり、当初は続いていたものと思われる。また、奥壁の溝は、溝の掘り方が中央付近を境に明らかに異なっている。



第35図 第21支群第6号横穴墓実測図（1：60）

天井までの高さは、約1.6mある。四注式妻入り構造で、各壁面とも丁寧に整形されている。

第3号横穴墓

第1・2号横穴墓が隣接し小支群を形成するのと同様に第3～5号横穴墓も隣接し、小支群を形成している。第21支群中では、他の小支群に比べ、小規模な横穴墓で構成される。

第3号横穴墓は、標高約45.9mに位置する。前庭部は幅約1.7m、最大長約3mを測るが、両側の壁が高く、計測値以上に狭く感じる。閉塞石の残存状況はけっして良くなかったが、第2号横穴墓と同様の2枚の切り石で閉塞していたようである。羨道は、幅約1m、長さ約1m、高さ約1.2mを測る。玄室は、1辺約2.2mのはば正方形で、天井までの高さは約1.6mを測る。四注式妻入り構造で、左右に2面のベッドを作り出す。各壁面の整形はやや雑で、鶴嘴状工具の痕跡を多く残す他、各面の界線も、やや不明瞭である。西側壁面には亀裂があり、一部が崩落している。

第4号横穴墓

第4号横穴墓は、玄室床面の標高約45.5mに位置する。幅約2m、長さ約3.1mの前庭部には、破碎された閉塞石や上方から崩落してきたと思われる石が散在していた。閉塞には羨門付近に厚さ約40cm

の切り石を置き、その上に板石2枚を並べている。羨道は、幅約1m、長さ約1.3m、高さ約1.3mを測る。玄室は、一辺約2.1mの正方形だが、玄門がやや西にずれているために、あたかも片袖のような印象を与える。床面が荒れているために不明瞭であるが、西側壁面下には、わずかに落ち込みがあり、排水路が巡っていた可能性がある。天井までの高さは、約1.7mを測り、四注式妻入り構造で、各壁面とも丁寧に整形されている。

第5号横穴墓

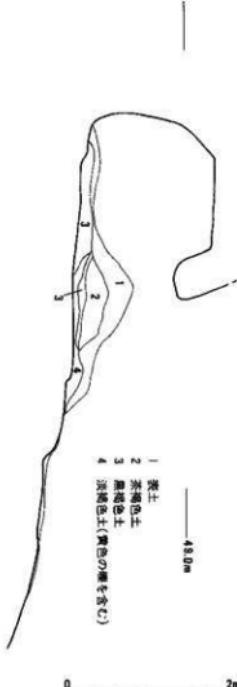
第5号横穴墓は、第21支群中最も規模の小さい横穴墓で、標高約46mに位置する。幅約2.3m、長さ約2.1mの前庭部は、第21支群中最も狭い。羨道部は、幅約90cm、長さ約1m、高さ約1mを測る一般的な規模だが、玄門付近に明瞭な段を備えている点で、他の横穴墓と異なる。閉塞石の残存状況は悪く、わずかに4点の石が見られるにすぎないが、第2号横穴墓と同様に2枚の切り石を使用したものであろう。玄室は、1辺約1.9mの正方形で、高さは約1.4mを測る。四注式妻入り形態を呈し、各面とも丁寧に整形されている。前庭部を中心に多量の土器が見られた。

第6号横穴墓

第6～10号横穴墓も、東西に隣接し、小支群を形成している。この小支群は古くから知られていたもので、すでに完全に開口しており、いずれも閉塞石は無く、遺物の残存は絶望的と思えた。

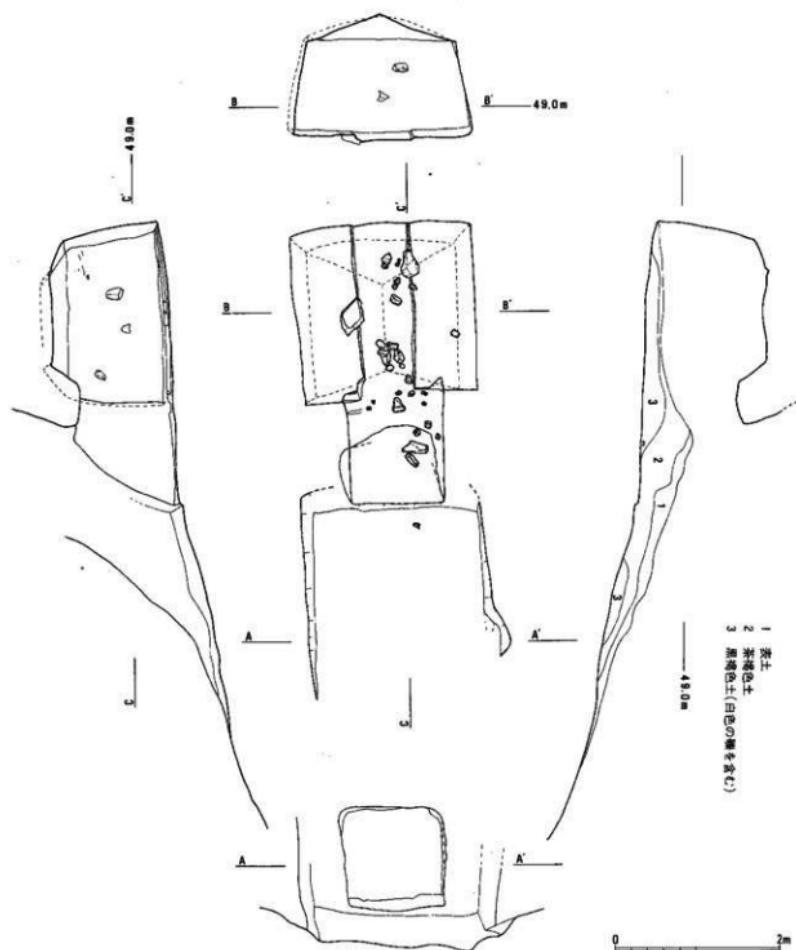
玄室床面の標高約48mに位置する第6号横穴墓は、前庭部前に広々とした平坦面があり、どこまでが前庭部か断じがたい。確実

第36図 第21支群 第6号横穴墓
土層堆積状況 (1:60)



な前庭部は、羨門直前で、幅約2.1mを測る。羨道から続く平面が造り出し状に飛び出している。また、羨門から1mの位置には、明確な段を備え、その前の平坦面と前庭部らしき長方形の平面とを分けている。羨道は幅約1m、長さ約1m、高さ約1.3mを測るが、左右の壁面がわずかにずれている。

玄室は、幅約2.2m、奥行き約1.9mを測る。床面は、かなり荒れているが、北側に小さな段があり、ベッドが存在した可能性が高い。天井までの高さは約1.7mで、四注式妻入り構造である。



第37図 第21支群第7号横穴墓実測図 (1 : 60)

玄室内には大小の石が散乱していた。第6号横穴墓は、風化に依る摩滅は見られるものの、大きな損傷はなく、閉塞石の一部であった可能性が考えられる。これらの石にも風化の痕跡は見られ、人為的加工の痕跡は見られず、閉塞石であった場合は、自然石を使用していたと想像できる。

前庭部奥からは、掘り鉢の小片が出土している。この小片は、第8号横穴墓・第10号横穴墓出土の破片と接合した。

第7号横穴墓

第7号横穴墓は、標高48.7mに位置する。幅約2m、長さ約1.9mを測る、小さな前庭部を持つが、その前に広い平坦面があるために、狭さを感じない。幅約1.2m、長さ約1.3m、高さ約1mを測る羨道部は風化による摩滅が著しく、角は全て丸くなっている。玄室はほぼ正方形プランで、一辺約2.1mを測る。天井までの高さは、約1.6mを測り、四注式妻入りである。玄室の左右には、ベッドを備えているが、あたかも、後になって削りだしたかのように、奥壁の形状にまで影響している。高さは、現状では5cm程しかないが、床面が大きく荒れていることから当初は、更に高かったものと思われる。床面には拳大の石が散乱していたが、閉塞石の一部であろうか。

この横穴墓壁面には、西壁に3穴、奥壁に2穴の掘り込みが見られる。底面が平らな半球形を呈すもので、壁面の調整とは異なる工具で彫られている。煤等の付着は見られない。

第8号横穴墓

玄室床面の標高約48.8mに位置する第8号横穴墓は、その前庭部の大半を東側の第9号横穴墓と共有する。第9号横穴墓に依る干渉のため、いびつな形になっているが、幅約1.7m、長さ1.6m以上を有す。前庭部前の凝灰岩岩盤が荒れている影響もあるが、完全な平坦面を保っていない。羨道部は幅約1m、長さ約1m、高さ約1.2mで、羨門付近の段は、摩滅し、不明瞭になっている。玄室は、幅約2.3m、長さ約2.2mのはば正方形である。天井までの高さは約1.4mで、面積に対する高さが低い。四注式妻入り構造を呈している。玄室床面には拳大の石が散乱していた。

玄室奥壁には、第7号横穴墓と同様の掘り込みが見られる。また、玄室内と前庭部から「寛永通寶」2枚が出土している。

第9号横穴墓

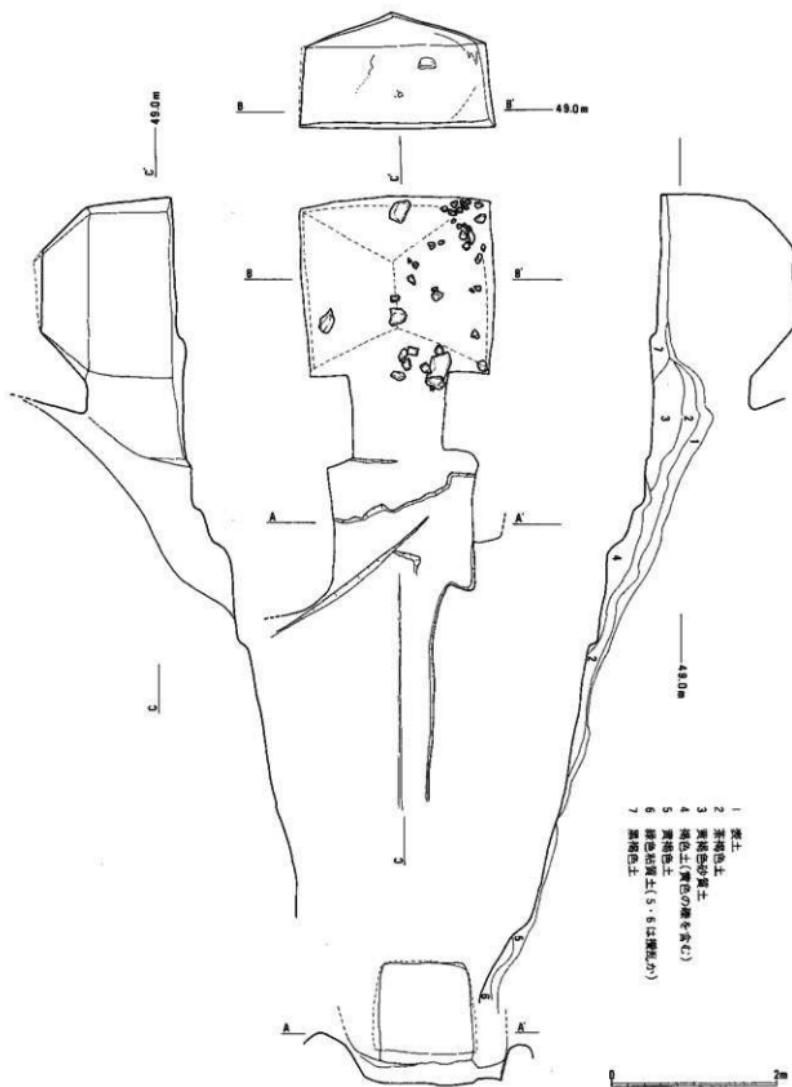
第9号横穴墓は、幅約1.6mを測る前庭部の大半を、第8号横穴墓に切られており、長さは約1.3mしか持たない。切られている部分での前庭部の比高差は、約10cm第8号横穴墓の方が低い。前庭部の切り合い関係より第8号横穴墓より古い。前庭部と羨道を分ける羨門付近の段には、中央に切れ目があり、排水溝が存在した可能性がある。幅約1.2m、長さ約1.1mを測る羨道は、前庭部が狭いため、非常に広く感じる。高さは、約1.1mを測る。玄室は、1辺約1.9mを測る、ほぼ正方形である。四注式妻入り構造だが、各壁面の界線は、不明瞭で、特に天井の軒線は見えない。天井までの高さは約1.6mである。

第10号横穴墓

第21支群中最も東側に位置する横穴墓で、玄室床面の標高は約48.1mを測る。となりの第9号横穴墓とは主軸を完全にずらしており、前庭部の共有関係は見られない。前庭部の幅約1.9m、長さ約2.2mを測り、この小支群中では広い部類に入る。羨道は、幅約1.1m、長さ約0.8m、高さ約1mを測る

が、羨門から羨道天井にかけての摩滅が著しい。

玄室は、幅約2m、奥行き約2.2mのほぼ正方形を呈し、2面のベッドを備えている。このベッドは、



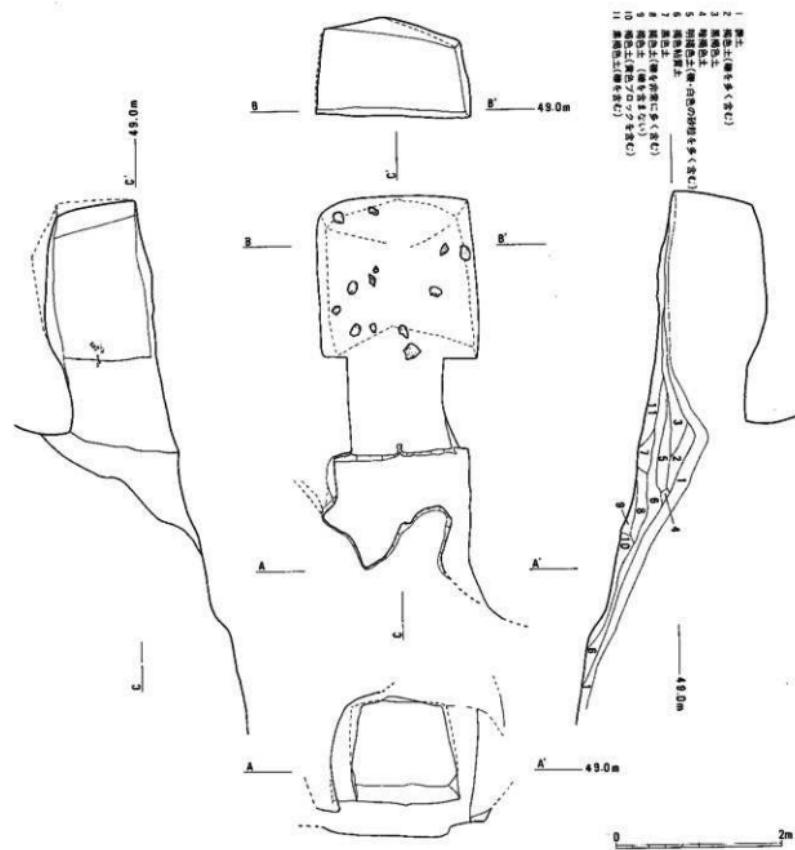
第38図 第21支群第8号横穴墓実測図 (1 : 60)

第7号横穴墓と同様に奥壁の形状にまで影響している。天井までの高さは、約1.7mを測る。四注式妻入り構造で、各面とも丁寧に整形されており、各界線も明瞭である。

玄室床面には、拳大から人頭大の石が点在していた。また、奥壁と西壁には、第8号横穴墓等と同様の掘り込みを持っている。

前庭部から擂り鉢と土師器小皿の小片が出土したほか、羨道床面と、玄室内から須恵器が出土している。また、玄室内の埋土を洗浄したところ、金糸が出土した。

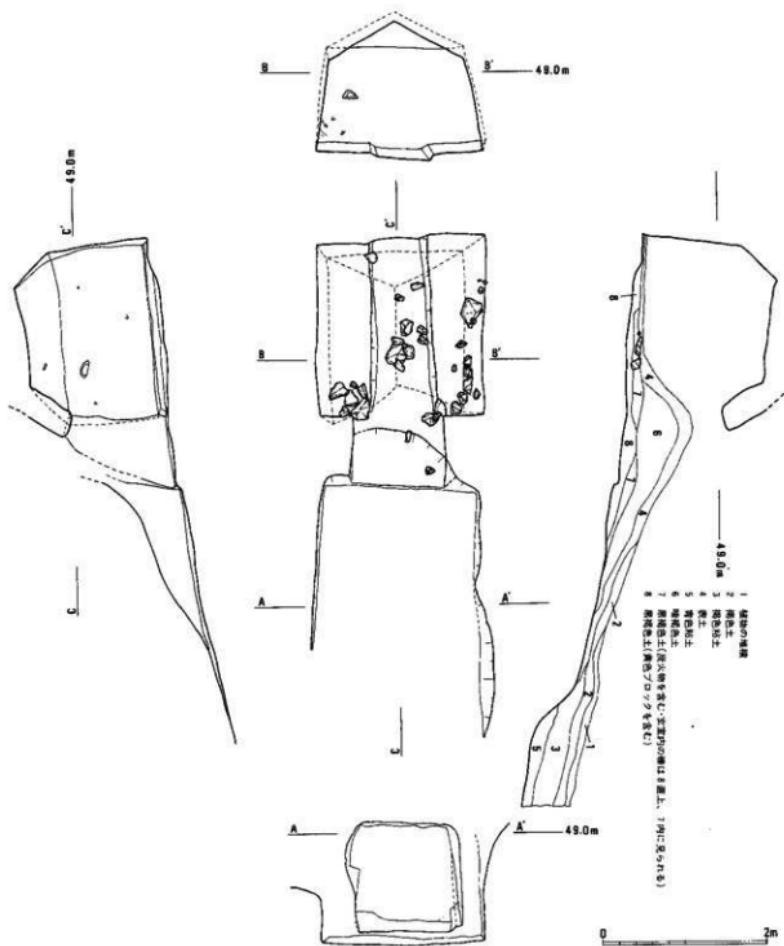
第10号横穴墓の前庭部先端には、腐食土が多く堆積していたが、横穴墓付近には見られず、暗褐色の表土に覆われていた。玄室付近では、岩盤上を水が流れるらしく、水の影響を強く受けたと思われる青色粘土が多くみられる。青色粘土は、地山（岩盤）直上の埋土であり、須恵器や金糸もこの土か



第39図 第21支群第9号横穴墓実測図 (1 : 60)

ら出土した。この土は羨門を越え、前庭部にまで堆積しているので、須恵器の時期を確実に示すものとは言い切れないが、玄室内に見られた石は、青色粘土直上の炭化物を含んだ黒褐色土中に見られ、完全に開口する以前の状況を示す可能性はある。

第10号横穴墓は、全国的にも希少な金糸を出土しているが、完全に開口していたために、そのくわしい状況を知ることができなかった。しかしながら、この金糸が古墳時代のものである可能性は高く、一応伴出した2点の須恵器と共に、今後の検討を要するものである。



第40図 第21支群第10号横穴墓実測図 (1 : 60)

3. その他の遺構について

S X-1

S X-1は、第1号横穴墓の西隣に位置する小横穴で、調査時には、掘削途上の横穴墓と考えていたものである。S X-1の位置は、西に延びる凝灰岩層が途切れるわずかに手前であり、岩盤に大きな亀裂が見られる。このことから、横穴墓を掘削しようとしていたが、掘りはじめてまもなく、岩質が悪いことが判明し、中止したのでは、と考えた。

S X-1は、斜面を標高約45mの位置から楔形に掘り込んだもので、遺物は認められない。平坦に掘られている部分の全長は約2.6mで、その内奥から70cmについては横穴状に掘り込まれている。天井部といえる部分の高さは約1mある。平坦面先端には、幅60cmの石が見られるが、地山面からは多少浮いており、S X-1とは無関係のようである。

「掘削途中の横穴墓」である可能性を否定する理由として、つぎの点が挙げられる。横穴墓の掘削は、基本的には前部から仕上げていくと言われているが、S X-1は、前庭部に当たる部分がきわめて狭く、前部を仕上げた状態とは考えにくい。また、現状では、確かに凝灰岩^(岩質)に亀裂が見られるが、第1・4号横穴墓などの状況から考えても、掘削が不可能なほどとは思えない。凝灰岩脈の端近くに位置するのは間違いないが、まだわずかに余裕があり、第1号横穴墓程度の規模であれば、掘削可能と思える。

以上のことから、横穴墓の掘削を途中でやめる理由は見あたらず、S X-1は、完結した一つの遺構と考えられる。S X-1の掘削方法は、床面などに残る加工痕などから、横穴墓と同様の方法で掘られているように見え、隣接する第1号横穴墓に付属する施設である可能性が高い。

S K-1

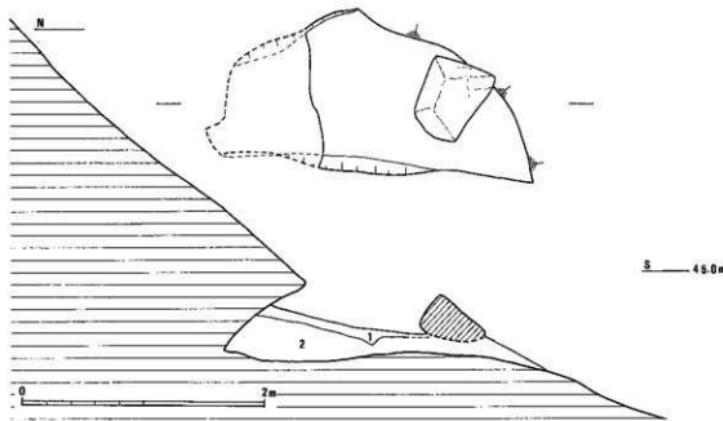
横穴墓群前方に広がる谷部の中央付近のやや東より、標高33m付近で、土抗1基を検出している。長径1.12m、短径0.8m、深さ0.3mの隅丸方形を呈する土抗で、埋土は、地山の崩落土と思われる。床面・壁面とも火を受けた様な形跡は見られない。

遺物は検出できず、時期・用途は解らない。周辺では、須恵器類が出土しているが、いずれも黒色土中の出土で、それより上層の褐色土からは遺物の出土は見られない。S K-1の埋土である褐色土は、第12トレンチの状況から、須恵器等古墳時代の遺物が出土する黒色土よりも上層に堆積する土壤で、畑地の開墾時に谷の両側を削り、谷の内部を埋め、緩斜面の拡大を行ったときの造成土と考えられる。このことから、S K-1は、近代のものである可能性が高い。

谷部疊層

明確な遺構は、上記のものが全てであるが、第6～10号横穴墓の正面にあたる谷部奥では、疊の集中する部分（図版37上）が見られた。黒色土を含んだ疊層で、拳大の大きさの凝灰岩がほとんどである。疊層上面からは、須恵器横板（S U-145）が出土している。

この疊層に付いては、横穴墓を掘削したときの廃材である可能性、盗掘が行われた時に、閉塞石を破壊した痕跡である可能性の2つが考えられる。断定する根拠は薄いが、疊層中からも、小量ではあるが須恵器片が出土しており、横穴墓掘削中に疊層が堆積したとは思いにくい。このことから、盗掘



第41図 S X 1 実測図 (1 : 40)

時に第6～10号横穴墓の閉塞石を破壊したものではないかと考える。

4. 上塩治横穴群第21支群出土遺物について

横穴墓出土の土器類

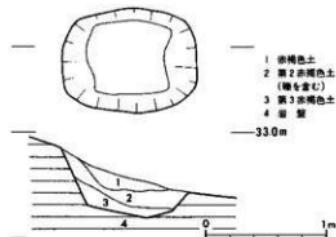
第1号横穴墓は、前庭部を中心に多量の遺物が出土した。SU-36～39は、环である。SU-36は、返りがやや高く、底部にケズリの痕跡を残す。他の3点はいずれも返りが内傾し、高さを持たない。SU-38は、底部にケズリを残している。

SU-40・41は、返りを持つ蓋で、いずれもつまみの部分は欠損している。SU-41の頂部にはケズリ痕を残している。

SU-42～44は、蓋の輪状つまみ部分の小片である。いずれもナデ調整される。SU-42の口縁端部には、小さな返りがつくものと思われる。

SU-45～47は、蓋の口縁端部の小片である。退化した非常に小さな返りを持ち、ナデ調整される。つぶれた擬宝珠状か、小さな輪状つまみがつくものと思われる。

SU-48・49は、蓋の口縁部である。端部を折り曲げたもので、返りは持たない。口縁部外面を強くナデ、他の部分もナデ調整する。輪状つまみが付くと思われる。SU-50・51は、高台部分の小片で、いずれ



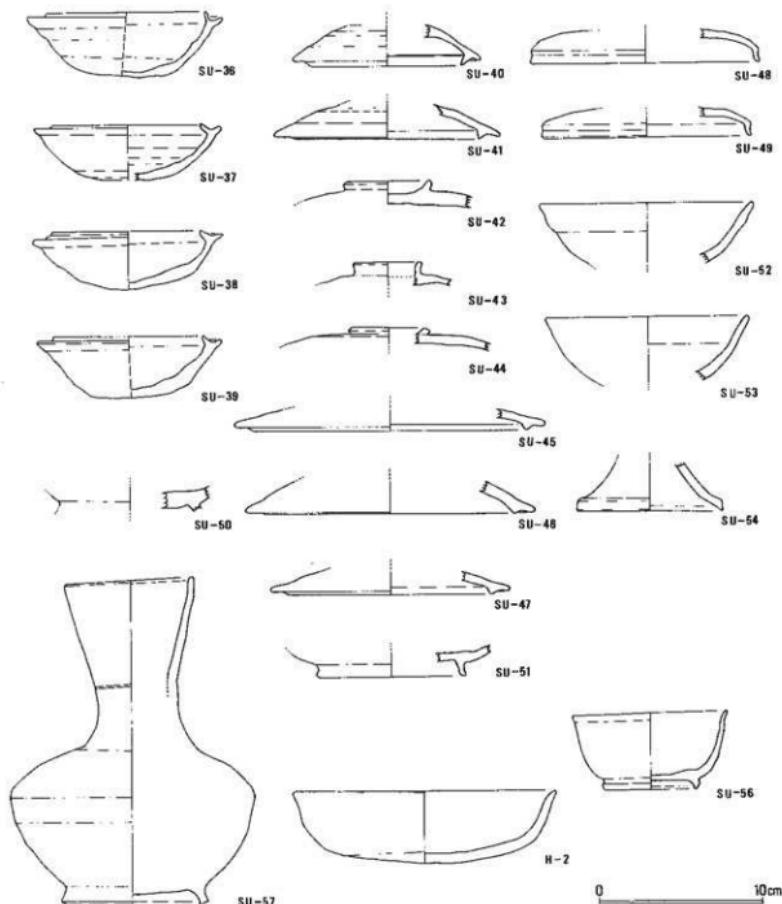
第42図 SK 1 実測図 (1 : 40)

も壊であろう。

高环と思われる個体は3点出土している。SU-52・53は、口縁部付近の破片で、いずれも口径が小さく緩やかに内湾する体部を持つ。全面ナデ調整される。SU-54は、脚部の破片で、端部外面に小さな面を持つ。スカシは見えない。

SU-56は、碗である。段のある高台を底部の端に付け、直立氣味に立ち上がる体部から、口縁部はわずかに外反する。底部に回転ヘラ切り痕を残している。

H-2は、土師器壊である。底部はやや丸みを帯び、口縁端部でわずかに外反する。丁寧にヘラ々



第43図 第21支群第1号横穴墓出土土器実測図 (1 : 3)

がきされるが、暗文は見えない。全面に赤色顔料が塗布されている。

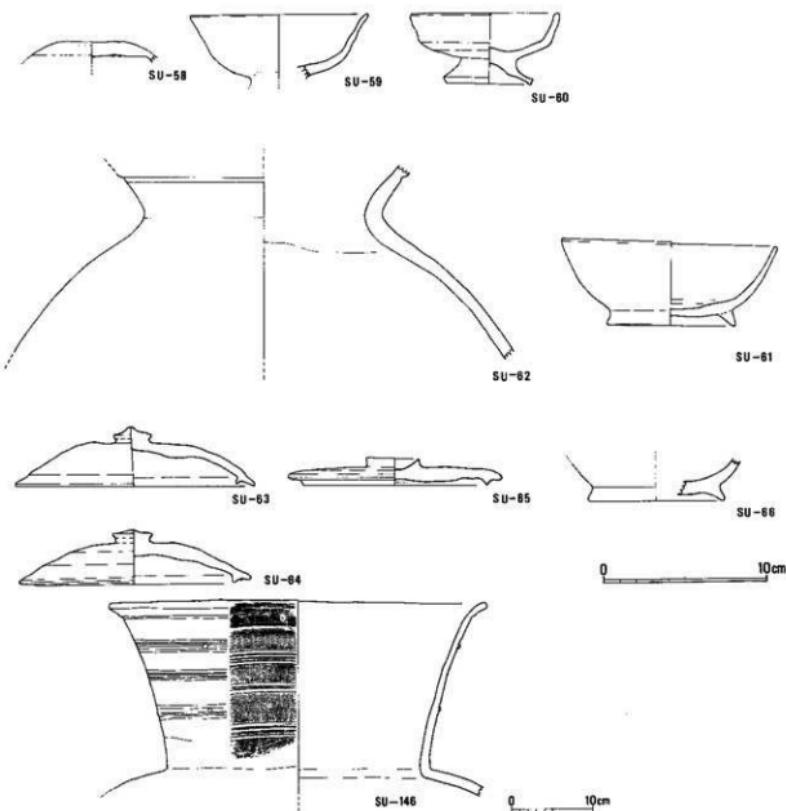
S U-57は、長頸壺である。肩が張り、頸部が直線的に延びる。頸部中央にヘラ描きの沈線を施す。底部にはヘラ切り痕を残す。外面には、自然釉が多く付着している。

S U-146は、壺の口縁部である。3段の波状文を持つ優美で、大型のものである。

第2号横穴墓に確実に伴う土器は、S U-59~62がある。S U-59は、高环の破片で、脚部を欠くが、环部は直線的に延び、口縁端部で外反するものである。

S U-60は、低脚环である。直線的で浅い环部に「ハ」の字を開く低脚を付けたもので、見込み部に重ね焼きの痕迹を残す。

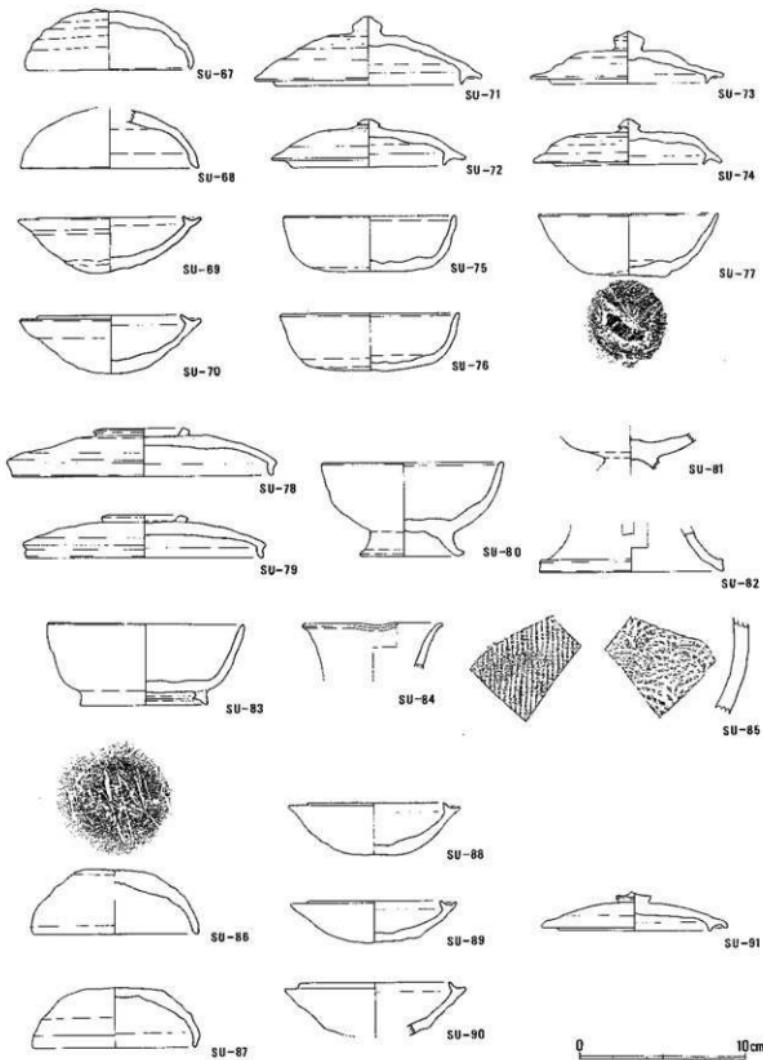
S U-61は、丸みを帯びた体部に断面三角形の高台を付けた、高台环の碗である。体部は、緩やかに内湾し、口縁部内面にわずかにアクセントを持つ。体部外面には、わずかにロクロ目が入り、底部



第44図 第21支群第1・2号横穴墓出土土器実測図 (1 : 3)

にはヘラ切り痕を残す。見込み部に「×」印のヘラ記号を記す。ほぼ全面にヨコナデが入り丁寧に整形されている。

SU-58・63～66は、前庭部先端から出土したため、第1号・第2号横穴墓のどちらに伴うか分か



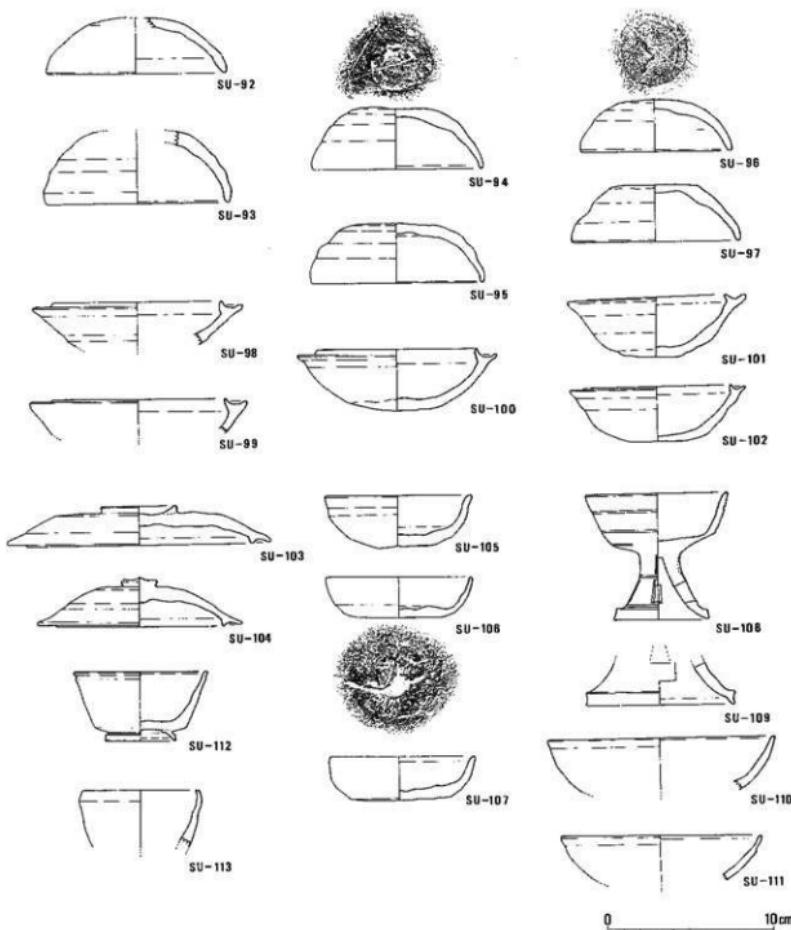
第45図 第21支群第3・4号横穴墓出土土器実測図（1：3）

らない。SU-62は、壺である。体部外面には平行タタキ、内面に同心円文の押さえ具の痕跡を残す。口縁端部を欠くが、欠損部近くに沈線があり、上部には、波状文等の文様が施される可能性がある。

SU-58は、蓋と判断したもので、頂部にヘラケズリの痕跡を残す。SU-63・64は、いずれも、擬宝珠状つまみを持つ蓋で、小さな返りを持つ。全面ナデ調整される。

SU-65は、輪状つまみを持つ蓋で、異常なほど偏平面形態である。小さな返りを持ち、口径112mmを測るが、器高は、わずか17mmしかない。外面には、自然釉が付着している。

SU-66は、高台の付く底部で、壺であろう。高台部分の復元径は82mmである。



第46図 第21支群第5号横穴墓出土土器実測図（1：3）

SU-67～85は、第3号横穴墓から出土したものである。

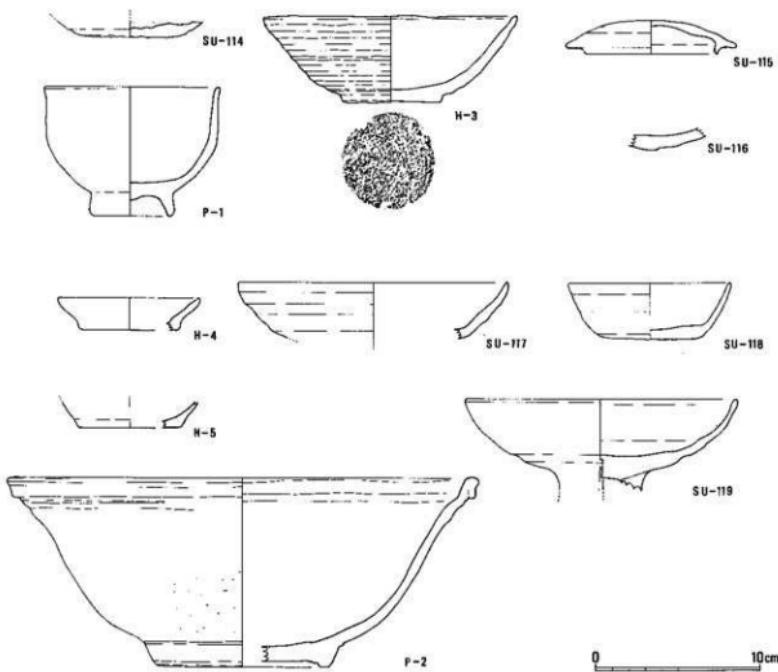
SU-67・68は蓋で、全面ナデ調整される。これらと組み合うと思われる坏がSU-69・70である。大きく内傾する返りを持ち、体部の大半を回転ナデ調整する。SU-69の底部には、ヘラケズリが見られる。

SU-71～74は、擬宝珠状つまみを持つ蓋で、いずれも返りが付いている。SU-71は、器高があり、緩やかな体部を持っている。SU-72は、つまみが小さく、全面ナデ調整される。SU-72を除き、頂部にヘラケズリの痕跡をわずかに残す。

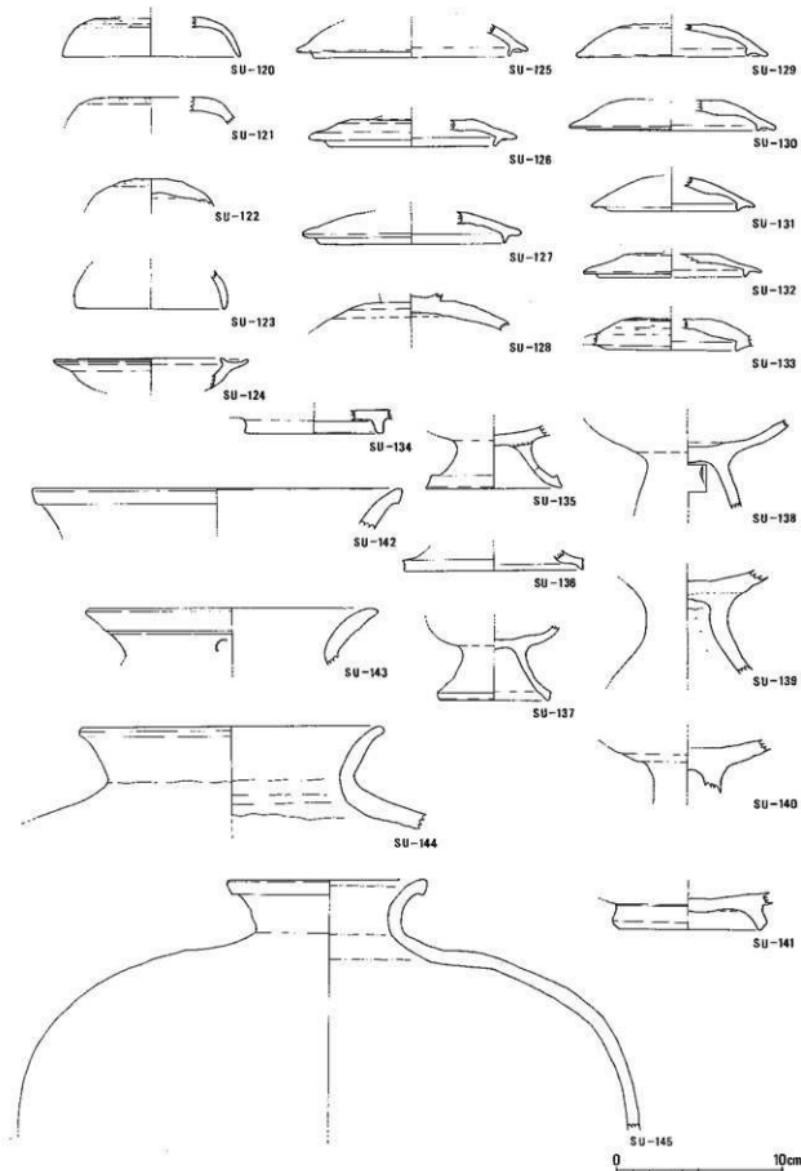
SU-75・76は坏である。底部は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。底部に回転ヘラ切り痕をわずかに残す。SU-77は、深碗形の坏である。回転ヘラ切り痕を残す底部は、やや小さく、丸みを帯びた体部は、直線的に立ち上がる。底部外面にヘラ記号がある。

返りの無い蓋は2点出土している。SU-78は、口径160mmに復元できる大型のもので、輪状つまみを持つ。頂部には、わずかにケズリの痕跡を残している。SU-79は、SU-78とまったく同じ器形を呈すが、復元口径は20mm近く小さい。

SU-80は、低脚を持つ坏である。坏部は丸みを帯びて緩やかに内湾する体部を持ち、深碗形を呈



第47図 第21支群第6～10号横穴墓出土土器・陶磁器実測図（1：3）



第48図 第21支群出土土器実測図 (1 : 3)

している。「ハ」の字形に突き出す脚部は、端部近くで外側に大きく開いている。

SU-81・82は、高杯である。SU-82は、脚部の破片で、スカシの痕跡がある。三角形のスカシか。

SU-83は、高台を持つ杯である。平坦な底部から大きく屈曲して直線的な体部に続く。高台は、

内側に陵を持つ特異な形で、ほぼ垂直に付く。底部外面にわずかにヘラの痕跡を残している。

SU-84は、長頸壺口縁部の小片で、口径84mmに復元できる。口縁端部でわずかに外反し、注ぎ口を備える。

SU-85は、壺頸部の破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円文が残る。玄室内から出土した。第4号横穴墓からは、壺頸ばかり6点が出土した。SU-86・87は、蓋である。どちらも口径約10cmに復元できるが、焼成はまったくことなり、SU-86は灰白色を呈し、非常に軟質である。SU-87は、口縁部内面で屈曲し、アクセントを持つ。SU-87の内面には、「川」の字形にヘラ傷が見える。どちらも頂部にヘラ起こしの痕跡を残す。

SU-88～90は、杯である。いずれも小さな返りを持っている。口径8～9cmに復元できるもので、SU-89の底部には、わずかにケズリ痕を残す。

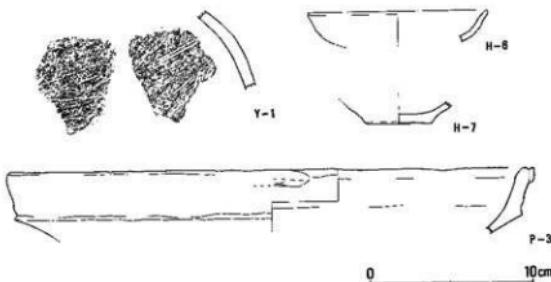
SU-91は、擬宝珠状つまみを持つ蓋である。器高は24mmと、きわめて低い。ほぼ直立する返りを持ち、外面にわずかにケズリの痕跡を残している。

第5号横穴墓は、最も多くの遺物を出土した。SU-92～97は、蓋である。SU-92～95は、口径11cm前後に、SU-96・97は、9cm前後に復元できる。天井部にヘラケズリの痕跡を残すものが多く、SU-94の頂部には、「井」字形の、SU-96には、「×」印のヘラ記号が見られる。

SU-98～102は、杯である。口径は、SU-98・99で10cm前後に、SU-100～102では、9cm前後に復元できる。返りが内傾するものが多く、ケズリ痕をほとんど残さない。SU-101は、見込み部に「×」印のヘラ記号を持つ。

つまみを持つ蓋は、2点出土している。SU-103は、口径14cmに復元できる大型品で、口径に対する器高が低い。輪状つまみを持ち、返りはきわめて小さい。外面にケズリの痕跡をわずかに残す。SU-104は、擬宝珠状つまみを持つ、器高の高いものである。外面にわずかにケズリ痕を残し、返りは小さい。

SU-105～107は、返りを持たない杯で、口径9cm前後に復元できるものである。SU-105は、底部から体部にかけて丸みを帯びて内湾するもので、口縁部は外反する。底部は、回転ヘラ切り痕を残



第49図 第21支群出土土器・陶器実測図(1:3)

す。S U—106は、平坦な底部を持ち、わずかに内湾する直線的な体部を持つものである。底部には、ヘラ起こしの痕跡を残す。S U—107は、S U—106とほぼ同様の器形であるが、体部が内湾せず、底部に回転ヘラ切り痕を残すものである。

高环は、4点を確認した。S U—108は、完形を呈すもので、直線的な体部を持つ环部と2段のスカシを持つものである。环底部はほぼ平坦で、大きく屈曲して直線的な体部に至る。体部外面には3条のごく浅い沈線が入るが、下の1条は、途中で消えている。脚部には各2条毎の浅い沈線に区画され、2段のスカシが4方向に入る。上段のスカシは、貫通しない切り目のみで、きわめて浅い。下段のスカシは、台形である。S U—109は、脚部の小片で、底径約9cmに復元できる。スカシの一部が残っており、三角形のスカシがあったものと思われる。

S U—110・111は、高环环部の小片である。いずれも緩やかに内湾する环部を持つもので、口縁部下方にナデによる浅いくびれを持つ。全面回転ナデ調整される。

第6～10号横穴墓は既に完全に開口していたため、遺物量は極端に少なかった。

S U—114は、第6号横穴墓で出土した。环の底部と思われる小片で、ヘラケズリの痕跡を残している。

H—3は、第6号横穴墓で出土した土師器碗で、破片となって出土したが、ほぼ完形に復元できた。円盤状の底部から、体部が直線的に立ち上がるもので、体部外面にはロクロ目状の窪みを強く残している。底部には回転糸切り痕を明瞭に残している。ロクロ目状の痕跡は、ヘラ状工具によるナデと考えられ、故意に強くつけられた上に、ナデ調整されている。下方でわずかに膨らみ、そこから直線的に立ち上がる体部は、口縁部直下で、わずかに内湾する。内面は、丁寧にナデ調整される。

P—1は、第6号横穴墓から出土した陶器碗である。削りだしによる高い高台を持ち、緩やかなカーブを描いて立ち上がる体部は、口縁部近くでわずかに外反する。胎土は乳白色を呈する精良なもので、それに、明黄褐色の釉をかける。釉には細かい貫入が入っている。

第7号横穴墓からは、2点の須恵器が出土した。S U—115は、蓋の破片で、頂部が欠損しているため、つまみの形状は分からぬ。復元径は、約8cmと非常に小さく、つまみを持たないかもしれない。全面ナデ調整し、かえりはほぼ垂直に降りる。

S U—116は、环の底部と考えられるが、小片のため分からぬ。外面には、ヘラ起こしの痕跡と思われる傷が入っている。内面は、ナデ調整される。

H—8は、第8号横穴墓前庭部で出土した土師器小皿である。底部は欠損しているが、回転糸切り底を持つものであろう。円盤状の底部から一段上がった位置に直線的な体部が付く。全面ナデ調整する。

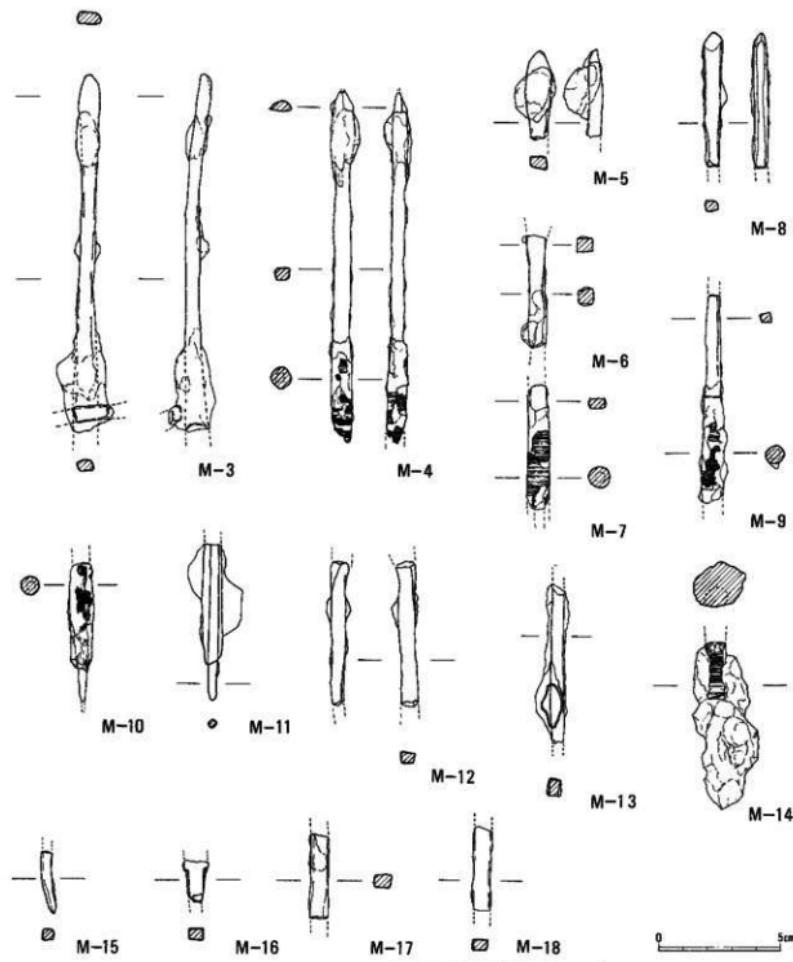
S U—117は、第9号横穴墓から出土した、須恵器の小片で、高环になるものと思われる。緩やかに内湾する环部で、外面には、強いナデによるロクロ目状の陵が見える。

第10号横穴墓からは、4点の土器・陶器が出土した。S U—118は、完形を呈する須恵器环である。底部には回転ヘラ切り痕を残し、わずかに内湾しながら体部が立ち上がる。全面的に丁寧な回転ナデ調整されている。

S U—119は、須恵器高环で、脚部を欠く。緩やかに内湾するきわめて薄手の环部は、わずかにロクロ目が入る。口縁部は、端部近くでわずかに肥厚して丸く納める。脚部には、貫通するスカシが切り込み状に2方向に入る。全面ナデ調整を行う。

H-5は、土師器小皿の小片である。全体に摩滅しており、調整は不明だが、回転糸切り底を持つものと思われる。

P-2は、擂り鉢である。破片となって3点が、第6号横穴墓玄室内、第7・10号横穴墓の前庭部から出土し、接合した。削り出しの輪高台を持ち、緩やかに蛇行する体部が斜めに延びる。口縁部は、外側に小さく折り返し、内外面に強いナデを施している。内面の横目は、3cm間に10本の単位で、反時計廻りに施されている。外面の体部下半には、ケズリ痕が残る。器面はくすんだ赤褐色を呈す。胎



第50図 第21支群第1号横穴墓出土金属器実測図 (1 : 2)

土は、黄褐色で、白色の微砂粒を多量に含んでいる。

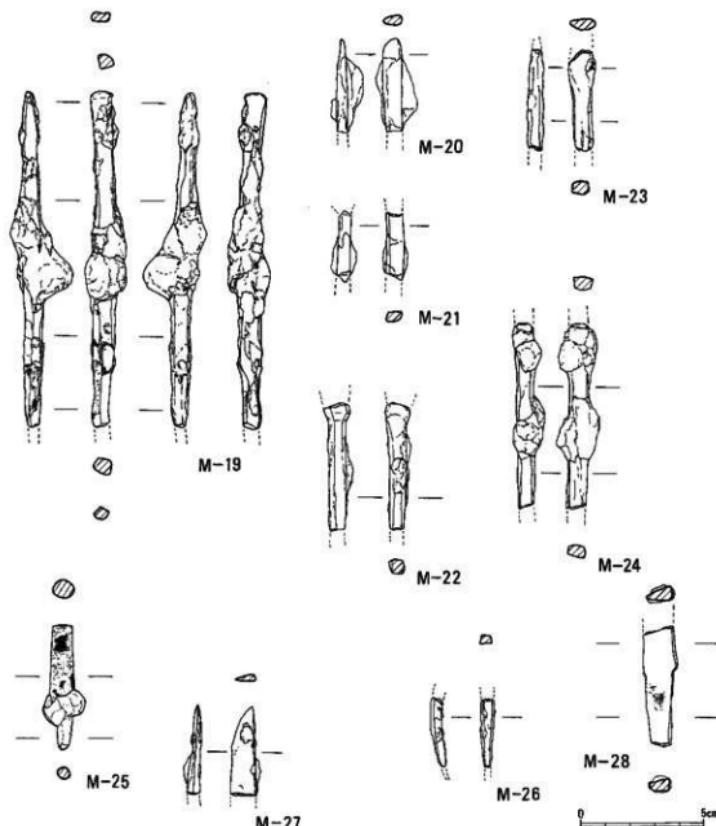
第48・49図に挙げたものは、遺構に伴わない土器である。第1号横穴墓より西側の斜面、及び谷部中央から多く出土している。

SU-120～123は、蓋としたものである。SU-120～122は、頂部にケズリ痕を強く残している。SU-122・123は、小型のものである。

SU-124は、环の小片で、かえりが強く内傾する。

SU-125～133は、つまみの付く蓋と考えられるもので、SU-128には、輪状つまみが見られる。SU-131～133は、小型のもので、特にSU-132は器高も低く、SU-2等と同様のつまみの付かないものの可能性がある。

SU-134は、高台部分の小片で、环か皿の底部と思われる。ナデ調整し切り放し痕は、残さない。



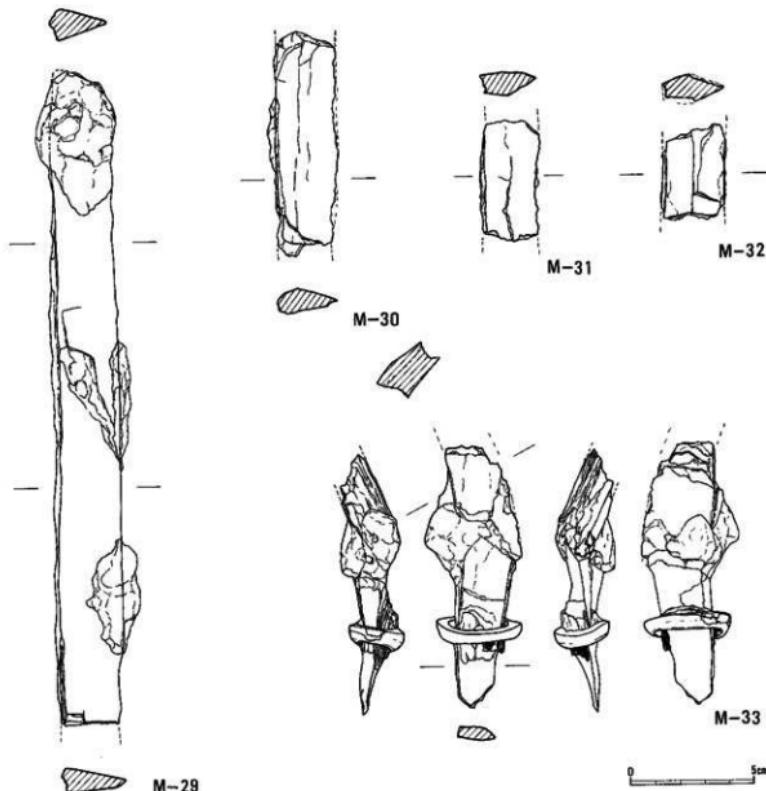
第51図 第21支群第2号横穴墓出土金属器実測図（1：2）

SU-135～140は、高杯である。杯部が残るものは、いずれも内湾して立ち上がるもので、屈曲し直線的に体部が立ち上がるものは見られない。脚端部は、上方に延びるもの(SU-135)と、下方に延びるもの(SU-136・137)がある。SU-135・138には、切り目になったスカシを備える。SU-139の脚部内面には、搔き取り痕が見られる。

SU-141は、高台の小片であるが、外側に突っ張る厚手のもので、壺であろうか。底部にはヘラ切り痕がわずかに残る。

SU-142～144は、甕である。SU-143には、頸部外面に竹管文(?)が施される。

SU-145は、横瓶である。口縁部は緩やかに外反し、端部を折り返す。体部は、外面に平行タタキを交互に打った後、軽く、カキメを施す。内面は、同心円文の押さえ具の痕跡を、軽くナデ消す。体部上方には、火当たりと思われる白い斑点が多く見える。暗青灰色から茶褐色を呈すが、断面は、暗赤褐色になっている。胎土中には、黒色の微砂粒をわずかに含んでおり、非常に硬く焼成されている。



第52図 第21支群第3号横穴墓出土金属器実測図 (1 : 2)

Y-1は、弥生土器と考えられる体部の破片である。内面は、ケズリの後ナデ、外面には不整方向のハケメが見える。器形は壺であろうか、弥生中期から後期のものと思われる。

H-6・7は、土師器小皿である。摩滅が著しく調整は見えない。

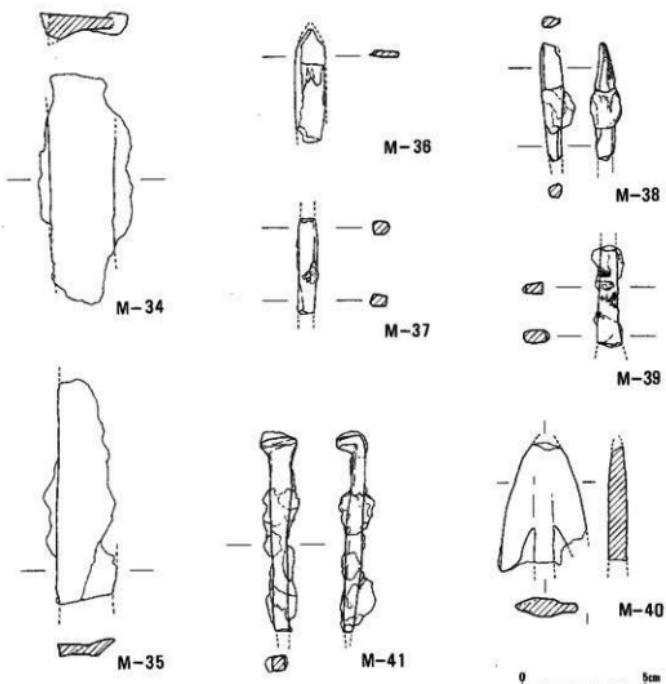
P-3は、口縁端部に注ぎ口を張り付けた、瓦賀の鉢である。内面はナデ、外面は、器面が著しく荒れている。褐色を呈し、ガラス質の砂粒を非常に多く含んでいる。用途としては、鍋が考えられ、近世から近代のものと思われる。

第21支群で出土した須恵器は、全体で見ると以下のことがいえる。环で見ると、口縁内面のかえりが高く直立するものが見られず、ケズリの痕跡を残すものに付いてもその範囲は非常に狭い。また、切り放しは、基本的にヘラを使っており、糸切りは見られない。この様なことから第21支群の須恵器は全てTK-217併行期のものとみられ、追葬の可能性は高いものの、その使用年代は、およそ7世紀台に限られるようである。第1号横穴墓で出土した土師器皿（H-2）も飛鳥Ⅲ期あたりに含まれるものと考えられ、上記の可能性を否定するものではない。

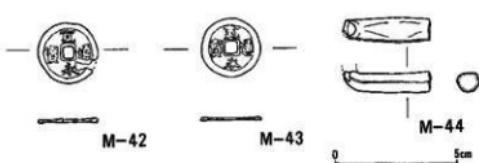
7世紀台に一応の使用を終えたと考えられる第21支群には、鎌倉時代に再び使用される時期がある。第6号横穴墓で見られる土師器碗（H-3）がそれで、およそ13世紀頃のものと考えられる。この時

期の土師器が
横穴墓から出
土するのは、
ここに限った
ことではなく、
大田市など石
⁽³⁾見東部に類例
が見られる。

金属器
第1号横穴
墓の前部か
ら後部にかけ、多くの
金属器が出土
している。図
示したものは、
全て鐵錠と考
えられるもの
である。全体
の分かるもの
(M-3・4)で
は、鎌身は、



第53図 第21支群第4・5号横穴墓出土金属器変遷図 (1 : 2)



第54図 第21支群出土金属器実測図 (1 : 2)

よると、矢柄に茎を差し込んで、糸で巻き、漆で固定したようである。M-3に見られるように、他の個体が銷び付いて付着している例があり、何点かまとめて副葬されたようである。

M-19~28は、第2号横穴墓から出土した。鉄鎌と考えられるものは、M-19~25で、第1号横穴墓で見られた、柳葉形の鎌身は見られない。M-19ではバチ形の、M-20では、背のある刀形の鎌身を持っている。M-25は、茎部の残るもので、第1号横穴墓のものと同様に矢柄の一部に糸、漆状の付着物が見られる。M-25茎の部分には、銷が付着しており、銷中に断面円形の棒状のものの跡が残されている。

M-26は、釘と思われるもので、断面方形を呈す。

M-27・28は、刀子と考えられるもので、膨らんで板状に剥離している部分も見られるが、刀身幅約13mmを測る。両闇と思われ、目釘穴は見えない。

第3号横穴墓からは、太刀(第52図)が出土している。残りが悪く、破片となって数点が出土したが、同一個体と考えられる。膨らんで、板状に剥離しており、接合できないが、全長は少なくとも50cm以上ある。刀身幅約25mmで、厚さは計測できない。大きく折れ曲がっているため定かでないが、背側の片闇と思われる。闇と思われる部位から26mmの位置に目釘穴が見える。茎に青色を呈す輪が付いている。長径34mm、短径23mmの梢円形を呈しており、厚さは、6~7mmである。リング部分の断面は1/4円形で、丸い部分が柄頭に向いている。材質は鑑定していないが、全面に緑青が浮いており、剥離した部分が黒色を呈する金属である。内径の大きさから言って、鍔には成り得ず、鐔としても小さすぎるため、柄か、柄頭の部品であろうか。

M-34~39は、第4号横穴墓から出土した。M-34・35は太刀と考えられるもので、非常に残りが悪い。刀身幅25mm、厚さ12mm前後を測るものと思われるが、板状に剥離しており、正確には計測できない。

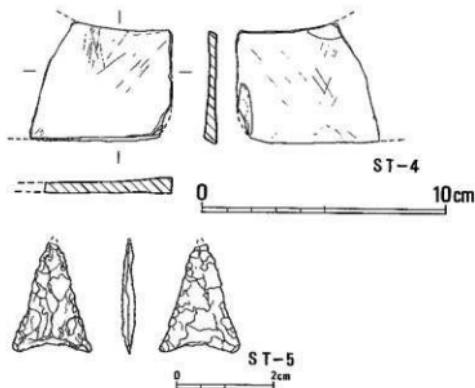
鉄鎌と思われる破片は4点出土している。M-36は、柳葉形をした小型の鎌身を持っており、鎌身幅12mmを測る。M-38は、小さなバチ形を呈する鎌身を持つ。全形を伺うことはできないが、いずれも、断面方形の長い頸部を持つものと思われる。

M-41は、鉄釘で、中央付近で1辺5mmの断面正方形、頭部近くで幅9mm、厚さ4mmを測る。頭部は折り曲げて潰した形になっており、隅丸方形を呈す。

第5号横穴墓からは、刺突部先端を欠く鉄鎌の鎌身部(M-40)が出土している。偏平な大型品で、長いかえりが付く。茎部の長さは明かでないが、断面方形を呈す。

以上が古墳時代の金属器である。これらの中で、もっと古い特徴を持つものが第5号横穴墓出土のM-40である。古い伝統的な形状を保った鉄鎌は、第21支群では他に出土しておらず、基本的には、鎌身部の小型化した長類のものである。大刀については、言及できないが、M-33に見られる、

柳葉形を呈する小型で厚手のもので、断面方形の長い頸部を持つ。明らかに形態の異なるものとしては、M-8が、鎌身に幅を持たない。また、M-16は、茎と頸部の間に両闇を備えている。M-4・7・9・10・14には、矢柄の一部が残存しており、それに



第55図 第21支群出土石器実測図 (ST4 1:2 ST5 1:1)

滅が著しく、字を読みとるのがやっとであり、字体の検討まで至らなかった。直径25mmを測る。

M-44は、第8号横穴墓で出土した煙管である。全面に緑青が浮いており、真鍮製と思われる。1側縁に鏽付けの痕跡が見える。

石 器

ST-4は、第7号横穴墓前部で出土した砥石である。1側縁を欠くが、残存長56mm、残存幅49mm、厚さ6mmを測る。各面とも使用されており、細かい擦痕が多く見えるほか、側縁部には深い傷が幾本も見える。灰色の硬い石材が使用されている。

ST-5は、第21支群黒色土中で出土した石鎌である。凹基式三角形鎌で、基部のえぐりが比較的深い。丁寧に調整されており、第1次剥離面は残していない。先端をわずかに欠くが、残存長23mm、幅16mm、厚さ2mmを測る。石材は安山岩を使用している。

第11トレンチ出土遺物

第11トレンチは、横穴墓群下方西側の水田中に設定した。検出遺構は無く、前述の通り横穴墓群以前の遺物が多く出土している。

繩文土器(ST-2~4)は3点を図示した。いずれも外面を条痕で仕上げるもので、深鉢であろう。J-2は、口縁部を残している。後期から晩期のものか。

Y-2は、弥生土器である。底径65mmに復元できる底部の小片で、体部外面に縱方向のヘラミガキ、内面をナナで調整する。

ST-6は、大型蛤刃石斧である。刃部等の主要部を欠損している。緑色の石材を使用する。

H-8は、土師器壺とした。口径約13cmに復元できる小型のもので、口縁端部に面を持つ。

H-9・10は、二重口縁を持つ十師器の甕である。H-9は、内面のケズリが頸屈曲部の下方まで降りるもので、肩部にくし書き直線文を施す。体部は、非常に薄く仕上げている。H-10は、屈曲部を外側に突出させるもので、口縁部を薄く直線的に作り、小さな面を持たせている。

金属製の輪に付いては、広島県高田郡甲田町法恩地南古墳に類例が見られる。⁽⁴⁾法恩地南古墳は、横穴式石室を主体部とする後期古墳で、6世紀後半から末頃と考えられている。石室内で出土した3本の直刀の内の1本がそれで、全長86.4cmを測る完形の直刀に環状金具2個が伴出している。この環状金具は、出土状況から柄に付属するものと考えられている。

そのほか、横穴墓から近世・近代の金属器も出土している。

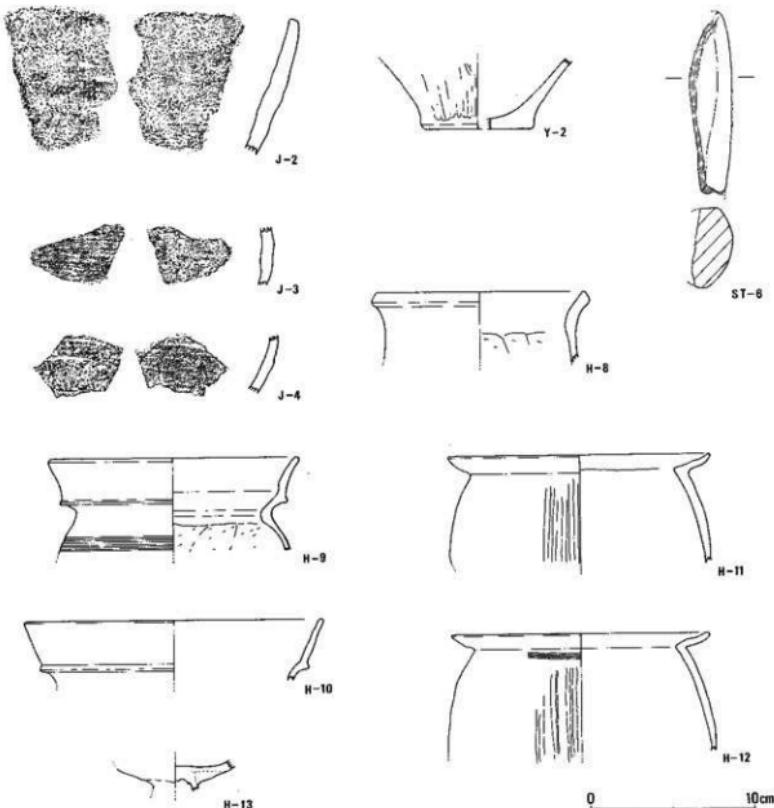
M-42・43は、第8号横穴墓で出土した寛永通寶である。2枚とも摩

H-11・12も土師器の甕である。体部外面には、縦方向に荒いハケメが施される。頸部で鋭く屈曲し、わずかに内湾して口縁部に至るが、口縁端部は内面側に鋭いアクセントを持つ。内面は、ナデに見える。口縁端部内面にアクセントを持つことから、近畿地方の影響を受けた土器であろうか。

H-13は、土師器高杯の小片である。全形は、想像できないが、脚取付部には中央に刺突痕を持つ。

これらの遺物は、ほとんどが砾層中からの出土で、绳文土器から土師器に至るまで層位の差は存在せず、全て流れ込みと判断される。従来出雲平野には绳文時代の遺跡は少ないと言られてきたが、この付近での绳文土器は、1975年に島根県教育委員会が行った調査で、三田谷I遺跡（三反谷遺跡）から確認されており、付近に绳文時代の集落の存在をうかがわせている。⁽⁵⁾

三田谷I遺跡は、绳文から中世に至る複合遺跡で、須恵器・土師器を中心とする良好な包含層を有すると考えられ、第11トレンチから西に500m程の位置と、非常に近いこともあり、現時点では第11ト



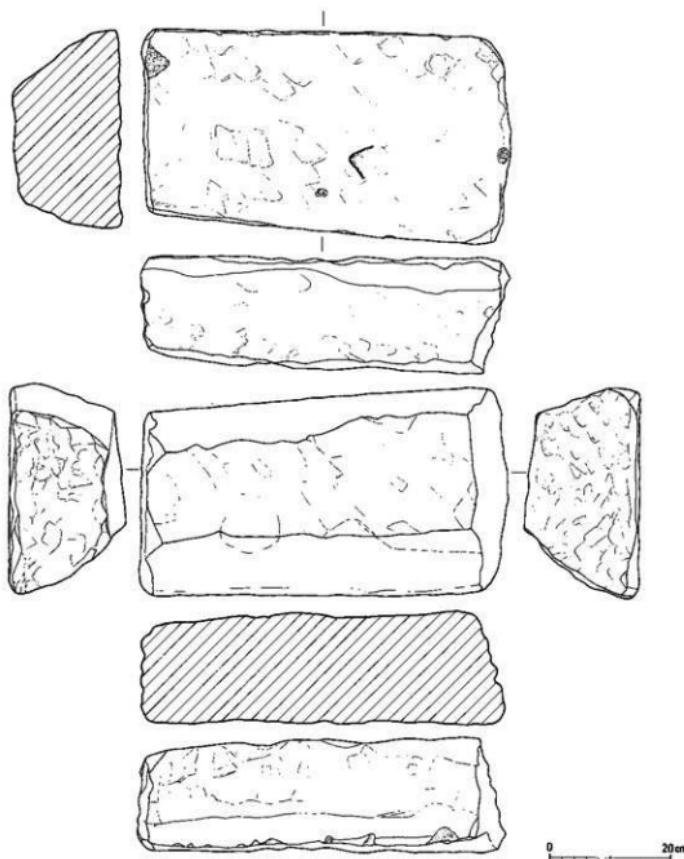
第56図 斐伊川放水路第11トレンチ出土遺物実測図（1：3）

レンチと一緒に遺跡である可能性がある。三田谷Ⅰ遺跡は、標高15m前後の位置にあり、第11トレーニングの位置する谷が神戸川に至る出口にあたっている。

第1号横穴墓出土石製品

第57・58図は、第1号横穴墓玄室内に置かれていた大型石製品である。第1号横穴墓玄室内に2個とも並べて置かれていたもので、出土状況から閉塞石とは考えにくい。検出当初は、棺台か石棺と想像したが、違うようである。

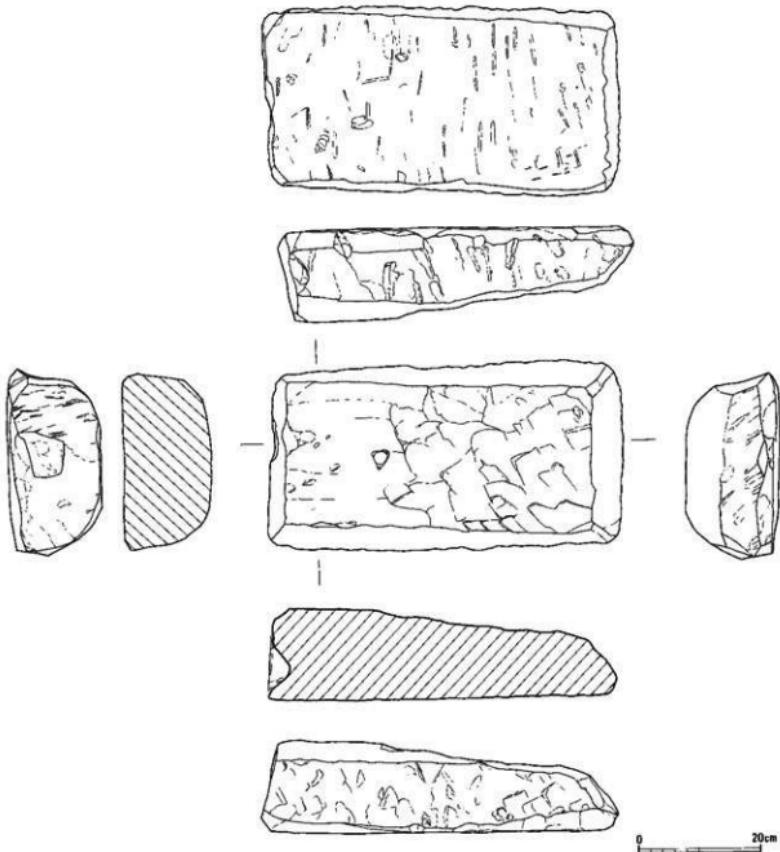
第57図は、玄室中央に、広い面を下にして、主軸方向に置かれていたもので、縦断面長方形、横断面6角形の細長い形状をしており、長さ約60cm、幅約33cm、高さ約18cmを測る。各面とも平のみ状工具で荒く削られ、その痕跡を非常に多く残しているが、両側面の狭い範囲のみは、丁寧に調整されて



第57図 第21支群第1号横穴墓出土石製品実測図1 (1:8)

おり、他の用途に使用された石製品の転用である可能性がある。石材は触ると砂が落ちるような脆いもので、砂岩質と思われる。

第58図は、第57図に平行に置かれていたもので、同様に、広い面を下に、高さの低い側を奥壁に向けていた。横断面は、かまぼこ形を呈しているがわずかに陵があり、第57図と同様の6角形を意識しているように感じる。縦断面は、片面が直立し、他の面が鋭く傾斜しており、その形状は、片刃摩製石斧を思わせる。図面中央の左約 $\frac{1}{8}$ にあたる部分のみ非常に丁寧に調整されているが、ほとんどの面で荒い平のみ状工具の痕跡を残している点は、第57図のものと同様である。端部の直立する面には、直径7cm、深さ4cm程の窪みが開いているが、窪みの中にはのみ痕が見られず、石材中の不純物（石？）が抜け落ちた跡と思われる。使用する石材は、横穴墓を掘削している岩とほぼ同様の凝灰岩で、わずかに不純物を含んでいる。



第58図 第21支群第1号横穴墓出土石製品実測図2 (1 : 8)

- 註 1 「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」 島根県教育委員会 1980年
- 註 2 「陰田』 米子市教育委員会 1984年
- 註 3 「大田市松田谷横穴群』 島根県教育委員会 1982年
『諸友大師山横穴群』 大田市教育委員会 1983年
『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 仁摩町教育委員会 1989年
- 註 4 「法恩寺地南古墳』 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 1984年
- 註 5 「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』 島根県教育委員会 1980年

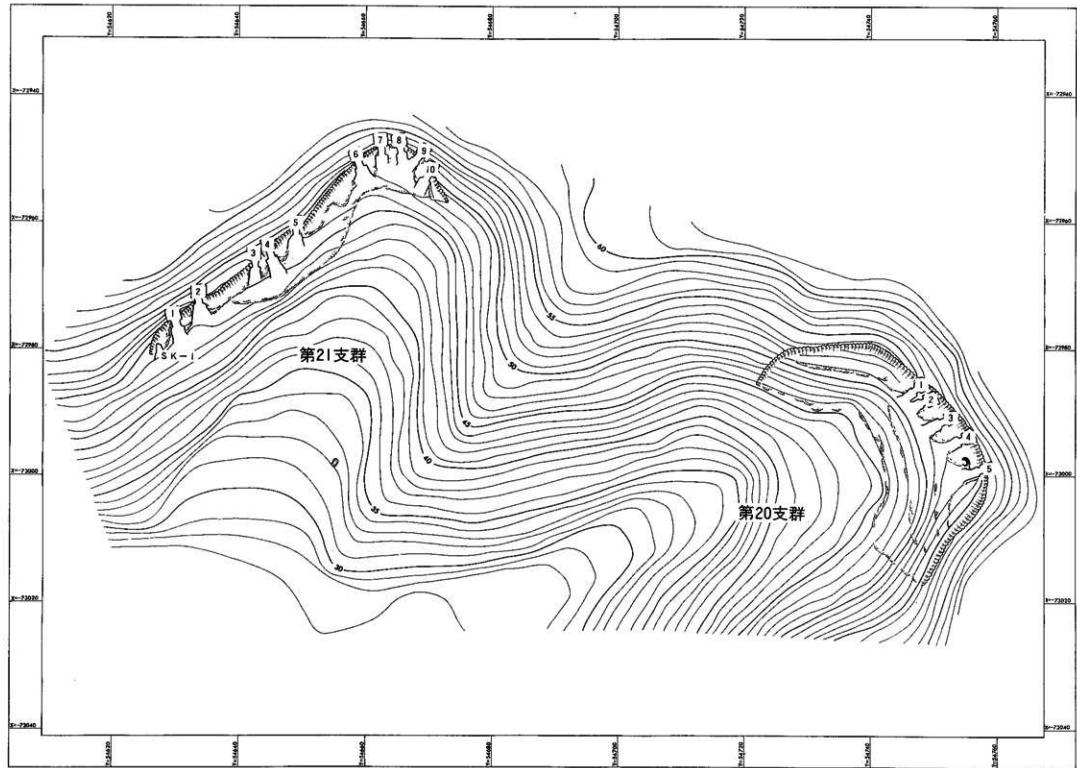
標本名	出土地点	層位	法	種	色調・動・構成	備考
SU-65	2号窓穴 裏 前部	縫合部	灰色	砂岩はほとんど含まない 良好	底面外縁に褐色自然鉱物付着	
SU-66	1・2号 窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を少量含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にケズリを有する 大升筋付ナメテ その他の細粒ナメテ 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-67						
SU-68	1・2号 窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を少額含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-69	1・2号 窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	灰白色	1mmまでの白い砂粒を少額含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-70	1号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mm以下の白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-71	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	暗褐色	1mmまでの白い砂粒を多く含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-72	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-73	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-74	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-75	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	0.5mm程度の粒を少し含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-76	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	0.5mm程度の粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-77	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-78	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-79	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-80	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	1mmまでの白い砂粒を含む 良好	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上
SU-81	3号窓穴 裏部	口縫合部 縫合部	褐色	0.5mm程度の粒を少し含む やや柔らか	天井縫合部に薄い茶色 天井縫合部にヘラ形記号あり	以上

標本番号	出所	標本	色調・触土・形状	備考	標本番号	出所	標本	色調・触土・焼成	備考	
SU-82	3号横穴 前庭部	高井 口径11mm 高さ10mm	灰褐色 白と黄褐色の帶状を含む 良好	透かしをもつ 目板ナナ 表面滑らか 且下	SU-105	5号横穴 前庭部	外 口径8mm 高さ8mm	灰白色 白色の微砂粒を含む 良好	白い粒を少しあ 目板ナナ 表面滑らか	良好 口縁部がわずかにくびれる 底面外側へうり切り 底面内面ナナ その他の目板ナナ 完全
SU-83	3号横穴 前庭部	高井 口径19mm 外 高さ10mm 底径7mm	暗赤色 表面は赤褐色の 日っぽい粒を含む 良好	表面は赤褐色に伴う 底面外側に 内面は目板へ切り 底面内面 ナナ その他の目板ナナ 且下	SU-106	5号横穴 前庭部	外 口径8mm 高さ8mm	暗赤色 表面に自然風景 3mm程度の砂粒（ガラス質）など 多くの粒を含む 良好	暗赤色より丸みをもつてたら ある底面外側・ラグズリ裏 底面内面はナナ 他は目板ナナ 且上	その他の目板ナナ 完全
SU-84	3号横穴 前庭部	高井 口径4mm 外 高さ3mm 底径2mm	褐色 表面は白と 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	透かしあり 1mm程度の外反風景に 赤い透かしをもつ 底面は丸くくざめる 目板ナナ 口縁部、底面下	SU-107	5号横穴 外	口径8mm 高さ8mm	暗赤色 表面に 1mm以下	平な底面 底面内面へうり切り その他の目板ナナ 完全	その他の目板ナナ 完全
SU-85	3号横穴 室内	高井 口径1mm 外 高さ1mm 底径1mm	褐色 1mmまでの白っぽい粒を含む 良好	1mmまでの白っぽい粒を含む 表面は丸く 内面は円文 且下	SU-108	5号横穴 前庭部	高井 口径8mm 高さ8mm	暗赤色 表面は 1mm以下	4時間スカン	
SU-86	4号横穴 前庭部	高井 口径9mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 白と やや軟質	表面は白と 0.5mm程度の白い粒を含む 底面はナナ 且下	SU-109	5号横穴 室内	高井 口径12mm 高さ12mm	暗赤色 表面は 1mm以下	透かしあり 同様ナナ 且下	透かしあり 同様ナナ 完全
SU-87	4号横穴 前庭部	高井 口径9mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 2mm以下の白い粒を含む 良好	天井内部へラケージのあとナナ 天井内部ナナ 他は目板ナナ 且下	SU-110	5号横穴 前庭部	高井 口径12mm 高さ12mm	暗赤色 表面は 1mm以下	同様ナナ 且下	同様ナナ 且下
SU-88	4号横穴 前庭部	高井 口径8mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 1.5mmまでの白い粒を含む 良好	天井内部へラケージのあとナナ 天井内部ナナ 他は目板ナナ 且下	SU-111	5号横穴 前庭部	高井 口径8mm 高さ8mm	暗赤色 表面は 1mm以下	口縁部がわずかにくびかる 白っぽい1mm程度の粒を含む 良好	口縁部がわずかにくびかる 表面は丸く 目板ナナ 且下
SU-89	4号横穴 前庭部	高井 口径8mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 1.5mmまでの白い粒を含む 良好	立ちあがりは内側へ傾く 底面 表面は丸く 内面は丸く その他の目板ナナ 且下	SU-112	5号横穴 前庭部	高井 口径8mm 高さ8mm	暗赤色 表面は 1mm以下	底面は丸く 表面は丸く 内面は丸く ケズリ その他の目板ナナ	底面は丸く 表面は丸く 内面は丸く ケズリ その他の目板ナナ
SU-90	4号横穴 前庭部	高井 口径9mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 白い粒を少し含む 良好	表面は丸く 内面は丸く 立ちあがりは内側へ傾く 且下	SU-113	5号横穴 前庭部	高井 口径8.5mm 高さ8.5mm	暗赤色 表面は 0.5mm程度の白い粒を少し含む 良好	口縁部が 口縁部が 丸く 目板ナナ 且下	口縁部が 丸く 目板ナナ 且下
SU-91	4号横穴 前庭部	高井 口径9mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 1mmまでの白い粒を含む 良好	天井内部へ丸のつまみを含む 天井内部ナナ パソ 天井内部へラケージを含む その他の目板ナナ 且下	SU-114	6号横穴 外	口径12mm 高さ12mm	暗赤色 表面は 1mm以下	底面外側へうり切り 底面内面ナナ 他は目板ナナ 且下	底面外側へうり切り 底面内面ナナ 他は目板ナナ 且下
SU-92	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 表面は 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	天井内部へラケージの重をはずす 底面外側へラケージの重をはずす その他の目板ナナ 且下	SU-115	6号横穴 外	口径12mm 高さ12mm	暗赤色 表面は 1mm以下	底面外側へうり切り 底面内面ナナ 他は目板ナナ 且下	底面外側へうり切り 底面内面ナナ 他は目板ナナ 且下
SU-93	5号横穴 前庭部	高井 口径12mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 表面は 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	天井内部へラケージ その他の目板ナナ 且下	SU-116	7号横穴 室内	高井 口径15mm 高さ15mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-94	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	天井内部へラケージ その他の目板ナナ 且下	SU-117	8号横穴 H-3 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-95	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 1mm-1.5mm程度の白い粒を含む 良好	口縁部は丸く 天井内部へラケージ その他の目板ナナ 且下	SU-118	9号横穴 H-4 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-96	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 0.3mm程度の白い粒を含む 良好	天井内部へラケージ その他の目板ナナ 且下	SU-119	10号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-97	5号横穴 室内	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 白い砂粒を含む 良好	平な天井 天井内部に切 離のうきさ 天井内部ナナ その他の目板ナナ 且下	SU-120	10号横穴 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-98	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 白い粒を少し含む 良好	立ちあがりは内側へ傾く 且下	SU-121	11号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-99	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 5mm程度の白い粒を含む 良好	立ちあがりは内側へ傾く 且下	SU-122	11号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-100	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 内面青灰色 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	立ちあがりは内側へやや傾 且下	SU-123	12号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-101	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 内面青灰色 1mm程度の白い粒を含む 良好	立ちあがりは内側へやや傾 且下	SU-124	13号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-102	5号横穴 前庭部	高井 口径9mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 白色の砂粒を少し含む 良好	立ちあがりは内側へ傾く 且下	SU-125	14号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-103	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	内面青灰色 内面青灰色 表面は 0.5mm程度の白い粒を含む 良好	天井表面は状のつまみ 天井内部には 天井内部へラケージの重を残す その他の目板ナナ 且下	SU-126	15号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下
SU-104	5号横穴 前庭部	高井 口径10mm 外 高さ3mm 底径3mm	褐色 1mm程度の白い粒を含む 良好	天井表面は状のつまみ 天井内部には 天井内部へラケージの重を残す その他の目板ナナ 且下	SU-127	16号横穴 H-5 前庭部	高井 口径10mm 高さ10mm	暗赤色 表面は 1mm以下	立派な天井 表面は丸く 且下	立派な天井 表面は丸く 且下

標示番号 測定番号	出土位置 測定番号	種類	性 量	色調・歯土・構成	備 考	標示番号 測定番号	出土位置 測定番号	種類	性 量	色調・歯土・構成	備 考
SU-125	江支郡 所塙	口徑110mm 底面20mm	灰色	1mm以下の砂合含 良好	えりをもつ 内側 回転ナメ	M-4	1号横穴 鋸歯	既存長60mm			木質あり
SU-126	江支郡 所塙	口徑100mm 底面16mm	内明灰色 外灰色 (黄色っぽい) -気泡16mm	2mm以下の砂合含 良好	えりをもつ 外側上部ケズ その他の砂合ナメ	M-5	1号横穴 鋸歯	既存長55mm			
SU-127	江支郡 所塙	口徑110mm 底面19mm	内明灰色 外灰色 -気泡19mm	1mm以下の砂合含 良好	えりをもつ 回転ナメ	M-6	1号横穴 鋸歯	既存長65mm			
SU-128	江支郡 所塙	底面24mm	黄系灰 良好	1mm以下の砂合含 良好	輪状つまみをもつ 外側へラブリの回転ナメ その他の砂合ナメ	M-7	1号横穴 鋸歯	既存長60mm			
SU-129	江支郡 所塙	底面54mm	内暗灰色 外暗灰色 1mm以下の砂合含	かえりをもつ 外側上部ケズ 下部-ラグゼリの回転ナメ 内側回転ナメ	M-8	1号横穴 鋸歯	既存長60mm				
SU-130	江支郡 所塙	口径104mm	外側暗灰色 内面青灰白色 2mmまでの粒を含む 良好	かえりをもつ 回転ナメ	M-9	1号横穴 鋸歯	既存長60mm				
SU-131	江支郡 所塙	口径80mm	外側灰褐色分離色 也是明灰色 良好	外側面へう振りの後 その他の砂合ナメ	M-10	1号横穴 鋸歯	既存長55mm				
SU-132	江支郡 所塙	口径50mm	反覆色 1mm程度の砂合を含む 良好	かえりをもつ すかに含む 良好	M-11	1号横穴 鋸歯	既存長60mm				
SU-133	江支郡 所塙	口径80mm 底面19mm	白色灰 1mm程度の砂合を含む 良好	外側-藍ナメ 外側側面、内側 側面回転ナメ 磨耗が激しい 以下	M-12	1号横穴 鋸歯	既存長55mm				表面がやや太く、わずかにねじ れている
SU-134	外 福	底面64mm 底面1.5mm 良好	明灰色 1mm程度の砂合含 良好	井戸孔上部ナメ その他の回転ナメ 内側部は小片	M-13	1号横穴 鋸歯	既存長60mm				
SU-135	高环	底面82mm	外側青灰白色 内面-基部青灰色 白色の小砂粒を少量含む 良好	エッジシザーキー 1~2万角か 磨耗ナメ	M-14	1号横穴 鋸歯	既存長55mm				
SU-136	江支郡 高环	底面115mm 底面	暗灰 1mm以下の砂合含 良好	輪状つまみ 回転ナメ 以下	M-15	1号横穴 鋸歯	既存長55mm				
SU-137	江支郡 高环	底面65mm	青灰-暗褐色 白色の砂合を含む 良好	内側へう振り 回転ナメ	M-16	1号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-138	江支郡 高环	底面65mm	明灰色 1mm程度の砂合を含む 良好	井戸孔内面ナメ その他の回転ナメ すかしもつ 2万角か?	M-17	1号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-139	江支郡 高环	底面56mm	内側青灰色 暗褐色 2mmまでの砂合を含む 良好	井戸孔回転ナメ 輪状つまみ 回転ナメ 以下	M-18	1号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-140	江支郡 高环	底面56mm	青灰色-暗褐色 白色の砂合を含む 良好	内側へう振り 回転ナメ	M-19	1号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-141	江支郡 高环	底面56mm 底径	灰色 一般無色 白色	輪状つまみ 回転ナメ 以下	M-20	1号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-142	江支郡 高环	口径12mm	灰色 外側は暗灰色 白色の砂合を含む 良好	内面ナメ 外側ヨコ2万角のナメ 白色の砂合をすかしもつ 良好 口縁内側へ片	M-21	1号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-143	江支郡 高环	口径17mm	白色 白色の小砂粒をすかしも含む 良好	口縁内側を中心とする褐色自然発 多量含む 外側の一部は竹管元が その他の砂合ナメ	M-22	3号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-144	江支郡 高	口径18mm	灰白色-青灰色 白色の砂合付有	内面-外側に沿 わざかに含む 良好	M-23	3号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-145	江支郡 高	口径115mm	暗青灰色-茶褐色 0.5mm以下の砂合を含む 良好	口縁部は外側回転ナメ 裏面は外側回転ナメ 内側は内側回転ナメ 内側回転ナメと外側回転ナメ 内側の一部は竹管元が その他の砂合ナメ	M-24	4号横穴 直刀	既存長55mm				
SU-146	江支郡 高	口径18mm	灰白色-青灰色 白色の砂合付有	内面-外側に沿 わざかに含む 良好	M-25	4号横穴 直刀	既存長55mm				
Y-1	外	外側青灰色 色-新青灰色 内-新青灰色	内-新青灰色-灰 褐色1~2mmの白色の砂合を含む 多く含む やや軟質か	内面へう振り 表面に良く成る	M-26	4号横穴 鋸歯	既存長47mm				
H-6	江支郡 小里	口径115mm	更青色 褐色 淡褐色	輪状つまみ 1mm程度の砂合を含む 良好	M-27	4号横穴 鋸歯	既存長45mm				
H-7	江支郡 小里	底面40mm	利赤褐色 褐色の砂合を含む 良好	表面不明	M-28	4号横穴 鋸歯	既存長45mm				
P-3	林2	口径310mm 底面	表面灰褐色 新青灰色 0.5mm以上の砂合を多く含む 良好	1mm程度の砂合を含む 表面は下部は調節 その他の砂合ナメ	M-29	5号横穴 鋸歯	既存長45mm				
M-3	1号横穴 鋸歯 削鉛	既存長55mm			M-30	4号横穴 鋸歯	既存長60mm				

地図番号 測量番号	出土位置	基盤 法 墓	色調・粒土・焼成	備 考
ST - 4	7号櫛穴 前壁	礫石	青灰色～暗緑色の石材	使用面5面以上
ST - 5	21支節	石通		安山岩製石通
J - 2	11トレンチ 壁脚		本色 1mまでの砂粒を多く含む	外表面は？内面ナメ 口縁部小片
J - 3	11トレンチ 壁脚		淡赤白色 1mまでの砂粒を多量に含む	外表面は、？以下 良好
J - 4	11トレンチ 壁脚		外表面本色 内面黒褐色 1m程度の砂粒を多く含む	外表面は？内面ナメか 良好 1m以下
Y - 2	11トレンチ 壁	底径65mm	外表面本色 内面灰褐色	外面ハラミガキ その音ナメ
H - 8	11トレンチ 壁	口径120mm	小砂粒を含む 良好	平滑面側に向ってやや傾く 底面褐色
H - 9	11トレンチ 壁	口径105mm	1m前後の砂粒を多く含む 良好	壁脚 1面 黒 口縁部ナメ 外面ケズリの度を むづかに考す? 内面ハラメナメ 口縁部小片
H - 10	11トレンチ 壁	口径170mm	黒褐色 小砂粒を多く含む 良好	複合口縁部は外側 口縁部小片 1m以下 ナメ
H - 11	11トレンチ 壁	口径150mm	灰褐色 白色小砂粒を多く含む 良好	口縁部は「く」の字形崩壊し、 やや円弧状に變形至る 口縁部ヨコナメ 内面ナメ 外底1mの廣さで5本程度のハケ バ(1m以下)廿と斜側か?
H - 12	11トレンチ 壁	口径150mm	灰褐色 白色小砂粒を多く含む 良好	口縁部(1番 - H - 11)と斜側か?
H - 13	11トレンチ 壁脚		灰褐色	深谷部と背面の塊 ナメ 1m以下
ST - 6	11トレンチ 石通		褐灰色の石材を使用	刃端に打痕がけずりに見られる 外面ともよく墨か墨痕は見え ない
M - 42	8号櫛穴 古鏡	素径25mm		
M - 43	8号櫛穴 支室内	古鏡	素径25mm	
M - 44	8号櫛穴 支室内	きせ	素径20mm	

第59図 上塙冶機穴群第20・21支群連接配置図 (1 : 600)



V 第21支群第10号横穴墓出土金糸について

第21支群第10号横穴墓からは、金糸が出土している。玄室内埋土をふろいに掛け検出したもので、総量は、0.46 g であった。掘りだした埋土中から出土したもので、厳密な出土位置は分からぬが、およそ、玄室内東側のベッド上、中央付近と思われる。

金糸は、薄い帶状にした金によりを掛け、巻いていった形状をしており、中空で、断面円形の金糸を作り出している。太さは約0.3mm前後で、長さは、微細な碎片から、長いもので15mm前後のものまである。この金糸を単位とし、コイル状の構造を造りだしたものが何点か認められる。

古墳時代の金糸に関しては、現在全国で9例を把握している。

大阪府高槻市の阿武山古墳は、直径約82mの円墳で、花崗岩と磚で築かれた石棺式石室を持っている。京都大学地震観測所敷地内にあるこの古墳は、昭和9年に石室が発見され、棺内の遺体の保存状況が非常に良好であったことと、玉枕をした飛び抜けた貴人と考えられること、三島郷が藤原氏ゆかりの地であること等から、藤原鎌足の墓ではないかと言う説が出され、注目された。

ここで出土した金糸は、報告書によると、「遺体の頭部から肩部にわたって、やや多量の金糸が遺存していたとの、肩甲骨の上のにのっていた樹皮の上にも金糸が遺存していた。それは、端が鍵手状に折り曲げられていた他は、定型をなさず、織物や縫飾ではなく、単に納骨のときの飾りとして置かれたものかと推測されている。」となっている。金糸については、厚さ約0.03mm、幅0.22～0.64mmの金箔を螺旋状に巻いた中空のもので、もと芯糸があったと考えられており、右巻きらしい。現在6本が保存されていると言うことである。この古墳では、周堀底から7世紀前半頃に位置付けられる須恵器が出土しており、7世紀代の古墳と考えられている。

大阪府南河内郡河南町の塙廻古墳も石棺式石室を持つ終末期古墳である。墳丘規模及び墳形は、既に付近が水田になっており確認されていないが、主体部は全長7.5mの花崗岩切り石による石棺式石室である。綠釉陶棺や漆塗龍棺の破片が見られる他、金象嵌鉄刀、七宝銀製飾金具、ガラス製玉類等豪華な副葬品を持っている。

金糸は、峠道付近を中心に、10本が出土している。薄い金箔を細く切り、ラセン状に巻き糸としたもので、太さ0.3～0.5mm、最長のもので長さ44mmを測る。右巻きと左巻きの両者がある。実見した4本は、全て右巻きで、中空の線状になっていた。各金糸は曲線を描くものが多く、ちぢれたようになつたものも見られた。

他にコイル状に巻かれた金線（ラセン状金線）が出土している。太さ約0.3mmの金線を内径約3mmのコイル状に10～13回転巻いたもので、左右両巻きが見られた。

この古墳は、追葬の形跡がなく7世紀第3四半期と考えられている。

加古川工業用水ダム占墳群の池尻15号墳は、兵庫県加古川市にある円墳で、径約35mを測る。全長15mにも及ぶ横穴式石室を主体部とし、金銅製の馬具や三輪玉等豊富な副葬品を持っている。

金糸は、絡み合った形で多量に出土しており、金糸の太さは0.5mmぐらいとされている。

この古墳は、追葬の形跡があり、使用年代は、6世紀初葉から7世紀末と比較的長く見られている。

この他、近畿地方では、三重県志島10号墳からの出土が知られているが、詳細は確認していない。千葉県木更津市の上総金鈴塚古墳は、全長95mの復元案がある大型の前方後円墳で、地籍図から周溝を巡らせるに考えられている。主体部は、小型の切り石を使用した狭長な横穴式石室で、組み合わせ式の箱型石棺が納められる他、羨道近くに木棺を乗せたと考えられる板石が検出されている。被葬者は3人と推定されており、6世紀末から7世紀中頃まで追葬が行われたらしい。^(註6)

副葬品には、鏡、玉類、環頭大刀をはじめとする15本にも及ぶ大刀類、馬具、金銅製飾りの他、金鉢があり、のことから、金鉢塚と呼ばれるようになったらしい。

金糸は、まさしく多量に出土している。太さ0.2~0.5mmで実見したものは右巻きであった。多くは金色を保っていたが、黒変しているものが多く、金以外の金属の割合が、比較的高いことが想像される。

瓢塚40号墳は、千葉県成田市にある、東西14m、南北11mの方墳で、幅6mの造り出しを持っている。^(註7) 主体部は雲母片岩の板石による組み合わせ式の箱形石棺で、この地方ではごく普通の構造・規模のものという。副葬品には、銀象嵌大刀、木製把頭、金銅鉢、馬具と見られる鉄製品の他、金銅飾板が見られる。

金糸は、総数48本で、その総延長は約75cmと言う。実見したものは太さ0.2~0.3mmの右巻きであった。伴出遺物は金銅飾り板で、これは、金銅の薄板造りで、列点文が施されており、冠の類である可能性が指摘されている。金糸は、冠の装飾として用いられた可能性も言われてはいるが、金糸の出土位置が、被葬者の足元付近と推定されていることから、明確には、用途は分からぬ。^(註8)

瓢塚40号墳は、この地方での平均的な規模の終末期古墳であるが、特徴的な副葬品を納めていることが注目される。築造時期に付いては、7世紀の初葉から前葉と考えられている。

この他、関東地方では、直径30mの円墳である群馬県高崎市の右川稻荷塚古墳からの出土例が言わわれているが、詳細は不明である。

上記7例はいずれも古墳からの出土であったが、山陰地方では、横穴墓から出土している。鳥取県西伯郡西伯町のマケン塚19号横穴墓玄室内からは、断片的なものを含め、14本の金糸が確認されている。^(註9)

マケン塚横穴墓群は、35基の横穴墓が検出されている。軟質花崗岩に掘削された横穴墓群で、後背墳丘を伴う、6世紀後半から7世紀中葉の横穴墓群である。玄室形態は、ほとんどが断面三角形の妻入りで、上塙治横穴群と異なり、狭長な前部を持つ。出土遺物は、須恵器をはじめ、鐵鎌・鐵刀・刀子・玉類・耳環等が出土しているが、特に卓越したものは見られない。

金糸は、II-C支群19号横穴墓から出土している。19号横穴墓は、後背墳丘である6号墳北側斜面に位置し、20・21号横穴墓と共に小支群を形成する。天井部は崩壊していたが、断面三角形と考えられ、平面プランは、ややいびつな正方形を呈している。玄室右奥側に人骨が集積しており、人骨の下から金糸が検出されている。この他、ふるいで検出されたものも含め、14本となった。

金糸は、厚さ0.01mm、幅0.4~0.5mmの板金を太さ0.3mmの中空に巻いたもので、1cm間に18~20回転右巻きに巻かれている。比較的長い金糸を見ると、曲線を描いているものもあり、刺繡するか縫いつけたものと推定されている。14本全てを加えると総延長は、37cmとなる。

全国での出土例を見ると、ほとんどが終末期の首長墓クラスの古墳であり、卓越した出土遺物の中の一つであることが分かる。ところが山陰地方では、横穴墓の出土であり、マケン堀横穴墓群での例にある通り、小地域の首長墓であるとも思えない。金糸そのものの製作過程については、上記各遺跡の報告で推定されはいるが、いずれの場合を見ても高度な技術を要すると想像されるもので、どこで製作され、どのような経路で入手できたのか、不明な点ばかりである。マケン堀19号横穴墓の被葬者も含め、山陰の横穴墓の被葬者が、なぜ、これだけの貴重品を入手し得たのか、今回は言及できない。

金糸そのものの希少性を含め、多くの問題を抱えてはいるが、今回は事実報告と、類例の照会に今後の調査・研究に期待したい。

註1 「阿武山古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』 大阪府教育委員会 1936年

註2 楠口隆康「阿武山古墳の金糸を巡って」「権原考古学研究所論集 第九」 1988年

註3 「阿武山古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』 大阪府教育委員会 1936年他

註4 北野耕平・富賀「大阪府平石塚古墳」「日本考古学年報32」1982年

『飛鳥時代の古墳』 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979年

註5 「印南野」 加古川市教育委員会 1965年

『日本の古代遺跡3 兵庫南部』 保育社 1984年

註6 「上総金鈴塚古墳」 千葉県教育委員会 1951年

註7 「公津原」 千葉県企業庁 1975年

註8 安藤鴻基「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」「千葉県立房総風土記の丘年報13」1990年

註9 「マケン堀古墳群 北福王寺遺跡」 西伯町教育委員会 1990年

VII まとめ

1. 遺構について

横穴墓以前の遺構

第20支群では、縄文土器・大型蛤刃石斧が、第21支群では石鎚が出土しているが、横穴墓以前と考えられる遺構は、検出できなかった。横穴墓に伴わない遺構としては、SK-1が考えられるが、土層堆積状況から横穴墓より新しい時期の遺構と考えられる。縄文・弥生時代の遺構の可能性としては、第20支群直前の平坦面が考えられるが、横穴墓造成地に削平されているのだろうか。横穴墓群下方の第11トレンチでは、包含層中より縄文・弥生上器が出土しているが、これらの遺物が、横穴墓付近からの流入とは思えず、さらに南の谷奥からのものと思える。

横穴墓の構造

第21支群の横穴墓は、その全てが四注式妻入りであった。これは、調査前から予想されていたことであり、上塙治横穴群では四注式妻入りが多いという一般的に言っていた通りの結果であったが、第20支群についてはその内の2基で平入り構造が見られた。各横穴墓の時期差について出土遺物で言及することはできない。

全て盗掘を受けており、また、封土の失われている上塙治横穴群第20・21支群に於いて、横穴墓の構築順序を探ることはほぼ絶望的である。その中で、第21支群では、第8号横穴墓と第9号横穴墓の前庭部に切り合い関係が見られた。第6～10号横穴墓の小支群を見ると、更に第6～8号横穴墓がほぼ主軸を等しくし、第9・10号横穴墓の主軸が近い様に見える。明確な切り合い関係こそ見えないものの、第10号横穴墓の前庭部は第8号横穴墓の干渉を受けているように見える。こうした仮定が全て正しかった場合、第21支群の東小支群では、第10号横穴墓が最初に構築され、続いて第9号、第8号の順に造られたのではないだろうか。

閉塞方法

第20支群では、その全ての横穴墓で、渓門付近に自然石を積んだ状態が見られ、自然石を積んで閉塞していたと考えられる。これに対し、第21支群では、第1～5号横穴墓で、切り石が残存しており、切り石によって閉塞していたことが確認された。第6～10号横穴墓では、閉塞石は残存していないものの、玄室内に礫が散在しているものが多く、第20支群と同様に、自然石を使用していた可能性がある。

横穴墓の中近世での使用

第21支群第7・8・10号横穴墓に見られる壁面の掘り込みは、その形から灯明を置く機能が考えられる。これらの横穴墓では、いずれも土師器小皿が出土しており、灯明を置いた可能性は、有力視できる。21支群第8号横穴墓では、回転糸切り底を有す土師器碗（H-4）が出土している。土師器小皿については、時期の検討できないが、H-4は回転糸切り底を有し、まっすぐに延びる体部が、口縁部直前でわずかに外反し、器高が高いという特徴から10～13世紀代と考えられる。現状では、閉塞

石がまったく無いために昼間は十分に明るく、灯明の必要は感じられないが、閉塞石が残存していた時点、もしくは、夜間の使用が考えられ、祭的な使用状況が想像される。中世の比較的早い時期の上器が横穴墓内で出土する例は、大田市、仁摩町など、石見東部に於いて類例が見られるが^(註1)いずれもその時期については、言及されていない。これらの横穴墓では、壁面の窓みは確認されていない。

松江市の中竹矢遺跡第3調査区5号穴では、横穴墓玄室内から更にトンネルを掘り、地中に部屋を造った施設が確認されている^(註2)。ここでは、明確に煤の付着が見られ、灯明を置いたことは、確実である。中竹矢遺跡では、中世関東で行われていた祭祀である、「矢倉」の存在を紹介するにとどめている。この遺構については、近世初頭の年代観が与えられているが、隣接地には、平安期の建物跡も検出されている。

2. 遺物について

上塩治横穴群第20・21支群の横穴墓は、全て盗掘を受け、開口していたため、出土した遺物が全ての遺物であるとは思えない。そうした限られた資料の中で横穴墓の時期を推定することは誠に心苦しい限りであるが、断片的に言えることを考えてみたい。

古墳時代の遺物

上塩治横穴群第20・21支群出土の須恵器は、基本的にはTK217併行期のものに限られ、TK209併行期のものは含まない。

- (1) 具体的には、壺では、口縁内面のかえりが高く直立するものは見られず、最も古いと考えられるもので、かえりが直立し、口縁端部よりわずかに高くなるもの(SU-36等)がある。この段階の遺物は、上塩治横穴群第20・21支群では、きわめて少ない。
- (2) 次の段階のものとしては、かえりが内傾する壺(SU-69等)と、壺と蓋が逆転する(SU-104等)時期のものである。SU-69では、かえりが非常に小さくなり、内傾して高さを持たない。これに組み合うと思われる蓋では、ケズリの範囲が極端に狭くなり、全体に丸みを帯びたプロポーションになっている。また、SU-104では、蓋と身が逆転し、擬宝珠状つまみを備える。比較的器高が高く丸みを帯びたプロポーションである。また、SU-5等の様に、プロポーションがほぼ同様で、輪状つまみを持つものが見られ、擬宝珠状つまみも、輪状つまみも時期差は無いものと思われる。SU-2のようなつまみの無い蓋も、この段階のものと思われる。
- (3) 次の段階としては、蓋のかえりが極端に小型化する段階である。この段階に該当するものは、破片が多く、断片的な情報から想像する。SU-45~47等、「1縁部の小片」となっているものが典型的なものと考えられるが、近いものとして、SU-103が挙げられる。口縁端部の返りは極端に小型化し、頂部が平坦になり、体部中央で、屈曲して口縁に至るプロポーションを持つもので、輪状つまみを持つものと思われる。
- (4) 上塩治横穴群第20・21支群での最後の段階としては、口縁内面のかえりを喪失する段階で、SU-78等がある。輪状つまみは、小型化し、断面では、小さな突起となって見える。全体に器高が低く、頂部の平坦面から口縁部近くまで、緩やかに屈曲する。口縁端部は、折れ曲がりかえりを持たない。これらの蓋に組み合う壺としては、SU-83等、低い高台を持つものであ

ろう。

上記4段階は、およそ飛鳥Ⅰ～Ⅴ期に含まれるものと思われ、実年代としては、7世紀初頭から末の年代が考えられる。

中世の遺物

第21支群第6号横穴墓では、土師器坏が出土している。底部に回転糸切り痕を残し、高台を持たず、体部が直線的に立ち上がる。出雲地方では、回転糸切り技法の使用開始がきわめて早く、丹塗りの土師器に回転台成形、糸切りの使用が見られ、中世には、同様の技法が続いている。伯耆国庁等での例を見ると、10世紀前半頃から回転糸切り底が出現するようである。^(註4) この頃の坏類は、器高に対し、底部が広いものが多く、13世紀頃にかけて徐々に底径が小さくなって行くようで、H-4とはほぼ同様の器形を持つものとしては、米子市の青木遺跡HSX-69辺りが近いものと思われる。青木遺跡HSX-^(註5) 69は、勝間田産と見られる須恵器甕と共に伴しており、13世紀頃と考えられる。

上塩治横穴群第20・21支群は、7世紀初頭に構築が始まり、7世紀末まで追葬が行われたと思われる。その後、中世に何らかの形で再利用され、付近は、近世以後、開墾の手が入って行ったようである。今回の調査では、横穴墓の具体的な構築方法について確認することは出来なかった、また、盗掘により、追葬の具体的な状況を確認することもできなかった。これらのことと今後の課題としたい。将来、上塩治横穴群の他の支群の発掘調査によって横穴墓のみの構築順序に留まらず、支群単位での時期、性格が解明されることを期待する。

註1 「大田市松田谷横穴群」 島根県教育委員会 1982年

「諸友大師山横穴群」 大田市教育委員会 1983年

「仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 仁摩町教育委員会 1989年

註2 「一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X」 島根県教育委員会 1992年

註3 古墳時代の須恵器に関しては、以下の報告、論文を参考にした。

「高広遺跡発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1984年

柳浦俊一「山陰地方の須恵器生産」「山陰考古学の諸問題」 1983年

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「島根考古学会誌 第11集」 1994年

『都城の土器集成』 古代の上器研究会編 1992年

註4 言3文献を参考にした。

註5 武田祐彰「中国地方に於ける回転台土師器の様相」「第12回中世上器研究集会報告資料」 1993年

註6 『伯耆国庁跡発掘調査概報(第4次)』 倉吉市教育委員会 1976年

『伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)』 倉吉市教育委員会 1978年

橋本久和「山陰の古代・中世上器の概要」「鳥取埋文ニュースNo36」 1993年

註7 「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 鳥取県教育委員会 1978年

VII 島根県出雲市上塩治10号横穴墓出土金糸の材質と製作技法について

奈良国立文化財研究所 村 上 隆

i) はじめに

わが国で出土した古代の金糸は、畿内では大阪府高槻市阿武山古墳など、関東では千葉県木更津市金鈴塚古墳など、数カ所での事例があるに過ぎない。今回、島根県出雲市上塩治10号横穴墓から出土した金糸は、鳥取県西伯町マケン堀19号横穴墓に続き山陰地方では二例目である。しかも、山陰地方における二事例がどちらも7世紀前半の横穴墓からの出土という点は大変興味深い。本稿では、島根県出雲市上塩治10号横穴墓から出土した金糸を中心に材質と構造の調査を報告するとともに、古代金糸の製作技法についても考察を加えた。

ii) 分析方法

金糸の材質分析には、㈱テクノス製ミクロ蛍光X線分析装置TX550を使用した。この装置はエネルギー分散型、分析対象物に照射するX線ビームを $100\text{ }\mu\text{m}\phi$ まで絞れるため、非破壊的手法で迅速に遺物の細部を分析できることを特徴とする。分析条件は、管電圧40kV、電流0.5mA。測定時間は500秒を標準とした。また、金糸の表面状態観察及び製作技法の推定には、㈱日本電子製走査型電子顕微鏡JXM840を用いた。観察条件は、加速電圧15kV、電流 $1\times 10^{-9}\text{ A}$ 。金糸を複雑に巻き込んだコイル状構造体の内部構造観察には、㈱アンドレックス社製マイクロフォーカスX線ラジオグラフィー装置を用いた。X線源の焦点が $10\text{ }\mu\text{m}\phi$ と小さいため、これまで観察できにくかった微細構造まで探ることが可能となる。撮影条件は、電圧170kV、電流0.3mAである。

iii) 結果及び考察

(a) 金糸の構造

上塩治10号横穴墓から出土した金糸は、電子顕微鏡の観察により、厚さ約 $10\text{ }\mu\text{m}$ (0.01mm)、幅0.5~0.8mmの細いリボン状の金を螺旋状に巻いた構造をしていることがわかった(写真1)。ただし、埋蔵中にオリジナルの形が変形しているものが多く、製作当初の形を保っているものはほとんどない状態である。長いものでも5cm程度であるが、切れ切れになっているため正確な長さはわからない。当初は芯に繊維があったという考え方もあるが、現在のところ繊維質の遺存は確認できていない。すなわち、基本的に中空の状態である。

この上塩治10号横穴墓から出土した金糸の、他の出土金糸と異なる大きな特徴に、螺旋に巻き上げた金糸をさらに巻いて作った長さ約1.2cm、太さ約2mmのコイル状構造体が挙げられる。写真2に電子顕微鏡によって観察したコイル状構造体の全貌を示す。このコイル状構造体は、形が崩れているものも含めると数点出土している。マイクロフォーカスX線ラジオグラフィーによる観察(写真3)から、一本の螺旋状金糸を1cm程度の長さで二~三重に折り束ね、それを芯にして、続けてその上にコイル状に巻いていることが明らかになった。この構造は、古代金糸の用途を探る上で重要な特徴と考えられる。

えられるが、今のところ類例を確認できていない。今後、日本国内ばかりではなく、西アジアから東アジアにかけての出土事例や、伝世品も含めた詳しい調査が必要であろう。

(b) 材質

上塩治10号横穴墓から出土した金糸を非破壊的手法によって蛍光X線分析装置で分析した結果、金約96%、4%弱程度の銀と微量の銅を含むことがわかった。金の純度は大変高く、約23金（純金は24金）に近い。純金では柔らかすぎるが、少量の銀と微量の銅が入ることで延展性を下げずに硬度を上げ、薄く伸びやすい割には切れにくくなる。現在製作されている金箔は、最高0.1μmまでの薄さを要求されるが、金95%前後に銀が5%程度含まれているのが一般的である。この類似性は、古代において、すでに金合金の加工性を考慮した材質調整技術が発達していた可能性を示唆するものと考えられ興味深い。因みに、同じく山陰地方の横穴墓、鳥取県西伯町マケン堀19号墓から出土した金糸も金約97%、3%程度の銀と微量の銅を含む。上塩治10号墓から出土した金糸同様、銀と微量の銅を含んでいる。先に述べた様に用途を考慮して何らかの材質調整が人為的に行われたのか、今後の検討を要する問題である。

(c) 製作技法

上塩治10号横穴墓から出土した古代金糸がどのように製作されたか、たいへん興味あるところである。近代から現代にかけて行われてきたというダイスを用いた線引きによる金糸の製作技法についてはこれまでにも紹介されているが^(註1)、この技法が古代においても行われていたかどうか検証されるには至っていない。今回、上塩治10号横穴墓から出土した金糸の電子顕微鏡による表面精査により、古代金糸の製作技法を解明する手がかりを得ることができた。注目すべき特徴はリボンの端面にある。写真4に見られるように、表面に垂直に切り落とされた痕跡が端面に見られ、エッジが立った状態であった。さらに、螺旋構造の内壁には、焼純された状態の10μm程度の大きさの結晶粒が遺存しているものも認められた（写真5）。この特徴は、鳥取県西伯町マケン堀19号横穴墓出土の金糸にも同様に見られた。すなわち、これは線引きされた細線をたたいて作ったものではなく、あらかじめ用意した10μm程度の薄板を鋭利な道具で幅0.8mm程度の細いリボン状に裁ち切り、それを螺旋状に巻いたものではないかと想定される。

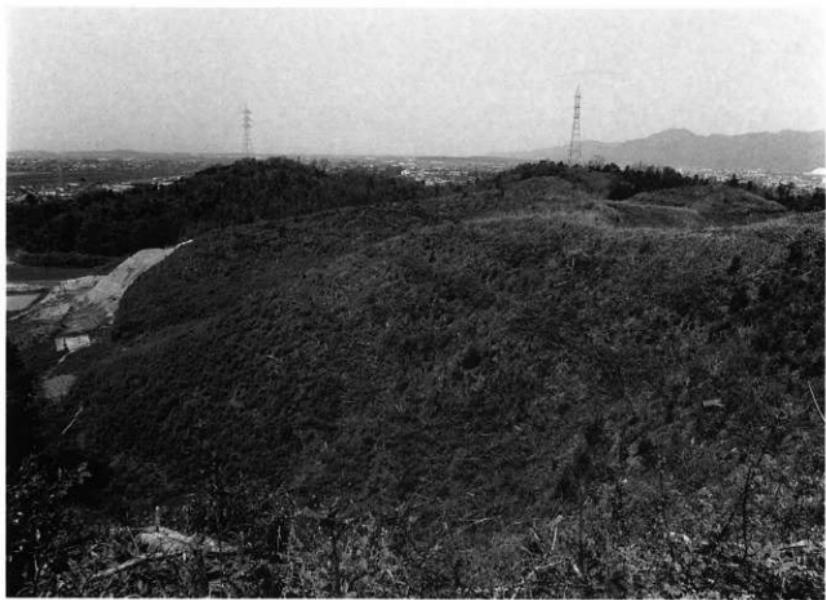
iv) まとめ

上塩治10号横穴墓から出土した古代金糸の材質・構造を調査する中で、その製作技法を解明する糸口を見いだせたことは今回の調査の大きな収穫であった。今後、分析事例を増やし、金糸の製作技法の詳細に迫ると共に、その地域性や時代性も解明していきたい、と考えている。

註1) 「マケン堀古墳群・北福王寺遺跡」（西伯町教育委員会）（1990）における中原斉「金糸」の項

（P93～94）の註1を参照。

写 真 図 版



上塙治横穴群第20支群調査前全景

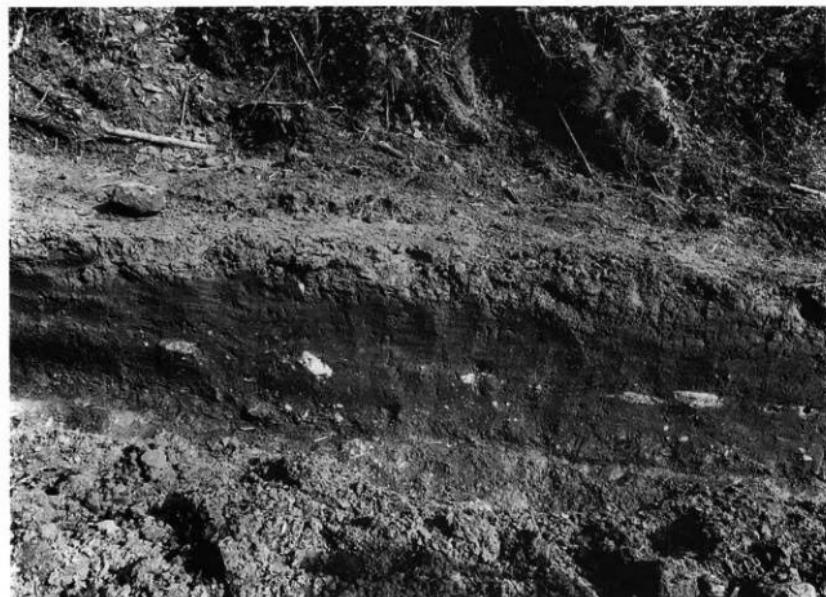


上塙治横穴群第21支群調査前全景

図版 2



斐伊川放水路第15トレンチ土層断面（西から）



斐伊川放水路第14トレンチ土層断面（西から）



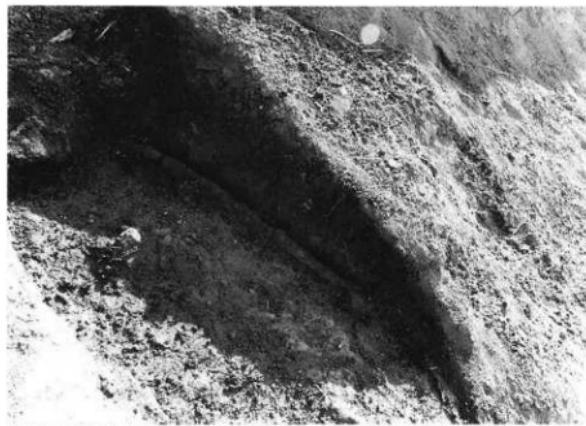
第1号横穴墓検出状況



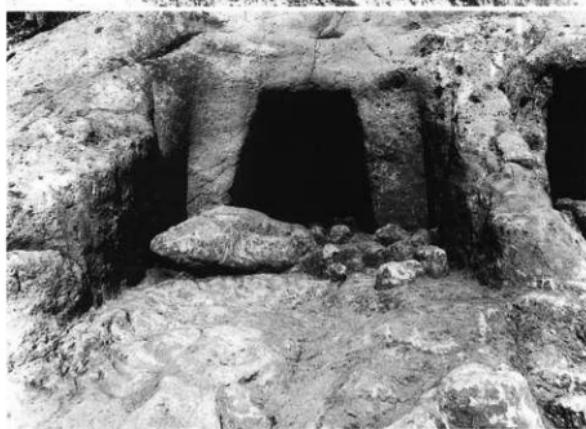
第1号横穴墓土層断面



太刀（M1）出土状況



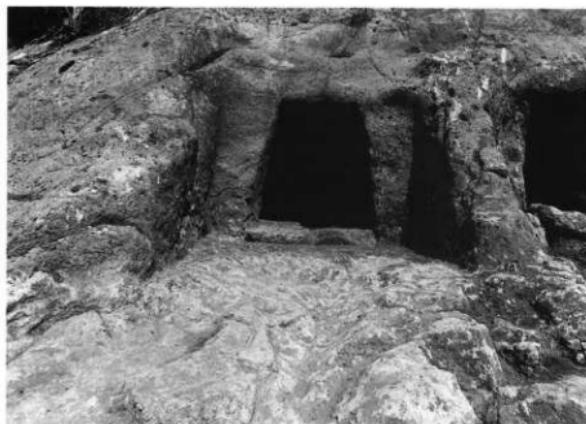
第1号横穴墓土層断面



第1号横穴墓閉塞状況



第1号横穴墓遺物出土状況



第1号横穴墓前部完掘状況



第1号横穴墓玄室内



第1号横穴墓奥壁～西壁

图版 6



第 2 号横穴墓出土状况



第 2 号横穴墓闭塞状况



第 2 号横穴墓遗物出土状况



图版 8



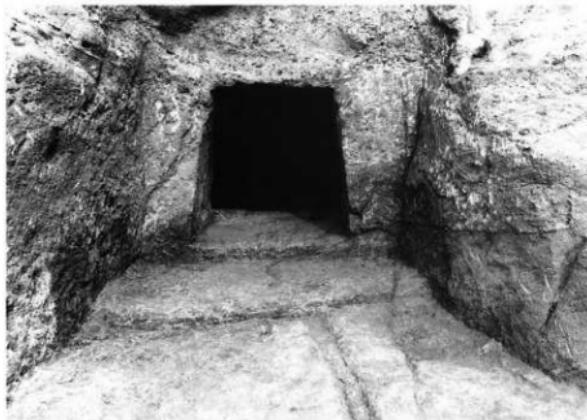
第3号横穴墓挖出状况



第3号横穴墓閉塞状况



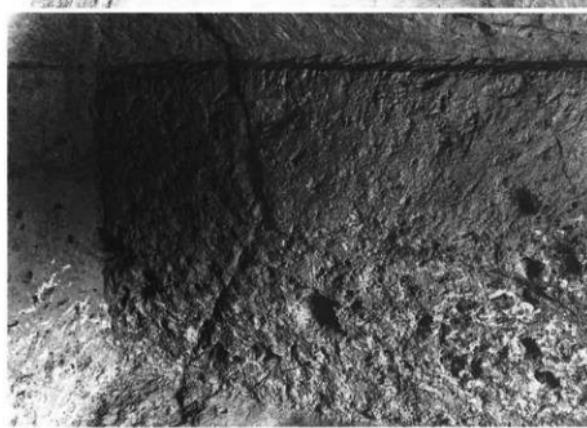
第3号横穴墓土层断面



第3号横穴墓前庭部完掘状況



第3号横穴墓玄室内



第3号横穴墓東壁



第4号横穴墓土層断面



第4号横穴墓閉塞状況



第4号横穴墓前庭部完掘状況



第4号横穴墓羨門



第4号横穴墓玄室内



第4号横穴墓東壁

图版12



第5号横穴墓閉塞状况



第5号横穴墓土层断面



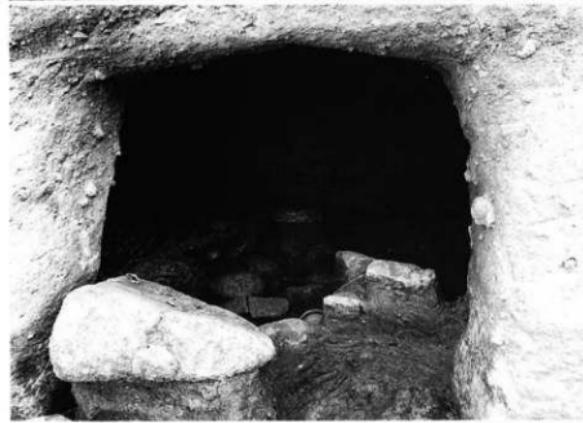
第5号横穴墓前庭部
遗物出土状况



第5号横穴墓前部
遺物出土状況



第5号横穴墓作業風景



第5号横穴墓玄室内



第5号横穴墓前庭部完掘状況



第5号横穴墓玄室内



第5号横穴墓東壁



第20支群南壁円形刻文全景



第20支群南壁円形刻文(1)



第20支群南壁円形刻文(2)

图版16



第20支群横穴墓下方斜面土层
堆积状况



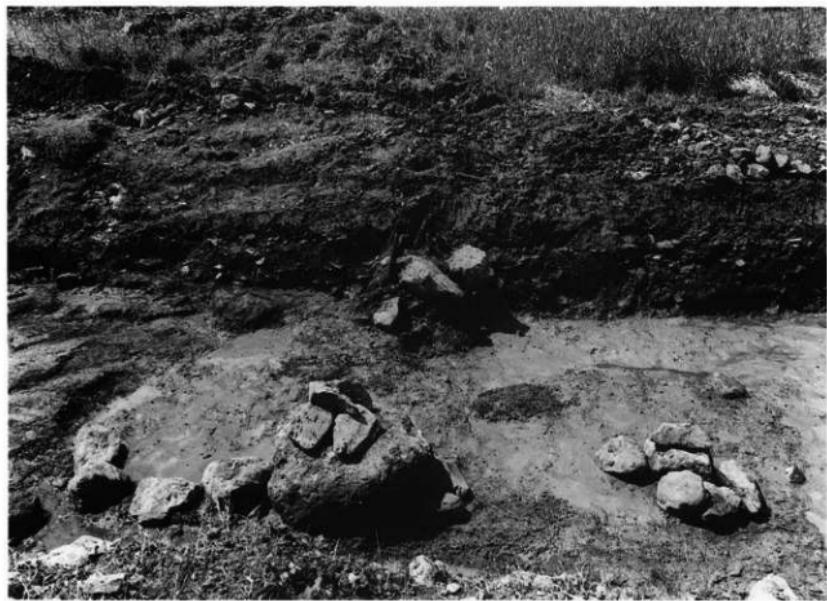
第20支群全景



第20支群近景



斐伊川放水路第11トレンチ全景



斐伊川放水路第11トレンチ土層断面（北から）



斐伊川放水路第13トレンチ土層断面（西から）



斐伊川放水路第12トレンチ土層断面（西から）



第1号横穴墓土層断面



第1号横穴墓閉塞状況



第1号横穴墓全景



第1号横穴墓前部完掘状況



第1号横穴墓玄室内



第1号横穴墓奥壁～南壁



图版22



第2号横穴墓前庭部完掘状況



第2号横穴墓玄室内



第2号横穴墓奥壁～南壁



第3号横穴墓土層断面



第3号横穴墓閉塞状況



第3号横穴墓閉塞状況



第3号横穴墓前庭部



第3号横穴墓閉塞石



第3号横穴墓遺物（M-33）
出土状況



第3号横穴墓前部完掘状況



第3号横穴墓玄室内



第3号横穴墓北壁

図版26



第4号横穴墓土層断面



第4号横穴墓検出状況



第4号横穴墓閉塞状況